

楽しいお買い物はマツザカヤ



能 楽 の 友

題字は熱田神宮 塚田官司筆

発行 能 楽 の 友
 名古屋市中区吹上本町2-2
 (郵便番号 464)
 電話 (731) 7 9 8
 振替口座 名古屋 3 6 3 9
 購読料 1年 500円
 郵送の場合 1年 800円
 一 部 50円

演能カレンダー

(熱田神宮能楽殿)

[54年1月]

- 3日(水) 能楽協会名古屋支部新年開初式 (協会関係者)
- 6日(土) 学生能 (来場歓迎)
- 7日(日) 青陽会定期能 (有料) (番組①面)
- 15日(祝) 清韻会大会 (来場歓迎) (番組②面)
- 20日(土) 梅田邦久後援会能 (要招待券)
- 21日(日) 熱田新春能 (来場歓迎)

[2月]

- 4日(日) 宝生会定式能 (有料)
- 10日(土) 西陵高校能鑑賞会 (非公開)
- 11日(祭) 観世会定式能 (有料)
- 12日(休) 柳原富司忠敬分十周年記念能 (有料) (番組③面)
- 17日(土) 観世九奉会定期能 (有料)

[3月]

- 4日(日) 大蔵狂言会 (来場歓迎)
- 11日(日) 梅鑑会能 (有料)
- 18日(日) 泉会春の大会 (来場歓迎)
- 21日(祝) 壺泉会春の会 (来場歓迎)
- 24日(土) 観世会土曜定式能 (有料)

[4月]

- 1日(日) 謡楽会大会 (来場歓迎)
- 8日(日) 名古屋観世会定式能 (有料)
- 15日(日) 藤田昭彦後援会能 (有料)

(演能変更の際はご了承下さい)

芸の心を求めて

昭和54年を迎える

新しい胎動に期待

新しい昭和五十四年、不確実性の時代といわれる現代のなかで、大きな変化の波をうけつつ、能楽界も新たな年への希望に明けました。

過ぎし昭和五十三年は、中部能楽界としても、さまざまな楽しみと喜びの交錯により、人々の心と歳月の重さを刻みこむものでもあった。これらをふまえて新しい年のいとなみはこうした歩みの一つ一つの凝集となつて表されていくものでありたい。

多様化、複雑化の世情のなかで「芸術」は精神的な充実感をもたらす。

観世会定式能は、ことしから土曜定式能(年四回)を加えて年間九回の演能となり、東西との交流のなかに一層の充実感が期待される。宝生会定式能も恒例どおり、

年三回の上演。新春二月には、小鼓方・柳原富司忠敬分十周年記念能で、観世静夫師による「道成寺」上演。さらに笛方藤田昭彦後援会としてこの四月には初の後援会能が企画され、片山博太郎師の「三輪」白式神楽の太曲、観世静夫師「天鼓」弄鼓之舞、ワキ方唯子方に各流の宗家の出演、さらに宗家藤田六郎兵衛師が観世鏡之丞師とともに演ずる一管独吟「芭蕉」が予定されている。また各流各社の大会などことしの演能にもまた期待は大きい。

本紙もまたこの一年、いささかなりとも能楽愛好者の友としてすすんでいきたい。

旧年によせられたご厚情を深くおねがいする次第である。

謹賀新年

熱田神宮 宮司 篠田康雄
 権宮司 長谷晴男

観世元昭 中日文化センター特別教室	幽詠会 片山博太郎	梅若万三郎 梅若万三郎 梅若万三郎	財団法人 観世能楽会 橋岡香会	井上嘉久 井上嘉久	梅若六郎 梅若六郎	名古屋観世会 大槻清韻会 大槻秀夫 大槻文藏	観世元正 東京都渋谷区恵比寿南一丁目二十番一十四	武田太加志 名古屋東区葵二丁目一九 吉田義正 方	大槻清韻会 大槻秀夫 大槻文藏	幽花会 片山慶次郎	大西信久 大西智久	武田諷楽会 武田小兵衛 武田欣司 武田邦弘	井戸良造 井戸和男	財団法人 鎌倉能舞台 中森貫太 中森貫太	千248 鎌倉市長谷三丁目一十三 電話(〇四六七)五五五七	千603 京都市北区小山下花ノ木町二一 電話(三二二)五一四四番	千530 京都市北区中崎西2丁目3-17	千604 京都市北区紫野下鳥田町六 電話(七三三)四七七八	千662 西宮市南郷町五丁目二二 電話(七三三)四七七八	名古屋橋岡会 名古屋東区丸屋町五ノ三三五 山田紀子方 上田鏡正会能楽堂 社団法人 観正会 上田 照也	大槻清韻会 大槻秀夫 大槻文藏	幽花会 片山慶次郎	大西信久 大西智久	武田諷楽会 武田小兵衛 武田欣司 武田邦弘	井戸良造 井戸和男	財団法人 鎌倉能舞台 中森貫太 中森貫太	千248 鎌倉市長谷三丁目一十三 電話(〇四六七)五五五七
----------------------	--------------	-------------------------	--------------------	--------------	--------------	---------------------------------	-----------------------------	--------------------------------	-----------------------	--------------	--------------	--------------------------------	--------------	----------------------------	-------------------------------------	--	-------------------------	-------------------------------------	------------------------------------	---	-----------------------	--------------	--------------	--------------------------------	--------------	----------------------------	-------------------------------------

・観世流・生駒美代子師
 観世流シテ方・生駒美代子師は
 このたび一月から「生駒里翠(り
 すい)」と改名された。

電話(三三二)五五五七

本 店 熱田区神戸町三四 電話(731)8686、8
 神宮東門店 熱田区新宮坂町一 電話(731)5598(代表)

百 観 世
 宗 宗
 十松金初井
 千 101 東京都
 千 604 京都市

仕舞三 北輪 青井 佐季 山本 正人 近藤 恵子 殿谷 恵子 寺西 繁子 貞子 山本 正人

能 船 弁 慶 西村 欽也 河村 總一郎 後藤 孝一郎 藤田 昭彦 鬼頭 喜太郎 藤田 昭彦 鬼頭 喜太郎 藤田 昭彦 鬼頭 喜太郎

邦 謡 会 能 一月二十日(土)午後一時始 熱田 神宮 能楽 殿 主催 名古屋 清韻 会 補導 大槻 秀夫

能 狸 々 乱 今沢 美和 西村 欽也 吉田 定男 助川 童夫 後藤 孝一郎 藤田 昭彦 鬼頭 喜太郎 藤田 昭彦 鬼頭 喜太郎

舞 子 老 野 守 松 原 信夫 吉田 定男 助川 童夫 山本 正人 近藤 恵子 殿谷 恵子 寺西 繁子 貞子 山本 正人

能 熊 野 西村 欽也 河村 總一郎 後藤 孝一郎 藤田 昭彦 鬼頭 喜太郎 藤田 昭彦 鬼頭 喜太郎 藤田 昭彦 鬼頭 喜太郎

熱 田 新 春 能 一月二十一日(日)午前九時半始 熱田 神宮 能楽 殿 主催 邦 謡 会

〔要招待券〕 招待券は邦謡会(〇五二)八四一四六三二・七八一三〇一七 又は熱田神宮能楽殿(名古屋市中区熱田区新宮坂町一)電話六七二二

壺 泉 会 泉 嘉 夫 大垣 浦 声 会 菅 雪 会 後 藤 契 雲 名古屋市中区栄三三三三〇

重 陽 会 菊 池 重 郷 大 山 市 犬 山 字 相 生 五 九 一 一 六 電 話 (〇 五 六 八) 〇 四 五 〇 一 番

緑 名 会 田 中 武 尾 張 旭 市 城 山 町 三 ツ 池 六 一 九 八 電 話 (〇 五 六 一 五) 〇 三 三 〇 四 番

幸 誦 会 近 藤 幸 江 岡 崎 市 鴨 田 本 町 十 一 番 地 三 電 話 (〇 五 六 四) 〇 二 五 二 九

翠 誦 会 生 駒 里 翠 名 古 屋 市 名 東 区 猪 高 町 上 社 社 屋 間 84 電 話 (〇 三 〇 三) 七 〇 三 一 五 七 一 七 番

清 誦 会 今 村 嘉 勇 岩 倉 市 東 新 町 下 地 52 一 〇 一

宝 生 英 雄 金 剛 永 謹 名 古 屋 市 緑 区 鴨 海 町 池 上 16 一 10 電 話 (八 九 六) 三 四 二 八 番

近 藤 乾 三 乾 之 助 東 京 都 豊 島 区 果 鴨 五 一 二 三 一 八

名 古 屋 巽 辰 巳 孝 會 東 京 都 文 京 区 湯 島 二 一 三 三 一 〇 宝 生 英 雄 方

佐 野 正 治 金 剛 流 華 月 會 金 剛 流 吉 川 周 子 今 井 幾 三 郎 今 井 清 隆

佐 野 由 於 東 京 都 文 京 区 湯 島 二 一 三 三 一 〇 宝 生 英 雄 方

中 部 金 剛 會 八 丁 声 會 金 春 流 中 村 富 次 伊 勢 市 宮 町 一 一 四 一 一 七 電 話 (〇 五 六 〇) 〇 二 四 五 六 番

林 鉄 郎 金 春 欣 三 東 京 都 杉 並 区 成 田 東 四 丁 目 35 一 20 電 話 (〇 三 三 一 五) 七 三 八 二 番

菅 雪 会 後 藤 契 雲 名古屋市中区栄三三三三〇

廣 田 陸 一 幸 稔 廣 田 陸 一 幸 稔

菊 扇 會 名 古 屋 三 河 三 重 松 江 東 京 都 京 都 池 田 三 重 松 江

廣 田 泰 三 廣 田 泰 三

金 春 信 高 金 春 安 明 東 京 都 杉 並 区 南 荻 窪 9 一 17 一 16 電 話 (〇 三 三 一 一) 二 五 七 一 番

本 田 光 洋 東 京 都 中 野 区 上 高 田 二 一 二 五 一 二 電 話 (〇 三 三 八 六) 二 六 四 一 番

金 春 欣 三 東 京 都 杉 並 区 成 田 東 四 丁 目 35 一 20 電 話 (〇 三 三 一 五) 七 三 八 二 番

八 丁 声 會 金 春 流 中 村 富 次 伊 勢 市 宮 町 一 一 四 一 一 七 電 話 (〇 五 六 〇) 〇 二 四 五 六 番

林 鉄 郎 金 春 欣 三 東 京 都 杉 並 区 成 田 東 四 丁 目 35 一 20 電 話 (〇 三 三 一 五) 七 三 八 二 番

麥 久 田 徹 二 會 東 京 都 文 京 区 湯 島 二 一 三 三 一 〇 宝 生 英 雄 方

長 田 曉 東 京 都 文 京 区 湯 島 二 一 三 三 一 〇 宝 生 英 雄 方

東 京 都 文 京 区 湯 島 二 一 三 三 一 〇 宝 生 英 雄 方

東 京 都 文 京 区 湯 島 二 一 三 三 一 〇 宝 生 英 雄 方

④面熱田新春能つぎ

枕 慈童 飯富 雅介 鬼頭 英二 鬼頭 好信
後藤 孝一郎 鬼頭 三男
〔舞臺子〕
〔松上〕(伊藤三葉) 柏崎 (長谷川美知子) 俊成 忠度 (小川直美) 草子洗 (鬼頭京子) 櫻川 (北川道子) 松風 (坪井香代子)
〔高砂〕(山田嘉子) 江口 キリ (野村千代子)
〔砧〕(斎藤節子) 鳥追 (安達文子) 笹太鼓 (鬼頭淑子) 玉ノ段 (村瀬彌子)

富士太鼓 立石 澄雄 河村総一郎 藤田六郎兵衛
柳原富司忠
上野 鶴花
佐藤 秀雄

狂言 福ノ神 井上礼之助 佐藤 友彦 鷺見 征行
石川 香代 吉田 定男 鬼頭喜太郎
輪 西村 欽也 後藤孝一郎 藤田 昭彦
井上松次郎

〔来場歓迎〕 主催 熱田 紳士 能
名古屋市昭和区山里町一三五
内藤泰二方 電話八三二一三四四九

第二十三期・第一回
名古屋宝生会定式能

二月四日(日)午後一時始
熱田 神宮 能楽 殿

翁 辰巳 孝 馬場富四夫
能 組 須藤 耕司 小沢 喜明 稲美 鬼頭 義久
平子 稲美 鬼頭 義久 須藤 耕司

嵐 山 吉田 俊彦 足立 知子
北キリ 衣斐 正宜 葛原 正澄 枝子

東 嵐 山 吉田 俊彦 足立 知子
北キリ 衣斐 正宜 葛原 正澄 枝子

雲 林 院 西村 欽也 吉田 定男 鬼頭 八彦
井上松次郎 柳原富司忠 藤田 昭彦

素袍 落 井上松次郎 井上礼之助 大野 弘之
狂言 後見 倉本 雅 久野 幸三 吉田 利彦
竹内 澄子 地謡 高田 真六 馬場富四夫
加藤 勝利 鈴木 義久

二月十二日(休) 正午始
熱田 神宮 能楽 殿
能 組 大根 秀夫 幸 義太郎 藤田 昭彦

鞍馬天狗 高安 勝久 鬼頭 好信
福井啓次郎 藤田六郎兵衛
能力 井上礼之助 鬼頭 好信
末社 大野 弘之 藤田六郎兵衛

昭和三十四年度・初回
名古屋市昭和区山里町一三五
内藤泰二方 電話八三二一三四四九

名古屋観世会定式能

二月十一日(日)午前十一時始
熱田 神宮 能楽 殿

翁 梅田 邦久 橋本 三郎 野村 三郎
子守 武田 邦久 橋本 三郎 野村 三郎
観世 元正 高安 勝久 河村総一郎 観世 元信
飯富 雅介 大倉 三郎 藤田 昭彦

嵐 山 吉田 俊彦 足立 知子
北キリ 衣斐 正宜 葛原 正澄 枝子

末 廣 井上松次郎 井上礼之助 大野 弘之
後見 岡本 博 河村 昭彦 藤田 昭彦
片山 博太郎 地謡 加藤 勝利 鈴木 義久

楊 貴 妃 宝生 閑 福井啓次郎 藤田六郎兵衛
後見 岡本 博 河村 昭彦 藤田 昭彦
片山 博太郎 地謡 加藤 勝利 鈴木 義久

二月十二日(休) 正午始
熱田 神宮 能楽 殿
能 組 大根 秀夫 幸 義太郎 藤田 昭彦



中部金春会
名古屋市中区老松町一ノ二八
電話(二四一)三二四二番

前田茂穂
米本 平一

喜多実
東京都練馬区中村南一ノ二九〇一

大阪喜多会
和島 富太郎
〒665 宝塚市宝塚一丁目12-1
電話(〇七九七)八六三〇

二井栄逸
松阪市内五曲町八八
電話(〇五九八)二二一〇二六

和谷亀二郎
伊勢市中島2-26-12

長田曉後援会
〒920 金沢市片町一丁目二二一五
電話(〇七六二)五二三四〇

住駒明会
〒7 東京都東区大井町二丁目二五

喜多山本才
名古屋市中区區山町二二二二
電話(782)二一九二番

宝宝生
東京都練馬区小竹町一の五〇
電話(〇三五五)四七九五番

豊嶋十郎
〒二七一 松戸市下矢切五五
電話(〇四七三)一九八二

福王輝幸
〒662 西宮市名次町六一二
電話(〇七九八)九六五一

江崎金治郎
電話(〇七九二)〇七二五番
電話(〇七九二)九七一一番

江崎康雄
〒670 姫路市飯田二五〇ノ二

谷田宗二朗
〒603 京都市北区衣笠街道町31-7
電話(〇七九七)三三二八四

久保田千三郎
芦屋市吳川町五ノ一五
電話(〇七九七)二二二八四

飯富良人
阪本市黒屋二丁目六ノ二九

山崎俊輔
大牟田市馬場町五七

高安同志会
山崎 俊輔

助川竜夫
山口 義郎

龍吟会
藤田 六郎兵衛 藤田 昭彦

寺井政数
〒154 東京都世田谷区世田谷四一三二五
電話(四二〇〇)六六七六番

吳竹会
森本 重一

幸圓次郎
〒164 東京都中野区中央四一四七一
電話(三八一)九四一三番

幸義太郎
東京都中野区丸山二二二四
電話(三三七)五六七二番

大倉長十郎
吹田市江の木町一六ノ一七〇二
電話(〇〇三)八六一五六六番

幸友会
福井 啓次郎 福井 良久

福井良久
福井 啓次郎

柳原福司
朝日文化センター

柳子教室
小鼓 後藤孝一郎

柳子教室
小鼓 後藤孝一郎

柳子教室
小鼓 後藤孝一郎

紫袍落 井上松次郎 井上弘之助 大野弘之助

能楽組 熱田 神宮 能楽殿

能子翁 大槻 秀夫 幸 義太郎 野中 正和 藤田 六郎兵衛

能羽 片山 博太郎 高安 勝久 西村 欽也 飯富 雅介 和合之舞

狂言 大黒 井上松次郎 井上礼之助 佐藤 秀雄

五年の名古屋は例年と変わりず多事・多彩でした。演能のほか、恒例の行事・学生能・婦人能・愛好者の会・普及鑑賞能など。能楽愛好者それぞれに一年回顧の感無量でありましようが、私も小さな展望を以てしばらくこの五三年を顧みたい。

後見 塚本 秀雄 地謡 高橋 一政 武田 邦弘 加藤 保彦 梅田 邦久

能道成寺 観世 静夫 森 常好 河村 修一 柳原 富司 藤田 昭彦

附祝言 主催 柳原 富司 助 幸 清流 宗家 幸 福井 啓次郎 幸 友 会

五三年の名古屋 野村 広二 達の心に万歳・弥左衛門両氏の死は一年末なくなられた喜ぶ氏と

春夏秋冬 五三年の名古屋 野村 広二 達の心に万歳・弥左衛門両氏の死は一年末なくなられた喜ぶ氏と

長田 駿 後援会

住駒 明会

亀井 俊一

桂会 後藤 孝一郎

安福 春雄

飯島 佐之六

寛 鉦一

吉田 定男

長生会 鬼頭 八喜太郎

愛知県中島郡平和町城西 電話(三六五)〇一九六〇番

山崎 俊輔

山口 義郎

狂言 和泉会 和泉 保之

名古屋 和泉会

茂山 千五郎

大蔵 彌太郎

善竹 忠一郎

茂山 忠三郎

野村 又三郎

電話(八三三)八〇七二番

福井 良久

福井 良久

熱田神宮能楽殿 仙田 美千子

栄能楽舞台

楽諷庵舞台

演能写真 ウシマド写真工房

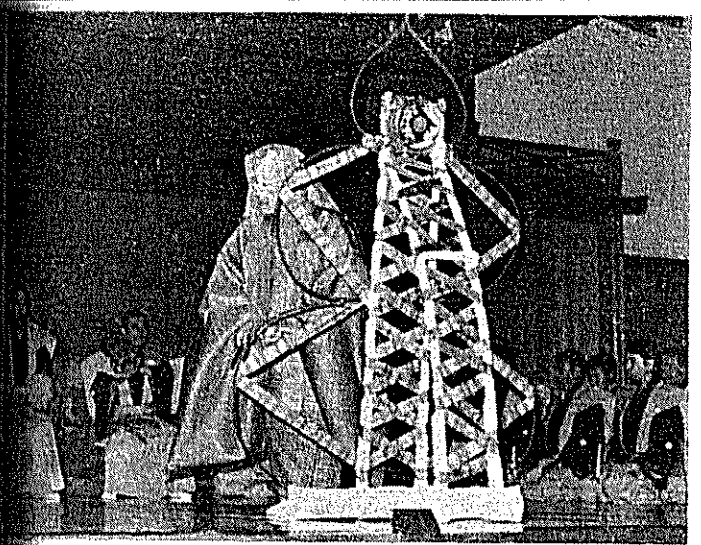
観世 鏡之丞

豊嶋 三千春

西村 欽也

野村 万之丞

友の会
 吹上本町2-20
 (464)
 電話 7984
 36393
 1年 500円
 1年 800円
 50円



「天鼓」 奥田敏子さん
 猶諷会秋の大会
 (53・11・26)



「羽衣」 伊藤恵美さん
 修諷会15周年記念大会
 (53・10・14)



「羽衣」 吉田明さん
 叶石会・一謡会大会
 (53・10・28)

「まずテキスト(脚本のコピー)を見所全員に渡すサービスに敬服」「ちよつとセミナー気分、舞台見所一体の緊張感があつてよかった」

「ところで、きょうは印象批評でいこうと思うがどうだろう。批評というのちよつとおこがましい気がせぬでもないが」

「いいだろう。相手が能楽界の新人だ。こちらも新印象批評といくか」

「第一に感じたことは、シテ(泉流夫)の色気だ。持味のツヤが生きて、とても色っぽかった」「のっけからズバリと来たな。空間を守る、というより空間をかこつ年増だ。性の悩みを粘りまきらす妻の顔さ、色っぽいのも当然だろう」

「その当然がなかなか見られない昨今だ。南玄美に反するとしてもいふかな。一体にもっと内輪なのが普通。それだけに地味で内攻的で、感くするたれるのが普通」

「真淑一途の良妻が孤独の寂しさにはえ切れずに死ぬ、この解釈で行くとしても地味になる。それが悪いというのではないが、フロイド以後の現代では、もの足

りない人がいても不思議でない」「その点、このシテは肉の香りふんふんたりだ。シオルとこるなど、きめぎめと泣くようだし、月を見回すところは、武原はんの舞姿をしのばせた」

「いやどうも……とんだ印象批評だな」

壺泉会の「砧」

前田満穂

「ついに空しくなりけり、と突然死んでしまふ。文字の上では簡単だが、これを舞台の上で然るべく表現せよ、形象化せよとは、どだい無理な注文さね。能役者の苦勞ほどお察し申し上げるが、この演者は仏像を思わせる立ち姿のまま、さつさと揚幕へ入つてしまふ。降りた幕へびく地謡の声がいかに空しくなつた女への弔いのように聞えるのは妙だった」

「この演者、合理的精神の持主で、研究心も盛んなだけに、時として感情過多、表情過剰に陥り、軒端の松のくんだり、思い入れたつぷり。過剰とはいわぬが、あの程度がきりきりの限度だろう。表現力あり余るばかりの勇み足、前の「俊寛」は、その傾向なきにしもあらずと見た」

「ツレ(近藤幸江)は良くも悪くも人形のようにうたった。シテの邪魔にならないのはいいが、もう少し息が通っていない、却つてシテが引き立たないのではないか」

「後シテはどうだった」

「サラリとして僕は気に入つた。思い知らずや、と詰めよるところも強からず、既に半ば成仏して、キリに本成仏する段取りを、それとなくつけたあたり用意周到」

「へんな感心の仕方だね。ワキ(植田隆之亮)について思うんだがね。この男、善人なのか悪人なのか、冷いか温いかよくわからない。夕霧と出来ているのかいらないのか。年の暮に帰るといつて

演能の記録

昭和54年1月放送予定

- NHKラジオ第一放送 (毎週日曜日午前10時15分)
- (1月)
- 7日(日) 金剛流「東北」奥野達也ほか
- 14日(日) 宝生流「黒塚」松本恵雄ほか
- 21日(日) 観世流「老松」木原康次ほか
- 28日(日) 観世流「野守」井上嘉久ほか
- NHK・FM (毎週日曜日午前7時15分)
- (1月)
- 7日(日) 観世流「求塚」◎観世元正ほか
- 14日(日) 同上 ◎同上
- 21日(日) 宝生流「殺生石」松本忠安ほか
- 28日(日) 観世流「正尊」山本勝一ほか
- ◆ NHK教育テレビ(1月15日)(祝)午前9時~10時
- 舞臺子「清経」(喜多)・後藤得三
- 「船弁慶」白波之伝(金剛)・金剛殿
- 仕舞「雨月」前・(宝生)高橋 浩
- (放送予定につき変更の場合はご了承下さい。)

おいて帰らない。夕霧までまじっているわけだ。ワキの性格……などというたら笑われそうだが、どう解釈したらいいのかな」

「どうともとれるぐらいいいのじゃないか。あの短い出場とセリフで性格描写は至難。またそこまで能は要求していないと思う」

「そうかなあ」

「月夜ゆ、清涼の気韻を影を落す。僕の印象の詩的総括だ」

「恐れ入った。「通小町」と狂言「瓶罎」は残念ながら割愛。失礼ながらというべきかな」

(12月10日、熱田神宮能楽殿)

謹賀新年

伊魚魚節

鮮魚節

第7回豊橋狂言鑑賞会は昭和54年4月29日、文化会館ホールで開催されます

豊橋市魚町18 電話(52)5256
 豊橋也留舞会連絡所 (山本浅太郎方)

あなたに心をこめておくりする……

富士道の婚礼道具

家具の富士道

社 名古屋市中区栄3丁目35番18号
 ショールーム TEL代表(262)5547
 工場 愛知県西加茂郡三好町 TEL(05613)2-1178

新しい視力の見直し—オプトメトリー—

明けまして おめでとう ございます

新しい視力の世界を拓く、玉水屋のサービスをご利用下さい。

定休火曜日 営業10時~7時

メガネの玉水屋
 なごや・栄交差点北西角 ☎961-1826(代)

能楽協会名古屋支部主催、中部一神宮能楽殿で開催された。

能4番 狂言2番

義捐能盛會

文三編)金春流仕舞「羽衣」(シテ玉井鉄郎)宝生流能「藤」(シテ玉井博祐)観世流仕舞八番、観世流能「海士」(シテ近藤幸江)狂言「鐘の音」(野村文三郎、井上松次郎)切能は観世流「野守」(シテ)

観世流仕舞「方」観世流夫氏は十二月七日、胃がんのため東京・虎の門病院で逝去された。五十三才告別式は十一日午後一時から東京都港区南青山四の旗仙会能舞台

第三回(二期)第四回
 青陽会能
 昭和五十四年一月七日(日)午前十一時始

発行 能楽の友
名古屋市中千種区吹上本町2-1
(郵便番号 464)
電話 (731) 798
振替口座 名古屋 3639
購読料 1年 500円
郵送の場合 1年 800円
一 部 50円

能楽の友

年金のお受取りは名銀で

- 自動的に振込まれて便利です
- 共済年金の方もご利用ください。

名古屋相互銀行

演能カレンダー (熱田神宮能楽殿)

[2月]

- 11日(祭) 観世会定式能 (有料) (番組①面)
- 12日(休) 柳原富司忠職分十周年記念能 (有料) (番組①面)
- 17日(土) 観世九阜会定期能 (有料) (番組②面)

[3月]

- 4日(日) 大蔵狂言会 (来場歓迎)
- 11日(日) 梅嶺会定期能 (有料) (番組②面)
- 18日(日) 観世喜之師追善奉楽会春の大会 (来場歓迎)
- 21日(祝) 壺泉会春の会 (来場歓迎)
- 24日(土) 観世会土曜定式能 (有料) (番組③面)

[4月]

- 1日(日) 謡楽会大会 (来場歓迎)
- 8日(日) 名古屋観世会定式能 (有料)
- 15日(日) 藤田昭彦後援会能 (有料) (番組③面)
- 22日(日) 観正会春の会 (来場歓迎)
- 28日(土) 緑名会春の会 (来場歓迎)
- 29日(日) 幸友会春の会 (来場歓迎)
- 30日(休) 壺泉会春の会 (来場歓迎)

[5月]

- 3日(祭) 邦謡会大会 (来場歓迎)
- 5日(祝) 興会大会 (来場歓迎)
- 6日(日) 名古屋観世九阜会定期能 (有料)
- 12日(土) 梅嶺会定期能 (来場歓迎)
- 13日(日) 青陽会定期能 (有料)
- 19日(土) 鳳鳴会大会 (来場歓迎)
- 20日(日) やるまい会公演 (有料)
- 26日(土) 観世会土曜定式能 (有料)
- 27日(日) 観世会大会 (来場歓迎)

(演能変更の際はご了承下さい)

東京宝生能楽堂

6月に舞台披4日間

東京・水道橋能楽堂の再建は昭和五十三年一月からすすめてきたが、いよいよ能楽堂部分は五月下旬に出来上る見通しで、舞台披きは、六月九日(土)六月十日(日)六月十七日(日)六月二十日(日)の四日間にあつて行われることになった。

これにともない、新能楽堂および会館の呼び方が次のとおり決定された。

- ・建物全体を宝生能楽堂
- ・能楽堂を宝生能楽堂
- ・マンショ部分を宝生ハイツ

また舞台披についても関係者の間で準備がすすめられており、すでに準備委員会(委員長今井泰男氏)も結成されそれぞれの運営に総力をあけて行っている。

新能楽堂は、建物全体の規模は鉄骨鉄筋コンクリート、地下一階地上八階建、能楽堂占有部分は、一階全部と二階半分(舞台は吹抜け構造)。

舞台、見所などの内部構造は可能な限り旧能楽堂のよさを生かし冷暖房の完備はもちろんのことと客席も段差を避けてスロープ状にするなどあらゆる配慮がなされて

3月25日中日劇場で

全曲小書つき能として異色の演目をそろえ充実した内容が期待されている重要無形文化財・中日五流能は、今回二十四回を迎え、きたる三月二十五日、名古屋・栄・中日劇場で開演される。

第一部は、喜多流能「経政」小書鳥手(シテ喜多長世)観世流能「夕顔」小書山端之出(シテ観世元正)金春流能「恋重荷」小書喜願書・恐之舞(シテ観世元昭)宝

第二部は、観世流能「木曾」小書願書・恐之舞(シテ観世元昭)宝

「木曾」願書・恐之舞(かしこみのまい)は長袴で主君に背を向けない男舞、「百萬」舞入の中舞の演出がみどころ。「鬼界」白頭別舞は、「白頭」よりすべてに重く、「不動の型」「雲中の拍子」など常にみられない型、金剛右京の劇案になるもので、舞金剛の妙味を鑑賞できよう。(番組は④面掲載)

演能案内

名古屋観世会定式能

二月十一日(日)午前十一時始

熱田神宮能楽殿

翁

鳥帽子之祝儀
梅田 邦久
久田 清和
子守 武田 邦久
手 邦久

嵐

観世 元正
西村 欽也
飯富 雅介
白頭 佐藤 元信

末

井上松次郎
野村又三郎
井上礼之助

楊貴妃

宝生 閑
大野 弘一
福井啓次郎
藤田六郎兵衛

附祝言

後見 関根 秀雄
地謡 加藤 保彦
梅田 邦久

主催 名古屋観世会

後見 関根 秀雄
地謡 加藤 保彦
梅田 邦久

県・市に義捐金

能楽協会名古屋支部 歳末助け合い能

社団法人能楽協会名古屋支部(支部長氏・井上松次郎氏)は旧ろう熱田神宮能楽殿で植例の歳末助け合い義捐能を開演、その義捐金を愛知県民生部と名古屋市生局にそれぞれ十八万五千四百二十五円を寄託、恵まれぬ方々におくつた。なお愛知県、名古屋市よりそれぞれ感謝状が支部におくられていた。

能楽の友

熱田神宮能楽殿

大槻 文蔵

後見 大槻 文蔵

西村 欽也

飯富 雅介

高安 勝久

河村 欽也

久田 清和

野村 又三郎

井上 礼之助

佐藤 元信

西村 欽也

飯富 雅介

高安 勝久

河村 欽也

久田 清和

野村 又三郎

井上 礼之助

佐藤 元信

西村 欽也

飯富 雅介

高安 勝久

河村 欽也

久田 清和

野村 又三郎

井上 礼之助

佐藤 元信

西村 欽也

飯富 雅介

高安 勝久

河村 欽也

久田 清和

野村 又三郎

井上 礼之助

佐藤 元信

西村 欽也

飯富 雅介

高安 勝久

河村 欽也

久田 清和

野村 又三郎

井上 礼之助

佐藤 元信

西村 欽也

飯富 雅介

高安 勝久

河村 欽也

久田 清和

野村 又三郎

能紀行

柳は緑花は紅

絵と文 二井栄逸

お正月の床柱にける結び柳は、幾すじかの美しい枝を垂らして...



墨画のお手本をかく時には好んでよく使っています。柳色というの...

だより気品は余りにも位が高く神格化されてゆく感じを受けます。...

自悼集 花刊 氏は昨年一月三日逝去

追想、弥左衛門芸話、座談会を綴りこんで充実した内容である。

親切を第一に、熱意を以て著述して行き、其人の持ち味を生かす有効な教養で、面白味が早く判るよう仕向ける。...

皇楽会春の大会 三月十八日(日)午前十時始 熱田神宮能楽殿

通小町 阿漕 三月二十七日(土) 以上

能楽協会名古屋支部 新年謡初式 1月3日熱田神宮能楽殿

昭和五十四年度初回 名古屋観世九皇会定期能

二月十七日(土)午後一時始 熱田神宮能楽殿

高砂 西村 欽也 河村隆一郎 鬼頭喜太郎 三男

宝の槌 井上松次郎 井上礼之助 佐藤 秀雄

東 北切 小林 喜久 小島 芳雄

放 下 僧小歌 五木田武計

小 鍛 冶切 佐々木勝輝

巻 野垣 慶子 高安 勝久 後藤孝一郎 藤田 昭彦

附祝言 名古屋市南区元塩町一丁目一七(加藤保彦方) 主催事務所 名古屋観世九皇会

第九回 大蔵狂言会 三月四日(日) 熱田神宮能楽殿

狂言 八番 小堀十一番など

梅猶会定期能楽会

三月十一日(日)午前十一時始 熱田神宮能楽殿 電話(052)六七二二九二番

敦 盛クセ 池内幸三郎 鳥追舟 井戸 和男 池内光之助

弱法師 大嶽賢次郎

繪馬 西村 欽也 柳原富司忠 藤田 昭彦

盆山 佐藤 秀雄 井上礼之助

蟬丸 西村 欽也 藤田 昭彦

安達原 能楽 大嶽賢次郎 寺岡 善高

附祝言 主催 名古屋梅猶会

安達原 能楽 大嶽賢次郎 寺岡 善高

附祝言 主催 名古屋梅猶会

二月二十六日(土) 四回十二月十五日(土) 阿漕 山本 真賀

豊嶋弥左衛門追悼集

「散花」

豊星会が発刊

この追悼集の発刊にあたって豊嶋三千春氏は大勢の皆様のご投稿とご協力、力強い編集陣のご努力によって完成、周囲よりみた豊嶋弥左衛門像を中心に父の隨筆なども加え編集された」と感謝のあいさつを述べている。

追悼集の発刊にあたって豊嶋三千春氏をみせた豊嶋弥左衛門氏は昨年一月三日逝去されたが、この「散花」と題して豊嶋弥左衛門氏の追悼集が刊行された。

教えることの楽しさ

四十六年間教えたことの経験を述べてみよう。まず新しく入門した人は、どのように扱うべきか。愛で私は心中に「必ず上達させて見せる。」と決意をする。そして向う一年間は必ず続けて稽古に来て貰う約束をする。「この一ケ年は師に一切任せて、焦らず、怠らず稽古されよ。器用とか不器用とか、声の善悪などを気にする必要なし。」と説明する。最初から枚

え、一日一進歩のあとが見え、人が教えるという事は、丁度鏡にかけて見るごときもので、教えるものの良さも悪さも、其ままた再現実される。教えながら実は自分も教えられるので、自身の研究になる事は頗る大きい。人の稽古をやり過ぎると、芸が下がるなど、言うのは当たらない。「上達したくば教えよ」と言つてよいと思ふ。教えることを厭う流儀は来ない。師範免状を持たぬ人々も上達を早める意味で、ドシ／＼教えて頂きたいと希望する次第である。(三十二年九月一日記) (金剛第20号より抜粋)

藤田昭彦後援会

4月15日能「三輪」「天鼓」

笛方藤田流・藤田昭彦後援会がきたる四月十五日(日)熱田神宮能楽殿で観世鈿之丞、片山博太郎、観世静夫の諸師を迎えて行なわれる。(番組④面)

藤田昭彦後援会 入会のおすすめ

昭彦師は昭和廿八年、御存知の通り能楽獅子方の名門藤田流家元に生まれ、祖父に当たる十世藤田六郎兵衛師に三才より稽古を受け、五才で初舞台、昭和三十八年(九才)家元後嗣披露能に於いて驚を披露、以後きびしい修業を積んでこられました。狸々乱(十一才)

翁(十二才)道成寺(十四才)石橋(十五才)昭和四十九年には一子相伝の秘曲、清経忍之旨取を勤め、そのすぐれた才能と格調の高貴は早くから注目されて来ましたが、以来芸一筋に専念日夜自分の稽古に勤むと共に、能楽界の発展に尽くされて居られます。しかし、名古屋での稽古は東京、京阪神にくらべて回数が少なく、地道に稽古を重ねることはもちろん大切ですが、やはり公開の場で人様の前で舞台を勤め、そしてお客様の前で稽古を勤め、平直な御批評をいただくことが舞台人にとって大変必要なことと言ふまでもありません。

芸の道にたずさわる者として、今非常に大切な時期におられる昭彦師に一回でも多く、そういう機会を作り、昭彦師が将来伝統ある能楽笛方藤田流の継承者となられ先代、当代に芳名を留めたいという期待、及ばずながら声援を送りたい—そんな気持ちで後援会を作りました。何卒、右の趣旨を御汲取りいただき、藤田昭彦後援会に一人でも多く御加入頂き、御来場たまりますようお願い申し上げます。

日本の仮面「展」展覧会

熱田神宮と中日新聞社の主催により、熱田神宮宝物館で一月一日から二十八日まで「日本の仮面」特別展が催され、多数の来観がみられた。



素謡「嵐山」「夷盛」「巴」「小春」「景清」「俊寛」「隅田川」「碓」「菊慈童」「紅葉狩」「山姥」「仕舞」「玉之段」「清経」「田村」「藤戸」「鞍馬天狗」など。(写真は素謡・隅田川)

名古屋法曹謡会

法曹会の能楽愛好者でつくられている名古屋法曹謡曲会の忘年謡会が旧うら三日、尾張旭市・愛心庵舞台で催され、約四十人が参加。素謡に仕舞に日頃の修練をみせて謡曲三昧のひとときをすごした。

協会支部行事として、熱田祭奉納能、若能、大衆能、歳末助け合い能、愛知県芸術祭能など催能予定などが井上支那現代行が報告。

熱田神宮能楽殿 三月十八日(日)午前十時始 熱田神宮能楽殿 後藤 隆久 後藤 新誠 能橋 弁慶 深見 賀子 西村 欽也 能花 月 西村 欽也 素謡「定家」(後藤新子)「卒都婆小町」(鈴木胡蝶)「横接」(天竺桂とも)「木賊」(塚田常子)「龍野」(吉田市郎)「粘」(田中きんた)「景清」(浅井銚三) 舞獅子 十番ほか仕舞など

観世会土曜定式能 (初回)

三月二十四日(土)午後一時始 熱田神宮能楽殿

高砂 殿島 修二 雲林 院クセ 河村 証二 善知鳥 塚本 秀雄 観世 静夫 西村 欽也 観世 静夫 西村 欽也 観世 静夫 西村 欽也

後見 浦田 保利 後見 浦田 保利 後見 浦田 保利 後見 浦田 保利

殺生石 片山慶次郎 殺生石 片山慶次郎 殺生石 片山慶次郎 殺生石 片山慶次郎

武田 邦弘 梅田 邦久 武田 邦弘 梅田 邦久 武田 邦弘 梅田 邦久

附祝言 [有料] 主催 名古屋観世会 (終了五時頃)

附祝言 主催 名古屋梅 猪 会 後援 中日新聞 会員お申込は 出演楽師又は熱田神宮能楽殿当日受付へ 金員券 三、〇〇〇円(全自由席)

藤田昭彦後援会能

四月十五日(日)十二時半始 熱田神宮能楽殿

片山博太郎 西村 欽也 河村 証二 大倉長十郎 藤田 昭彦 後見 青木祥二 後見 青木祥二 後見 青木祥二 後見 青木祥二

筑紫 寛 三男 筑紫 寛 三男 筑紫 寛 三男 筑紫 寛 三男

素袍 落 井上松次郎 素袍 落 井上松次郎 素袍 落 井上松次郎 素袍 落 井上松次郎

芭蕉 観世鈿之丞 芭蕉 観世鈿之丞 芭蕉 観世鈿之丞 芭蕉 観世鈿之丞

天鼓 福王 輝幸 福原 崇志 福井 啓次郎 藤田 昭彦 後見 青木祥二 後見 青木祥二 後見 青木祥二 後見 青木祥二

附祝言 主催 藤田昭彦後援会 (終了五時半頃) ◎観能券(入会金不要) 自由席 三、〇〇〇円 指定席 五、〇〇〇円 御申込所 千代 名古屋市西区比米町四(五七一―五七六三) 又は熱田神宮能楽殿(六七一一二九二) 藤田昭彦 方

第二十四回中日五流能

三月二十五日(日曜日) 名古屋中日劇場

第一部 (午前十時始)

経 喜多 長世 鳥手 福王 輝幸 佐伯 純三 森田 光春

鬼 瓦 善竹 圭五郎 善竹 十郎 二井 栄逸

夕 顔 元正 宝生 関 安福 春雄 藤田 大五郎

八 島 本田 光洋 大塚 文秀 大塚 文秀

舟 弁 慶キリ 金春 欣三 高尾 橋 菊池 次郎

花 鐘 クルヒ 大槻 秀夫 須藤 文二

仕舞(春) 富士太鼓 金春 晃実 高尾 橋 菊池 次郎

仕舞(観) 花 鐘 クルヒ 大槻 秀夫 須藤 文二

恋 重 荷 福王 輝幸 吉田 修一 寛三 島 三男

附祝言 後見 横山 紳一 地謡 河村 恒三 瀬尾 菊次

附祝言 後見 横山 紳一 地謡 河村 恒三 瀬尾 菊次

附祝言 後見 横山 紳一 地謡 河村 恒三 瀬尾 菊次

附祝言 後見 横山 紳一 地謡 河村 恒三 瀬尾 菊次

附祝言 後見 横山 紳一 地謡 河村 恒三 瀬尾 菊次

附祝言 後見 横山 紳一 地謡 河村 恒三 瀬尾 菊次

附祝言 後見 横山 紳一 地謡 河村 恒三 瀬尾 菊次

附祝言 後見 横山 紳一 地謡 河村 恒三 瀬尾 菊次

附祝言 後見 横山 紳一 地謡 河村 恒三 瀬尾 菊次

第二部 (午後三時半始)

淡 路 廣田 泰三 今井 幾三郎 宇野 重吉

昭 君 廣田 隆一 日比野 恭三 宇野 重吉

實 波 梅若 盛義 山本 勝一 加賀 元三

野 守 山本 勝一 加賀 元三 加賀 元三

百 萬 寶生 関 佐伯 純三 藤田 大五郎

狂言 遊 行 柳クセ 野村 剛作 吉田 俊彦

是 界 飯富 雅也 吉田 俊彦 吉田 俊彦

附祝言 後見 廣田 泰三 地謡 河村 恒三 瀬尾 菊次

附祝言 後見 廣田 泰三 地謡 河村 恒三 瀬尾 菊次

附祝言 後見 廣田 泰三 地謡 河村 恒三 瀬尾 菊次

附祝言 後見 廣田 泰三 地謡 河村 恒三 瀬尾 菊次

附祝言 後見 廣田 泰三 地謡 河村 恒三 瀬尾 菊次

附祝言 後見 廣田 泰三 地謡 河村 恒三 瀬尾 菊次

附祝言 後見 廣田 泰三 地謡 河村 恒三 瀬尾 菊次

附祝言 後見 廣田 泰三 地謡 河村 恒三 瀬尾 菊次

附祝言 後見 廣田 泰三 地謡 河村 恒三 瀬尾 菊次

附祝言 後見 廣田 泰三 地謡 河村 恒三 瀬尾 菊次

附祝言 後見 廣田 泰三 地謡 河村 恒三 瀬尾 菊次

杉浦友雪氏逝去 親世流シテ方・杉浦友雪氏は、一月二十六日午後七時四十分、老衰のため東京都中央区衣通二条下の自宅にて逝去された。享年九十歳。

片野東四郎氏逝去 金剛流シテ方・片野東四郎氏は、一月六日午前四時三十分逝去された。八十三歳。自宅は名古屋市中区東矢野町二二〇。

昭和54年2月・3月放送予定 NHKラジオ第一放送 (毎週日曜日午前10時15分) (2月) 11日(日) 親世流「巻」坂井音次郎ほか 18日(日) 親世流「千手」井上基太郎ほか 25日(日) 宝生流「忠度」今井泰男ほか (3月) 4日(日) 親世流「須磨源氏」橋岡久共ほか 11日(日) 親世流「求塚」(難子入)親世元正ほか 18日(日) 親世流「求塚」(難子入)同上 (NHK・FM) (毎週日曜日午前7時15分) (2月) 11日(日) 金春流「西行」(松間)道雄ほか 18日(日) 親世流「昭君」親世静夫ほか 25日(日) 親世流「野守」井上嘉久ほか (3月) 4日(日) 宝生流「隅田川」(近藤)乾三ほか 11日(日) 宝生流「隅田川」(近藤)同上 18日(日) 親世流「三井寺」故人をしのんで親世寿夫 (放送予定につき変更の場合はご了解下さい。)

料理 蓬菜軒 本店 熱田区神戶町三四 電話(052)868618

武田太加志 名古屋市中区葵二丁目一十九番

宝生流全曲旅の友 宝生流謡曲180番を五十音順に、翁、蘭曲を合せ収めてあります。 合本(全一冊) 定価27,000(送料別) 天・地・人(三冊) 定価30,000(送料別) わんや書店

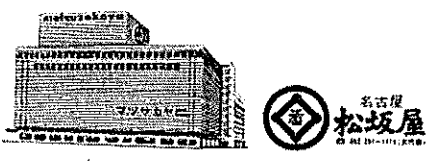
檜書店 流元 剛行 金本 流本 世宗 鏡宗 行元 101 東京都千代田区神田小川町2-1 電話(291)2488-9

割烹・小料理 城 熱田神宮能楽殿喫茶部 住吉小路(中区栄9-10) 電話241-0248

十松金物 十松やま 十松やま 十松やま

熱田神宮能楽殿 武田太加志 名古屋市中区葵二丁目一十九番

楽しいお買いものはマツザカヤ



能 楽 の 友

発行 能 楽 の 友
名古屋市中区吹上本町2-20
(郵便番号 464)
電話 (731) 7984
振替口座 名古屋 36393
購読料 1年 500円
郵送の場合 1年 800円
— 部 50円

演能カレンダー

(熱田神宮能楽殿)

- [3月]
 - 11日(日) 梅嶺会定期能 (有料)
 - 18日(日) 名古屋泉楽会春の大会 (来場歓迎) (番組①面)
 - 21日(祝) 壺泉会春の会 (来場歓迎) (番組①面)
 - 24日(土) 観世会土曜定式能 (有料) (番組②面)
 - [4月]
 - 1日(日) 謡楽会春季大会 (来場歓迎) (番組②面)
 - 8日(日) 名古屋観世会定式能 (有料) (番組③面)
 - 15日(日) 藤田昭彦後援会能 (有料) (番組③面)
 - 22日(日) 観正会春の会 (来場歓迎)
 - 28日(土) 標名会五周年記念大会 (来場歓迎) (番組③面)
 - 29日(日) 幸友会春の会 (来場歓迎)
 - 30日(休) 観雲会春の会 (来場歓迎)
 - [5月]
 - 3日(祭) 邦調会大会 (来場歓迎)
 - 5日(祝) 舞会大会 (来場歓迎)
 - 6日(日) 名古屋観世九奉会定期能 (有料)
 - 12日(土) 猪鬃会大会 (来場歓迎)
 - 13日(日) 青鳳会大会 (有料)
 - 19日(土) 鳳鳴会大会 (来場歓迎) (番組④面)
 - 20日(日) やるまい会公演 (有料)
 - 26日(土) 観世会土曜定式能 (有料)
 - 27日(日) 観衛会大会 (来場歓迎)
 - [6月]
 - 2日(土) 一福会叶石会大会 (来場歓迎)
 - 3日(日) 清調会能 (有料)
 - 5日(火) 熱田神宮大祭奉納能 (来場歓迎)
 - 10日(日) 名古屋観世会定式能 (有料)
 - 17日(日) 名古屋宝生会定式能 (有料)
- (演能変更の際はご了承下さい)



観世 梅若六郎氏逝く

二千番を超える演能の足跡

二十八年午後一時から梅若会葬として東京都中野の自宅(梅若学院)で行なわれ、偉大な能楽界の巨匠の足跡をしのんで会葬は列をなした。喪主嗣子景英氏。

故梅若六郎氏は、明治四十年八月三日、二代目梅若実の長男として浅草蔵前に生れ、数え年三歳で仕舞「狸々」、四歳のとき「忠信」の法師で初舞台、八歳で初シテ「菊慈童」。昭和三十一年演能二千番を記念して梅若家に由緒の曲

観世流シテ方・梅若六郎氏は、二月十八日午前七時二十七分、腎不全のため東京女子医大附属病院で逝去された。享年七十一歳。二月二十日午後一時から密葬、

昭和十九年十月家督を相続、五十五世梅若六郎となる。昭和二十二年日本能楽界会員、昭和四十二年芸術院会員、梅若会を主宰、梅若能楽学院院長。

昭和三十三年芸術祭大賞、大阪府芸術祭奨励賞はじめ各賞を受章。昭和五十一年紺綬褒章、昭和五十二年勲三等瑞宝章受章、政府使節として海外で公演、円熟した格調の高い芸風で能楽の声価を内外に高めた功績はさきわめて大きいものがあった。

充実した演能

春の熱田能楽殿

三月、四月は有料能はじめ各社中大会、とくに五月にかけて多彩な催しが行なわれる。

三月十一日の梅嶺会定期能は「絵馬」(梅若盛彦など能三番には

「遊学」梅若盛彦の「鉄輪」の能二番、閑寂と凄愴の組み合わせが堪能できよう。

つづいて既報のように、四月十五日は笛方・藤田流の藤田昭彦師の第一回後援会能、片山博太郎師の「三輪」白式神楽の荘重な舞の展開がともに期待される。

五月は、観世九奉会第二回定期能(六日)は故観世喜之三回忌追善能として「弱法師」(塚本秀雄

社中大会は、三月十八日に名古屋泉楽会春季大会「花月」「橋弁」の能二番、二十一日春分の日には、壺泉会大会で能「花筐」はじめ素謡「卒都婆小町」など数々の披露、四月は壺泉会春季大会(二日)にはじまり、素謡、舞踊子、二十二日、観正会大会、二十八日には観世会五周年記念大会、二十九日・幸友会、三十日は宝生流・壺泉会大会が催され、陽春の熱田能楽殿の演能をかざる。

小島 一英
片山博太郎

また、五月二十八日は午後一時から知立文化協会八橋旧蹟保存会主催の「能楽」総合指定を受け、四十年秋五等双光旭日章を受章し、

名古屋泉楽会春季大会

(故観世喜之師三回忌追善)

三月十八日(日)午前九時半始

熱田神宮能楽殿

花月	西村 欽也	吉田 定男	藤田 六郎兵衛
卒都婆小町	鈴木 胡蝶	小島 芳雄	小林 喜久
松川	早苗	後藤 孝一	寛 三男
熊野	深見 一枝	柳原 富司忠	藤田 昭彦
弱法師	宮本 正彦	吉田 定男	藤田 昭彦
景清	浅井 佳二	伊藤 睦子	
海士	観世 武雄	柳原 富司忠	藤田 昭彦
若松加津子			
加藤 敏子			
序音舞踊子			

壺泉会大会

三月二十一日(春分の日)午前九時始

熱田神宮能楽殿

花筐	佐藤 幸江	高坂 康也	後藤 孝一	寛 三男
求	宮部 悟	志村 喬	朝山 清	
隅田川	寄田 春枝	橋本 泰子	石川 晴子	
蜘蛛	市川 君夫	加藤 照子	藤井 三男	
俊成忠度	柳原 富司忠	森本 重一	森本 重一	
玄象	加藤 春枝	柳原 富司忠	森本 重一	
土蜘蛛	大城 竜男			
紅蜘蛛	市川 君夫	加藤 照子	藤井 三男	
五段	柳原 富司忠	森本 重一	森本 重一	
班	橋本 泰子			
班	橋本 泰子			
班	橋本 泰子			

宝生流
宝生流
合天
天の巻



能 紀 行

嵯峨念佛

絵と文 二井栄逸

やわらかな春の日射しを浴びた
彼岸は綿帽子をかぶったように
明るい。南の園はもう春です、と
真盛りの紀南の菜の花が、新名古

されたカットに何を書こうかと墨
をすりながら考えていたら、ふと
今日、岡村保道師の追善講に出
た百萬を書いた見えた。春
の物狂いに一寸ひかれたのであ
る。追善会は高師でこの世を去ら
れた岡村保道師のお弟子達が、心
づくしの手向けの会として、田園
と遠山と森や林が一望に見渡せる
静かな環境の中で和やかに行われ
たのである。

吹く風も何となく暖かであった
し、遠望の山々もみずみずしく見
えていた事をなつかしみながら、
薄墨を色紙ににじませた。
百萬は、奈良に住む百萬という
女が、生き別れをした子供の行く
えを尋ねて物狂いとなり、嵯峨の
大念仏に参りあわせて、子供と再
会することを祈ったものである。
この主人公である百万という女
は、奈良に住む舞歌遊風の名望の
人とうたわれた曲舞女であったと
いう。



日本中世の芸能の一つに曲舞
(くせまい)という芸能があった。
南北朝時代から室町時代にかけて
よく行われた。それは、叙事的な
詞章で綴られ、鼓の調子に合わせ
て歌い舞う芸能の一つで、男は直
垂(ひたれ)、女は束・立鳥
帽子で舞った。武將達が舞った幸
若舞(こうわかまい)もその一つ
である。観阿弥がこれを採り入れ
て能の曲舞を改革したので、今の
謡曲のクセにもその面影が見られ
る。この、百萬は、多分に曲舞の
要素をとり入れた二段グセの物狂
能になった。
念仏狂言の面白さや太鼓につれ
て、シテと地謡の念仏の掛合が終
ると、仕舞どころの能段が始ま
る。春の物狂いの物憂さが、深み
のある軽さによって表現されてゆ
く。
京都市右京区の嵯峨の清涼寺で
は、毎年三月九日から十五日まで
嵯峨念仏が行われるそう一度は
行って見たいと思う。

京都 広田後援会 春期公演 金剛能楽堂

広田後援会能は、本年度春期公
演をきたる四月八日(日)午後一時
半から京都・金剛能楽堂で開催す
る。能「泰山府君」(広田泰三)
「山姥」(広田陸二)の二番、能

仕舞 忠 度 広田 幸裕 地謡 籠山 道一
谷口 宗義 今井 清隆

後見 金剛 巖 地謡 籠山 道一
宇高 通成 籠山 道一
掛川 昭二 今井 清隆
後見 茂山 千作 茂山 千之丞
後見 茂山 あきら

故 梅若六郎師をしのぶ
日本芸術院会員・観世流シテ方
梅若六郎氏は、二月十八日、不帰
であり、腹の中にすべてのものを

山姥 岡治郎右衛門 谷口 正喜 前川 光長
森 晴藏 曾和 博朗 杉 市和
間 杖之型 茂山 千五郎
白頭 籠山 道一
杖之型 茂山 千五郎
後見 金剛 巖 地謡 籠山 道一
宇高 通成 籠山 道一
掛川 昭二 今井 清隆
後見 茂山 千作 茂山 千之丞
後見 茂山 あきら

(1)面より選集会番組つき

(被曲) 卒都婆小町 武藤久仁男 泉 泰孝
田原良太郎

(被曲) 山 倉地 幸子 石附 一二
宮部 悟

(被曲) 正 尊 前川 修 大隈 文成

唐 船 三島 遊 山口 英二
山口 英二 藤助 昭彦

野 守 中沢 修 吉田 定男
吉田 定男 藤田 昭彦

杜 若 樋口 教子 鬼頭 喜太郎
鬼頭 喜太郎 藤田 昭彦

卷 絹 泉 直澄 山口 英二
山口 英二 藤助 昭彦

附祝言 熊 大 江 山 坂 泉 嘉夫

附祝言 熊 大 江 山 坂 泉 嘉夫

附祝言 熊 大 江 山 坂 泉 嘉夫

附祝言 熊 大 江 山 坂 泉 嘉夫

附祝言 熊 大 江 山 坂 泉 嘉夫

附祝言 熊 大 江 山 坂 泉 嘉夫

附祝言 熊 大 江 山 坂 泉 嘉夫

附祝言 熊 大 江 山 坂 泉 嘉夫

附祝言 熊 大 江 山 坂 泉 嘉夫

附祝言 熊 大 江 山 坂 泉 嘉夫

附祝言 熊 大 江 山 坂 泉 嘉夫

附祝言 熊 大 江 山 坂 泉 嘉夫

附祝言 熊 大 江 山 坂 泉 嘉夫

附祝言 熊 大 江 山 坂 泉 嘉夫

附祝言 熊 大 江 山 坂 泉 嘉夫

附祝言 熊 大 江 山 坂 泉 嘉夫

附祝言 熊 大 江 山 坂 泉 嘉夫

附祝言 熊 大 江 山 坂 泉 嘉夫

附祝言 熊 大 江 山 坂 泉 嘉夫

附祝言 熊 大 江 山 坂 泉 嘉夫

熱田 神宮能楽殿
四月十五日(日)十二時半始

空 野村又三郎 佐藤 友彦

大 武田 邦久 後藤 幸一郎 鬼頭 好彦
梅田 邦久 井上松次郎 藤田 昭彦

附祝言 後見 久田 徹二 地謡 本田 徹一 小島 一英
片山 慶次郎 中村 和男 古橋 正士
後藤 幸一郎 加藤 保彦 浦田 保利
久田 秀雄

附祝言 後見 久田 徹二 地謡 本田 徹一 小島 一英
片山 慶次郎 中村 和男 古橋 正士
後藤 幸一郎 加藤 保彦 浦田 保利
久田 秀雄

附祝言 後見 久田 徹二 地謡 本田 徹一 小島 一英
片山 慶次郎 中村 和男 古橋 正士
後藤 幸一郎 加藤 保彦 浦田 保利
久田 秀雄

附祝言 後見 久田 徹二 地謡 本田 徹一 小島 一英
片山 慶次郎 中村 和男 古橋 正士
後藤 幸一郎 加藤 保彦 浦田 保利
久田 秀雄

附祝言 後見 久田 徹二 地謡 本田 徹一 小島 一英
片山 慶次郎 中村 和男 古橋 正士
後藤 幸一郎 加藤 保彦 浦田 保利
久田 秀雄

附祝言 後見 久田 徹二 地謡 本田 徹一 小島 一英
片山 慶次郎 中村 和男 古橋 正士
後藤 幸一郎 加藤 保彦 浦田 保利
久田 秀雄

附祝言 後見 久田 徹二 地謡 本田 徹一 小島 一英
片山 慶次郎 中村 和男 古橋 正士
後藤 幸一郎 加藤 保彦 浦田 保利
久田 秀雄

附祝言 後見 久田 徹二 地謡 本田 徹一 小島 一英
片山 慶次郎 中村 和男 古橋 正士
後藤 幸一郎 加藤 保彦 浦田 保利
久田 秀雄

附祝言 後見 久田 徹二 地謡 本田 徹一 小島 一英
片山 慶次郎 中村 和男 古橋 正士
後藤 幸一郎 加藤 保彦 浦田 保利
久田 秀雄

附祝言 後見 久田 徹二 地謡 本田 徹一 小島 一英
片山 慶次郎 中村 和男 古橋 正士
後藤 幸一郎 加藤 保彦 浦田 保利
久田 秀雄

附祝言 後見 久田 徹二 地謡 本田 徹一 小島 一英
片山 慶次郎 中村 和男 古橋 正士
後藤 幸一郎 加藤 保彦 浦田 保利
久田 秀雄

附祝言 後見 久田 徹二 地謡 本田 徹一 小島 一英
片山 慶次郎 中村 和男 古橋 正士
後藤 幸一郎 加藤 保彦 浦田 保利
久田 秀雄

附祝言 後見 久田 徹二 地謡 本田 徹一 小島 一英
片山 慶次郎 中村 和男 古橋 正士
後藤 幸一郎 加藤 保彦 浦田 保利
久田 秀雄

附祝言 後見 久田 徹二 地謡 本田 徹一 小島 一英
片山 慶次郎 中村 和男 古橋 正士
後藤 幸一郎 加藤 保彦 浦田 保利
久田 秀雄

附祝言 後見 久田 徹二 地謡 本田 徹一 小島 一英
片山 慶次郎 中村 和男 古橋 正士
後藤 幸一郎 加藤 保彦 浦田 保利
久田 秀雄

附祝言 後見 久田 徹二 地謡 本田 徹一 小島 一英
片山 慶次郎 中村 和男 古橋 正士
後藤 幸一郎 加藤 保彦 浦田 保利
久田 秀雄

附祝言 後見 久田 徹二 地謡 本田 徹一 小島 一英
片山 慶次郎 中村 和男 古橋 正士
後藤 幸一郎 加藤 保彦 浦田 保利
久田 秀雄

附祝言 後見 久田 徹二 地謡 本田 徹一 小島 一英
片山 慶次郎 中村 和男 古橋 正士
後藤 幸一郎 加藤 保彦 浦田 保利
久田 秀雄

附祝言 後見 久田 徹二 地謡 本田 徹一 小島 一英
片山 慶次郎 中村 和男 古橋 正士
後藤 幸一郎 加藤 保彦 浦田 保利
久田 秀雄

附祝言 後見 久田 徹二 地謡 本田 徹一 小島 一英
片山 慶次郎 中村 和男 古橋 正士
後藤 幸一郎 加藤 保彦 浦田 保利
久田 秀雄

附祝言 後見 久田 徹二 地謡 本田 徹一 小島 一英
片山 慶次郎 中村 和男 古橋 正士
後藤 幸一郎 加藤 保彦 浦田 保利
久田 秀雄

附祝言 後見 久田 徹二 地謡 本田 徹一 小島 一英
片山 慶次郎 中村 和男 古橋 正士
後藤 幸一郎 加藤 保彦 浦田 保利
久田 秀雄

附祝言 後見 久田 徹二 地謡 本田 徹一 小島 一英
片山 慶次郎 中村 和男 古橋 正士
後藤 幸一郎 加藤 保彦 浦田 保利
久田 秀雄

附祝言 後見 久田 徹二 地謡 本田 徹一 小島 一英
片山 慶次郎 中村 和男 古橋 正士
後藤 幸一郎 加藤 保彦 浦田 保利
久田 秀雄

附祝言 後見 久田 徹二 地謡 本田 徹一 小島 一英
片山 慶次郎 中村 和男 古橋 正士
後藤 幸一郎 加藤 保彦 浦田 保利
久田 秀雄

附祝言 後見 久田 徹二 地謡 本田 徹一 小島 一英
片山 慶次郎 中村 和男 古橋 正士
後藤 幸一郎 加藤 保彦 浦田 保利
久田 秀雄

雲雀山 横井 安典 近藤 義博
後各務 元一
前 菊井 昌人

梅若六郎師をしのぶ

日本芸術院会員・観世流シテ方梅若六郎氏は、二月十八日、不慮の客とられたが、二千番を越える能のシテを勤めた氏のあゆみはまさに不滅の輝きを放っている。流麗な演能で多くの若者に師の舞世界の魅力と感銘を与えたその舞台はいまも見られぬ。さきにNHKラジオでは六郎師をしのぶ特集を放送したが、本紙でのインタビュー(昭和四十二年七月号)をここに抄録して故人の苦心をしのぶがよすがとして(編集部)

「能」は理くつては勉強できない。身をもってそこへ体当たりしてやらないことにはわかりません。頭が良いからといって二二が四で舞えるものでなく、二二が三つらいの能のほうが面白いのが出来るわけですね。しかし最初から二二が三という能は舞えるものではありませんが、やはり一から教わった芸を忠実に守って二二が三に、それが年によって二二が三になったり、二二が六、あるいは七になったりする所は味とありますが、面白さがあるのです。

能の芸というものは、静中の動というくらいですから、静かなときに非常に難しい。面ひとつにしても少し下向けば泣いた感じを出さねばならないし、上を向けば月があるとかいうことで、それをみる方によつて、月になるか、霞になるか、鳥になるかということでも芸が生きてくる。

能の姿、仕舞でもそうですが、目はどこについているか、乳が目なのです。実際の目で物を見たのではダメなんです。

名古屋観世会定式能

四月八日(日)十二時半始
熱田神宮能楽殿

番外仕舞 笠 之 段 武田 邦弘
山 姥 魚井 順一 鬼頭喜太郎
小 督 田中 萬子 鬼頭喜太郎
三男 鬼頭喜太郎
主催 武田 邦弘 武田 小 兵衛 武田 欣 司 武田 邦 弘

遊行

観世 元昭 谷田宗二朗 河村 俊三
西村 欽也 久田 舜一郎 藤田 六郎兵衛
飯富 雅介 加賀 敏彦 藤田 邦久
佐藤 友彦 青木 祥二 藤田 邦久
後見 関根 祥六 地謡 杉村 竹翠 藤田 完治

禁

野 井上礼之助 佐藤 友彦
後見 佐藤 秀雄

鉄

輪 飯富 雅介 吉田 定男 鬼頭喜太郎
飯富 雅介 後藤 孝一郎 藤田 昭彦
大野 弘之 中 武 藤田 昭彦
後見 藤井 完治 地謡 河村 治房 久田 秀雄

附祝言

主催 名古屋観世会 (終了五時頃)

名古屋観世会定式能

四月十五日(日)十二時半始
熱田神宮能楽殿

番外仕舞 片山博太郎 西村 欽也 河村 総一郎 藤田 昭彦
輪 西村 欽也 大倉長十郎 藤田 昭彦
白式神楽 野村又三郎

三

片山博太郎 西村 欽也 河村 総一郎 藤田 昭彦
白式神楽 野村又三郎

素袍

井上松次郎 佐藤 友彦

芭蕉

観世 元昭 藤田 六郎兵衛

天鼓

福王 輝幸 藤原 崇志 鬼頭喜太郎
福井 啓次郎 藤田 昭彦

附祝言

主催 藤田昭彦後援会 (終了五時半頃)

翁

新生 直常 須崎 武文

緑名会五周年記念大会

四月二十八日(土)午前九時始
熱田神宮能楽殿

竹生島

伊藤 章彦 長谷川 湛司

雲雀山

西村 美速 近藤 義博 後各務 元一 前 菊井 昌人

雲雀山

西村 美速 近藤 義博 後各務 元一 前 菊井 昌人

連吟

村 ロンギ 古城久仁代 渡辺 泉子 小栗 千鶴子 中井 鶴子 水野 次郎 水野 次郎 水野 次郎

熊

星野八重子 田尻 やす子 山田 ふみ 豊田 寿子 齋藤 光裕

安宅

伊藤 徹也 坂下 健一 野村 清治 堀 光彦 岡 登世雄 三浦 秀男

安

宮 請井 和子 武山 八郎子 寺田 鈴子

半

宮 請井 和子 武山 八郎子 寺田 鈴子

安達原

須崎 武文 新生 直常 高野 頼恵三 堀 光彦

〔御来聴歓迎〕

主催 緑名会 電話(名古屋)三三三三〇四番

後援

名古屋観世会

鳳鳴会大会

五月十九日(土)午前九時始
熱田神宮能楽殿

鳳鳴会 五月十九日(土)午前九時始 熱田神宮能楽殿 番外仕舞 五之段 武田太加志 鞍馬天狗 武田志房	清 吉本 米子 大沢 晃 伊藤 義郎 小川 久 博 松田 冬 久 志 三 房 完 治 三 房	西 一柳 正直 間下 藤平 松井 弘 地 藤井 孝 一 志 三 房 完 治 三 房	恋 吉田 義正 早川 茂一郎 地 地 武田 太加志 郭 太加志	正 村 上 清 二 村 正 地 吉 井 正 順 和 士 武 田 太加志 郭 太加志	卷 小 越 義 郎 河 村 總 一郎 柳 原 富 司 忠 藤 田 六 郎 兵 衛 藤 田 昭 彦	熊 高 橋 三 郎 後 藤 孝 一 郎 河 村 總 一郎 鬼 頭 喜 太郎 三 男	那 長 谷 川 京 子 福 井 啓 次 郎 鬼 頭 喜 太郎 三 男	船 浅 井 一 元 安 福 建 雄 藤 田 六 郎 兵 衛 藤 田 昭 彦	經 高 安 勝 久 柳 原 富 司 忠 後 藤 孝 一 郎 河 村 總 一郎 小 川 明 宏 藤 田 昭 彦	隅 武 田 友 志 吉 川 正 和 武 田 志 房 三 川 慈 平 武 田 太加志 宗 和	羽 武 田 友 志 吉 川 正 和 武 田 志 房 三 川 慈 平 武 田 太加志 宗 和	衣 飯 富 雅 介 山 崎 哲 生 藤 田 昭 彦 藤 田 昭 彦
--	---	---	--	--	--	---	---	--	---	--	--	--

の友社
 歌上本町2-20
 (464)
) 7 9 8 4
 1 年 5 0 0 円
 1 年 8 0 0 円
 5 0 円

中日五洲能楽公演
 3月25日中日劇場で

全曲小書つき能として異色の演
 之型(シテ金春信高)大藏流狂言

県・市に義捐金
 能楽協会名古屋支部
 歳末助け合い能

熱田神宮能楽殿
 二月十二日(休)正午始

「道成寺」と「羽衣」

柳原富司忠十周年記念能

前田満穂

「羽衣」と「道成寺」人気が二つ並んだ。ポピュラーで、しかも高度な名作揃い。さすがにいつ観ても楽しいね。

「いや楽しいどころじゃない。「道成寺」は僕をはじめだが、全くド肝を抜かれたよ。

「能の忠臣蔵といわれるぐらいの超人気曲。はじまる前から満員の見所が息をのんだ。

「あの鐘の音でかいたのびびり。小鼓(柳原富司忠)のものすごい掛け声にまたびびり。乱拍子の息づまるようなシテ(観世静夫)の足さばきにびびり。落ちて来る鐘に吸い込まれるような鐘入り。びびり。びびり。びびり。びびり。見終って随分疲れた。」

「ごもごも。何度か観ている僕でも疲れた。舞台も見所も緊張の連続だから。しかし、そこがこの大曲のねらいだし、仕方がない。演者が負けられないことだ。」

かにかきまわって思わす拍手が湧いた。ほだだが、これも乱拍子同様、局所肥大化というより、演劇外興味、いわば軽業的、スポーツ的興味に片よってはいないかな。

「片よってはいないかな。」

演劇は見るスポーツという人もいる。君は演劇というものを狭く解釈し過ぎてやしないか。演劇は広義のスペクタクルだ。生身の人間による人間の表現。これは遠くないが、表現形式は多種多様、面白くする要素は言葉であれ、舞踏であれ、軽業であれ、何でもござれだ。新劇風の写実的対話劇だけが演劇だという見方は古い。能は最も古く、かつ最も新しい演劇かも知れない。

「道成寺」はともかく「羽衣」はあまり演劇的ではないように思いませんか。

「どう致しまして。羽衣を返せば、返すのやりとり、天女の嘆き、喜びの舞、昇天と幾度か、春光みながら三保の浦曲に展開する緩徐調のシテの積み重ね、これはそれの劇的さこそなけれ、これはそれで立派な演劇性を持っています。」

「こんどのシテ(片山博太郎)は人なつこのシテ、神々しいというより親しみ易く可愛い感じが、

目覚めた設備を誇る日進堂
 メガネ調整設備は、正しいメガネ・快適なメガネづくりの根本です。日進堂は視力測定・メガネ調整用の諸設備はもちろんのこと、必要ときには数分でピクアップできる...お客様一人一人の視力記録システムなどを常に生きた設備の充実を心がけています。

■ビジネスにも全神経を集中する日進堂
 メガネ店の技術をささえるもの—それは、お客さまの信頼におこたえする責任感とまごころです。正しいメガネを安心してご使用いただくために、日進堂は、たとえビジネスにも全神経を傾倒しています。

■徹底した日進堂のアフターサービス
 メガネをいつも正しく、最良の状態でご使用いただけるよう努めることもメガネ店のつとめです。日進堂は可能な限りの修理サービス、レンズ・フレームの清掃サービスを無料でやっております。いつでもお気軽にお立ち寄り下さい。

定休日 毎週木曜日

正しいメガネでしあわせを.....

メガネの日進堂

◎駐車場完備 名古屋市中区那古野2-20-23(円頓寺本町)
 451 TEL (571) 6181-3

土 頼光 武田 雅和 胡蝶 中川 雅章 小川 明宏 山木 一 入道之伝 飯富 雅久 大野 弘之	蜘蛛 飯富 雅久 河村 總一郎 後藤 孝一郎 寛助 川 竜夫	益 佐藤 友彦 井上 松次郎	卒都婆小町 竹内 正 福井 啓次郎 藤田 六郎兵衛	松 石井 鐘子 柳原 富司忠 藤田 昭彦	班 財前 光枝 柳原 富司忠 藤田 六郎兵衛
--	---	-----------------------------	---	--------------------------------------	--

昭和54年3月・4月放送予定

● NHKラジオ第一放送 (毎週日曜日午前10時15分)

〔3月〕
 18日(日) 観世流「求 塚」◎観世入観世元正ほか
 25日(日) 宝生流「藤 戸」近藤 礼ほか

〔4月〕
 8日(日) 宝生流「隅 田 川」◎近藤乾三ほか
 15日(日) 同 上 ◎同 上
 22日(日) 金春流「養 老」高橋 汎ほか
 29日(日) 喜多流「屋 島」喜多長世ほか

● NHK・FM (毎週日曜日午前7時15分)

〔3月〕
 18日(日) 観世流「三井寺」故人を偲ぶ 観世寿夫
 25日(日) 観世流「老 松」木原康次ほか

〔4月〕
 8日(日) 狂言「節分」「茶壺」和田喜太郎・善竹圭五郎
 15日(日) 観世流「雲雀山」◎梅若万三郎ほか
 22日(日) 同 上 ◎同 上
 29日(日) 観世流「田 村」橋岡久共ほか

● NHK教育テレビ 3月21日(祝)午前9時30分
 観世流「葵 上」観世元正、宝生弥一ほか
 (放送予定につき変更の場合はご了解下さい。)

謡曲本専門販売

株式会社 東文堂書店

名古屋市中区栄3-28-26 (松坂屋1丁南)
 電話 (052) 241-1059

外科・せいかい外科・皮膚、泌尿器科

東山整形外科

TEL 781-7835
 東山公園駅下車 オークランドビル2F

発行能楽の友

名古屋市中区吹上本町2-20 (郵便番号 464) 電話 (731) 7984 振替口座 名古屋 36393 購読料 1年 500円 郵送の場合 1年 800円 一 部 50円

能楽の友

題字は熱田神宮 藤田宮司筆

若い御二人の門出に ふさわしい結婚式場

名古屋若宮八幡社

各種合会や宴会にも御利用下さい (駐車場完備) 名古屋市中区栄3丁目35-30 電話(241)0810

演能カレンダー (熱田神宮能楽殿)

Calendar table with columns for dates (e.g., 15日, 22日), event names (e.g., 藤田昭彦後援会能), and details like '有料' or '来場歓迎'.

昭和五十三年度(第二十九回)の芸術選奨の文部大臣賞と新人賞が三月十日文化庁から発表された...

文部大臣賞に 喜多流 友枝喜久夫氏 昭和53年度芸術選奨

昭和五十三年度(第二十九回)の芸術選奨の文部大臣賞と新人賞が三月十日文化庁から発表された...

重要無形文化財指定(人間国宝)に

文化財保護委員会(坂本太郎会長)は、四月三日、重要無形文化財保持者(人間国宝)、文化財保存技術の保持者などの認定を文部大臣に答申した...

久田観正会春季大会

四月二十二日(日)午前九時始 熱田神宮能楽殿

Large table listing performers (e.g., 素謡求, 舞臺子) and their roles for the 'Kudamichi Spring Festival'.

緑名会五周年記念大会

四月二十八日(土)午前九時始 熱田神宮能楽殿

Table listing performers and roles for the 'Ryokumeikai 5th Anniversary Memorial Event'.

Vertical text on the right side, possibly an advertisement or notice, including '後見井上礼之助' and '新住所(郵便番号464)'.

Bottom right corner text, including '中 柳' and '欧風料理'.



能紀行

行

絵と文 二井栄逸

あしびきの山桜花日並べてかく映きたらばいと恋ひめやも

遠い昔から日本人に親まれてきたのは桜でした。ぱっと咲いてぱっと散るいきさきは、萬葉のど花よりもすぐれています。山の

各地だより

高橋進師大阪初演

「隅田川」公演

大阪能楽観賞会主催で、きたる五月十七日(木)大阪能楽会館で観賞会五月公演が催される。

能を観て

三名女性の姿が、その女性性と能というものを考えた。このごろはどこへいっても女性上位、社中の催しなどは、素謡、仕舞、舞踊から能まで、女性一

桜は文句なしにいきさよく、すがすがしく美しいのです。春雨のふるは涙か桜花散るを惜まぬ人しなれば

行

茶人は桜を好まないといいますが、利休には堅いばいばいに桜を付けて秀吉を迎えたという逸話があります。

昔、天竜川左岸沿いの村落、池田(現在は静岡県磐田郡豊田村大字池田)に住む熊野は、年老いた母を残して平家盛の愛妾になりました。

折から桜ははつと咲き、この頃、池田の宿から侍女の朝顔が重病の老母からの帰国を頼む文を持ってきますが宗盛は帰国を許しません。

京都

金剛流謡曲教室

昭和54年度受講者を募集。京都新聞社主催による金剛流謡曲・仕舞教室は開校以來すでに二十数年の歴史をもち、数千人の卒業者を送り出し注目されている。

プロ野球では、セリーグの野手という。耳ざわりはよくないが、プロの本質をついた言葉には、歴史の浅から来るものだろう。

- 羽 衣キリ 岩佐 錦代 今枝 錦子 後藤みつ子 坂下 健一
八 島 清洲 康友 中村 利男 酒井 康孝 徳田百合子 田尻やす子 山田 ふみ
熊 野 星野八重子 山田 正
葵 上 桐谷秀美枝 伊藤 敬也 坂下 健一 野村 清治 野村 光彦 岡 登世雄 三浦 秀男
安 宅 岡 登世雄 三浦 秀男
安 松 風 請井 和子 武山八詠子 寺田 鈴子
阿 野 宮 武山八詠子
俊 寛 斎藤 光裕 武山 一雄
半 寛 宮沢 寿夫 武山八詠子
安 達 原 岡 紀彦 高野瀬恵三 須崎 武文 新庄 直常
草 子 波 梅若 景英 終了予定午後五時

幸友会春の会

- 主 催 緑 田 中 武 会
後 援 名 古 屋 橋 会
四月二十九日(祝)午前十時始
熱 田 神 宮 能 楽 殿

- 内藤鎧造師三十三回忌追善 舞雲会大会
四月三十日(休)午前九時始
熱 田 神 宮 能 楽 殿
能 小 督 飯富 雅介 鬼頭 英二 藤田 昭彦 松井 直子 山口 亮
能 楊 貴 妃 西村 欽也 吉田 定男 藤田 昭彦 鬼頭 淑子 後藤 孝一郎
能 隅 田 川 西村 欽也 河村 總一郎 寛 三男 井上 礼之助 佐藤 友彦
能 海 人 飯富 雅介 寛 敏一 鬼頭 喜太郎 飯富 雅介 飯富 啓次郎 藤田 六郎兵衛

- 邦謡会春の会素謡会
五月三日(祝)午前九時半始
熱 田 神 宮 能 楽 殿
神 歌 梅田 邦久 本田 敷 中村百合子 橋田 春子
花 籠 日比野喜子 小島 英子 三浦まさ子 佐藤 千代
弱 法 師 横山 良史 杉藤 芳男 西川喜代子 小田 澄子 徳田 文代
山 姥 横井 敬子 中村外幾代 野々山幾子 中村外幾代

- 能 班 女 西村 欽也 飯富 雅介 後藤 孝一郎 井上松次郎 佐藤 秀雄 中島 啓子 足立 知子 岡村 知世子 竹内 澄子 岡島 祥子 倉本 和雅 河田 和雅
(二時頃) 隅 田 川 増田 仁英 増田 仁子 増田 仁子

二月と三月の能から

竹尾邦太郎

観世会初回は九五年ぶりの「翁」とあって見所は立派の余地もありません。面箱非上祐一（41年9月・名匠鑑賞能別会以来）を先頭にシテ以下各役が侍鳥帽子・素袍七下の盛装で橋懸に出ると、神事の厳肅さと物々しさが舞台を圧します。本年東京・京都・神戸の観世会初回の「翁」を勤めた観世太夫元正は、流石に悠揚迫らず袖振り身のこなしに余韻を寓わせ、まことに端正な「翁」です。当地五年ぶりの干才観世清和は一段と逞しく大きくなって爽快です。三番奥の野村又三郎は47年3月の先代喜之進の九草会以来でしょうか。揉之段の途中で橋懸一の松へ行き袖を巻いて舞うのが小書「橋懸之舞」なのでしょう。揉之段が終り、後見座で黒色扇をかける間一刻の静寂があり、次の鈴之段への期待を孕ませます。ついで三番奥と面箱との間で「只今翁殿の召された鳥帽子は何という鳥帽子にござん」と始まる鳥帽子問答がある、「あらめでたや、鈴をまいて

舞上げ下居して待つ裡に、へ我本覺の都を出でて、と文字通り常座に出ると、蔵主権現の面目を流瀾とみせます。前場の閑雅、後場の雄勁を元正はすっきり演じますが後場の勁い中にも清閑の趣があるのは宗家の人品でしょう。脇役は「末広」。太郎冠野村又三郎と主井上松次郎との連取りは巧みな間があり、主の不興を買った太郎冠者が主を思きめるまでの心理の綾を又三郎は几帳面に表現し、小気味のよい囃子物が出色です。主の不服そうな面構えが少しずつはれて浮かれてくるところも無理がなく、如何にも大果報者の鷹揚さが微笑ましいのです。井上礼之助のスパは小賢しさは見られませんが、悪に徹しきれない人の好きを垣間見せ、三者の調和が過不足なく好舞台です。ただ「お台所に沢山ある古唐草」の科白ではありませんが、小道具の唐草が破れ傘なのはいただけません。久しぶりの翁付能・脇役を通して三時間余。囃子方（昭彦・長十郎・徳一郎・元信）の気力充実が立派な舞台を支え、端然とした行儀のよさは清々しい印象を与えました。就中先陣に伍して堂々と渡り合う昭彦の若々しく力強い笛は見事です。「楊貴妃」はシテ観世清和・ワ

各地だより

岐阜幽謡会

片山博通師十七回忌追善

岐阜幽謡会（片山博通師十七回忌追善）は、四月一日、萬松館で春の会を開催し、とくに本年は、片山博通師十七回忌にあたり、追善の意をこめ、能「百萬・小書法楽之舞」が片山博通師で演ぜられた。番組は次のとおり。

「野守」（橋本碩道）
能「百萬」法楽之舞（片山博通師、子方・味方、ワキ・西村敏一郎、笛・藤田昭彦、小鼓・後藤孝一、大鼓・河村給一郎、太鼓・助川竜夫、間・茂山千之丞）

和調会春の会

和調会春の会（和調会）は、四月九日、萬松館で行なわれ、宝生流能田村（宝井博通）狂言、舞囃子、仕舞二十数番が上演された。

名古屋

名古屋（和調会）は、四月九日、萬松館で行なわれ、宝生流能田村（宝井博通）狂言、舞囃子、仕舞二十数番が上演された。

昭和54年4・5月放送予定

NHKラジオ第一放送（毎週日曜午前10時15分）	
4月15日(日)	宝生流「隔田川」①近藤三三ほか
22日(日)	金春流「養老」高橋汎ほか
29日(日)	喜多流「屋島」喜多長世ほか
5月6日(日)	観世流「雲雀山」①梅若万三郎ほか
13日(日)	世間流「上」②同 上
20日(日)	宝生流「加茂物狂」金井章ほか
27日(日)	観世流「夜討替我」浦田保利ほか
NHK・FM（毎週日曜午前7時15分）	
4月15日(日)	観世流「雲雀山」①梅若万三郎ほか
22日(日)	世間流「上」②同 上
29日(日)	観世流「田村」橋岡久共ほか
5月6日(日)	宝生流「藤戸」近藤 礼ほか
13日(日)	喜多流「大原御幸」①友枝久夫ほか
20日(日)	世間流「上」②同 上
27日(日)	観世流「田村」橋岡久共ほか

（放送予定につき変更の場合はご了承下さい。）

第二十三期第一回 青陽会

五月十三日(日)午前十時半始
熱田 神宮 能楽 殿
青木 武弘
長谷川 幸
加藤 保彦

名古屋猫謡会春の大会

五月十二日(土)午前九時始
熱田 神宮 能楽 殿
五月十二日(土)午前九時始
熱田 神宮 能楽 殿

名	姓	役	名	姓	役
無布施	野村又三郎	太郎冠	小林	喜久	太郎冠
加間	西村 欽也	太郎冠	河村	総一郎	太郎冠
追	井上松次郎	太郎冠	福井	啓次郎	太郎冠
屋	太田 照之	太郎冠	鬼頭	八郎	太郎冠
井	杉本 良隆	太郎冠	藤田	六郎兵衛	太郎冠
蟬	下郷美登里	太郎冠	梅田	六郎兵衛	太郎冠
林	梅田 てる	太郎冠	井戸	芳枝	太郎冠
雲	石田千恵子	太郎冠	中尾	隆子	太郎冠
盛	後藤 政実	太郎冠	三木	秀雄	太郎冠
隅	田辺 和永	太郎冠	池内	光之助	太郎冠
定	高橋 京子	太郎冠	岡田	朗詠	太郎冠
法	武藤 恵津	太郎冠	井戸	和男	太郎冠
弱	池内幸三郎	太郎冠	木村	実	太郎冠
師	藤田 静枝	太郎冠	井戸	良造	太郎冠
通	井上松次郎	太郎冠	福井	啓次郎	太郎冠
清	河村 敏子	太郎冠	藤田	六郎兵衛	太郎冠
小	井上 頼子	太郎冠	河村	総一郎	太郎冠
川	河村 敏子	太郎冠	後藤	孝一郎	太郎冠
融	河村 敏子	太郎冠	藤田	昭彦	太郎冠
山	河村 敏子	太郎冠	河村	昭彦	太郎冠
祝	河村 敏子	太郎冠	河村	昭彦	太郎冠

五月十九日(土)午前九時始
熱田 神宮 能楽 殿
武田太加志

和調会春の会 昭和三十九年四月 NHKラジオ 放送予定表

佐藤よし子「羽法師」(早野薫夫、伊藤新一)、「隅田川」(酒井利子、笠原美恵子、小島洋子、加藤はるみ)、「政宗」(山田五十鈴、藤村俊)、「初詣」(藤村俊、山田五十鈴、藤村俊、山田五十鈴)、「初詣」(藤村俊、山田五十鈴、藤村俊、山田五十鈴)

春夏秋冬 春、正月と観世会の翁 野村広二

「うらたけた能」に、能のよき・梅若の美しさ・六郎のたいご味をたんのうさせた。最高に詩的ふんい気の法味にひたれた。テレビ能は五三年の安宅がある。観世流は六郎・寿夫という大切な二人を続けでなくした。惜しい。友富翁は京都西本願寺の思い出が深い。奥野達也氏(東京金剛会)は名古屋に縁こそ薄けれど、まことに紳士。その懐捨(四九・三)は人生観の心をみせ感動した。さめた味でなく、あたたかく能をみせる喜びを味わせた。世に能の表現(世界)は広く深く高い。「能芸

伊勢内宮神楽殿竣工奉祝 金春流奉納能

伊勢内宮神楽殿の竣工を奉祝し、四月五日(木)伊勢神宮内宮参集殿舞台で金春流奉納能が催された。今回の金春流奉納能は第二十六回目、金春流宗家金春信高、本田

- 後ツレ 中田 幸子 前ツレ 清水 力 金春 欣三 飯富 雅介 西村 欽也 河村 隆一郎 藤井 啓次郎 藤田 昭彦 大西 安春

羽 西行 櫻 恋重 荷 正 尊 村 上 清 二 村 正 地 吉田 義正 早川 茂一郎 地 郷 武田 加志 武田 志房

熊 野 高橋 三郎 後藤 孝一郎 藤田 六郎兵衛 船 舟 慶 浅井 一元 安福 建雄 柳原 富司忠 藤田 昭彦

三 輪 八 賀 和 彦 河村 隆一郎 後藤 孝一郎 助 川 三 男 山崎 佐 東 子 飯富 雅介 山崎 哲生 藤井 啓次郎 藤田 昭彦

附祝言 大野 弘之 今沢 美和 加藤 保彦 後見 清沢 一政 地 須 藤 久 河村 昭彦

狂言やるまい会 第二十二回公演 五月二十日(日)午後一時半始 熱田 神宮 能楽 殿 狂言組 藤田 昭彦 福井 啓次郎 吉田 定男 観世 元信

止動方角 右近左近 越後 聲 野村 耕介 野村 又三郎 井上 松次郎 佐藤 友彦 茂山 忠三郎 茂山 千之丞

観世土曜定式能(二回)

五月二十六日(土)午後一時始
熱田 神宮能楽殿

能組
子生駒 里翠
立野垣 慶子
眞吉田 妙
有賀 澄子
服部 紗枝

草子洗小町
有賀 澄子
服部 紗枝

萬
植田隆之亮
吉田 定男
福井啓次郎
巽頭喜太郎
藤田 昭彦

須磨源氏 奥 啓助
鐘 旭 吉井 順一
狂言 吉井 順一
仕舞 奥 啓助
後見 久田 徹二 地謡
久田 秀雄
安藤 勝朗
祖父江修一
青木 武弘
加藤 兵衛
久田 秀雄

通小町 西村 欽也
後見 殿島 修二 地謡
梅田 邦久
今村 嘉男
加賀 敏彦
河村 証二
柳原 司忠
寛 三男
小島 一英
善 助
小島 善助
梅岡 善久
塚本 秀雄

〔有料〕
主権名 古屋 観世会
昭和五十四年度土曜定式能予定番組
三回 十月二十七日(土)
菊 慈 童
井 筒
小島 一英
片山 博太郎

の友社
欠上本町2-20
464)
7 9 8 4
屋 3 6 3 9 3
年 5 0 0 円
年 8 0 0 円
5 0 円

演能
能楽殿
熱田神宮能楽
殿での演能は
三月、四月は
有料能はじめ
各社中大会、

西田三好能評集

五流小書演出

劇場能として二十四回の伝統をもつ中日五流能は、いまや毎年春秋を飾る「五流定期能」として中部地方の能楽愛好者に親しまれており、さらに北陸中日能、東京五流能と大きな輪を形づくっている。その企画・運営の演出家として知られ、異彩をもつ能評活動をつづけ、小書による能の発掘上演に意欲的にとり組んできた西田三好氏によってこのほど「西田三好能評集」が刊行された。

この能評集の副題は「五流小書演出」とつけられ、一貫して小書による能の上演に情熱を傾けてきた著者なればこそできる「小書演出」の集大成である。

内容は、昭和二十七年から昭和五十三年までの二十七年間におよぶ全国各地の能評、幾多の名人や現在活躍している能楽師の足跡をたどっており、能評とともに、貴重な能楽史でもある。

とくに、その編集において、昭和五十三年の能評、観能記を初頭におき、頁の順を過去に求める方法をとっており、著者はその点について巻末で触れているが、この発想は、この能評集の「現代性」をより濃くするうえで役立っている。

年次別の目次は、演目のみならず、すべてに見出しをつけ読みやすさ、すばりに見出しをつけて読むのへの興味と関心を強めている。

巻頭には、観世、金春、宝生、金剛、喜多五流各家の能評集刊行に寄せることばが掲載されており、「小書演出」の執心の集大成であり、能楽師ばかりでなく、研究者や能の愛好者にとっても益するところが大きい。「膨大な記録は今も未曽有であり、能楽の資料としても文化的に大きな貢献をもたらそう」。「能は五流を観て楽しむ時代、小書能時代の具現」「小書上演の貴重な記録」と述べられているが、A5判、五百七十頁に及ぶ能評の集大成は、著者の能に対する情熱の所産であり、とくに東西にはさまた中部地方での演能に大きく携ってきたその記録、能評は、当地の能愛好者にとって新しい角度から、過去と現在の観能を結んでくれるものといえる。

また、小書演出とともに能評の各年次にわたる集録は、すべての演目についての演者とその「花」の凝集であり、能評もまたその外面と内面の把握がきびしく求められる。著者の「意思する眼」の幾十年にわたる蓄積と熟成を感ぜずにはいない。これは苦心にも通ずることであろうが、その意味で批評というより観能の心をこの著者を通じて教えられるところは多い。

この能評集の集大成が人々の中に生き続ける昭和戦後三十年の演能の「コマ」コマをほうふつとさせる意義は大きく、貴重であろう。

定価六千円

檜書店(東京・京都)発行。
なお今年六月末日まで発売記念特価として四千八百円で頒布される。(加野昭二郎記)

在原業平没後千百年

4月29日、追弔謡会

ゆかりの知立市・無量寿寺で
かきつばたの名所として知られる愛知県知立市八橋町・無量寿寺で、きたる四月二十九日(日)午前十時から在原業平没後千百年にちなむ「業平追弔謡会」が行なわれる。

この催しは、業平(八二五年〜八八〇年)の没後千百年に当り、(五月二十八日没)業平のゆかりをしのんで観世流の流友主催のもとに行なわれるもので、謡曲大会は、誰でも参加自由、謡曲は、業平、伊勢物語などにちなむ「杜若」「井筒」「雲林院」「熊野」「小島」が予定されている。

申込先 知立市牛田町福場83-1
山背治(〒472)
電話(〇五六六)三九二七
会費は、軽食、茶菓料として千円(当日持参でよい)

なお素謡の役割は、当日開始時刻までに来会された方により抽せんできめられる。

なお、当日は、短歌や俳句のグループでもそれぞれ大会が行なわれ、献歌、献句も受け付けられる。

また、五月二十八日は午後一時から知立文化協会八橋旧館保存会主催により知立市中央公民館において原業平没後千百年追弔謡会が行なわれる。

氏は大正六年に先代宗家金剛右京に入門。昭和十四年に皆伝を受け、三十六年一月から能楽協会常務理事、また東京支部長などもつとめた。昭和四十一年重要無形文化財「能楽」総合指定を受け、四十六年秋勲五等双光旭日章を受章し、翌年文化勲章を受章した。

奥野達也氏逝去

3月24日告別式

金剛流の奥野達也氏は、三月二十二日午後六時五十分、心不全のため、東京・世田谷の駒沢病院で逝去。享年八十一歳。

通夜同十三日午後七時から、密葬は十四日午後二時からともに自宅。本葬は三月二十四日午後二時から文京区向ヶ丘の長元寺で行なわれた。

氏は大正六年に先代宗家金剛右京に入門。昭和十四年に皆伝を受け、三十六年一月から能楽協会常務理事、また東京支部長などもつとめた。昭和四十一年重要無形文化財「能楽」総合指定を受け、四十六年秋勲五等双光旭日章を受章し、翌年文化勲章を受章した。

河村丘造師逝去

4月1日告別式

和泉流狂言方職分・河村丘造氏(かわむら・きやうぞう)は、三月三十日午後十一時四十分、脳こうそくのたため昭和区駒方町三十一の自宅で逝去された。

享年八十四歳。告別式は四月一日午後一時から駒方町・法音寺で執り行なわれ、焼香の列あをたず故人の徳をしのぶふさわしい盛儀であった。喪主河村知彦氏。

故河村丘造氏は本名武七、明治二十八年六月二十三日生れ。名古屋狂言界の伝統をいかし、狂言共同社の創立者の一、河村健三郎師を父として明治、大正、昭和を通じて共同社とともに歩み中部狂言界の長老として活躍した足跡はき

催し

79年能面二人展
津市三重画廊で
能面師・長沢草春、丹羽征夫両氏による「79年能面二人展」(能面譜付)が四月十九日から二十二日まで四日間、津市中央一八一・九、三重画廊で開催される。

伊勢路では初めての能面展で小面、若女、般若、孫次郎、増女、中將、平太など約二十五面が展示される。

観世流謡曲本
ちくさ正文館
ちくさ駅前
電話 1137

名古屋泉楽会春季大会
(故観世喜之師三回忌追善)
三月十八日(日)F面七時半台

流元 剛行 金本 流宗 世宗 観家

檜書店

〒101 東京都千代田区神田小川町2-1
電話(291) 2488-9
振替東京 3-3552
電話(231) 1990
振替京都 113

〒604 京都市中京区二条通鉄屋町東入

宝生流全曲旅の友

宝生流謡曲180番を五十音順に、翁、蘭曲を合せ収めてあります。

合本(全一冊) 定価¥27,000 (送料別)
天・地・人(三冊) 定価¥30,000 (送料別)
天の巻(翁・あ〜こ) 地の巻(さ〜と) 人の巻(な〜ろ・蘭曲)

〒101 東京都千代田区神田小川町2-1
電話(291) 2488-9
振替東京 3-3552
電話(231) 1990
振替京都 113

わんや書店

蔵元直営

酒藏白龍

白龍本店 名古屋市北区深田町
電話 911-7572

城

割烹・小料理

●熱田神宮能楽殿喫茶部
●住吉小路(中区栄3-10)
電話 241-0248
●喫茶・グリル(愛労館地下ビル)
電話 731-1128

熊野 高橋 一
吉田 市郎
矢橋 浩吉
吉田 定男
柳原 司忠
鬼頭 喜太郎
藤田 昭彦



名古屋・本山駅 電 762-2434代表

能 楽 の 友

題字は熱田神宮 榎田富司筆

発行能楽の友 名古屋千種区千種2丁目18-18 (郵便番号 464) 電話 (731) 798 振替口座 名古屋 36399 購読料 1年 500円 郵送の場合 1年 800円 一 部 50円

演能カレンダー (熱田神宮能楽殿)

5月	13日(日)	青陽会定期能 (有料)	(番組①面)
	19日(土)	鳳鳴会大会 (来場歓迎)	(番組①面)
	20日(日)	やるまい会公演 (有料)	(番組②面)
	26日(土)	観世会土曜定式能 (有料)	(番組②面)
	27日(日)	名古屋観舞会大会 (来場歓迎)	(番組②面)
6月	2日(土)	一謡会叶石会大会 (来場歓迎)	(番組③面)
	3日(日)	清韻会能 (有料)	(番組③面)
	5日(火)	熱田神宮大祭奉納能 (来場歓迎)	(番組④面)
	10日(日)	名古屋観世会定式能 (有料)	(番組④面)
	17日(日)	名古屋宝生会定式能 (有料)	(番組④面)
	23日(土)	麦の会 (有料)	(番組④面)
	30日(土)	梅若盛義後援会能 (有料)	(番組④面)
7月	8日(日)	朝日狂言会 (有料)	(番組④面)
	21日(土)	観世九皇会定期能 (有料)	(番組④面)
	29日(日)	名古屋観世会定式能 (有料)	(番組④面)
8月	4日(土)	第14回名古屋新能 (有料)	(番組④面)
	5日(日)	名古屋官庁実業団宝生会大会 (来場歓迎)	(番組④面)
	12日(日)	第20回大衆能 (有料)	(番組④面)
	26日(日)	名古屋観舞会大会 (来場歓迎)	(番組④面)

(演能変更の節はご了承下さい)

新支部長に
井上松次郎氏
能楽協会名古屋支部 能楽協会名古屋支部では、昨年四月高安滋郎支部長の逝去にともない、井上松次郎副支部長が支部長代行としてその任に当たってきしたが、このほど支部総会を開き、支部長として正式に井上松次郎氏(狂言方・和泉流)を選任した。なお、副支部長は鬼頭喜太郎氏(太鼓方・観世流)内藤泰二氏(シテ方・宝生流)西村欽也(ワキ方・高安流)の三氏である。

熱田神宮大祭奉納 6月5日 熱田神宮能楽殿 能楽協会名古屋支部

名古屋支部は、六月五日正午から熱田神宮能楽殿で大祭奉納能を開催。観世、宝生、金剛、金春、喜多五流と狂言和泉流の出演奉納で能三番、狂言、素謡、囃子、連吟、仕舞など。
能組は、観世流能「俊成忠度」(シテ本田殿、トモ松山幸親、ツレ今村嘉勇)宝生流能「羽衣」(シテ吉田俊彦)、観世流能「菊慈童」(シテ野垣慶子)狂言「雷」(井上礼之助、井上松次郎)素謡・観世流「竹生鳥」(田中武ほか)囃子・金春流「野宮」(林鉄郎)そのほか金剛流、喜多流、観世流仕舞、連吟。
後援中部能楽師会、(番組④面に掲載)入場無料。

近藤幸江師「道成寺」上演
6月3日 大槻清韻会能
大槻清韻会では、きたる六月三日(日)熱田神宮能楽殿で清韻会能を開催するが、近藤幸江師が大曲「道成寺」を所演する。名古屋では、ことし二月、柳原富司忠師職分十周年記念能で道成寺が上演されたが、ことしの熱田神宮能楽殿としてそれにつづく大曲の演能。とくに女流能楽師として

鳳鳴会大会

五月十九日(土)午前九時始
熱田神宮能楽殿
番外仕舞五之段 武田大加志
鞍馬天狗 武田志房
素謡 清 經 吉本米子
西行桜 大沢 晃 伊藤 義郎
恋重荷 吉田 義正
長谷川 島 早川茂一郎
正 尊 村上 清二村 正
舞獅子 巻絹(小薙義郎)熊野(高橋すゑの)郡(長谷川京子)
給弁慶(浅井一元)
山森 幸男
正 高安 勝久 真 敏一
柳原富司忠 藤田六郎兵衛
素謡 隅田川 武田 友志
吉川 正和 武田 志房
三川 祐平
独吟新之段 桑山 昭
仕舞 敦盛(大沢 晃)紅葉狩(伊藤 実)俊成忠度(二村 正)
遊行柳(早川つねよ)西王母(武田友志)

能羽 山崎佐東子
衣 飯富 雅介 山崎 哲生 鬼頭喜太郎
和合之舞 福井啓次郎 藤田 昭彦
舞獅子 三輪(八賀和彦)班女(財前光枝)松風(石井鐘子)
卒都婆小町(竹内 正)野守(武田孝子)
狂言盆 山 佐藤 友彦 井上松次郎
能土 頼光 武田 宗和
胡蝶 小川 雅章
山本 明宏
蜘蛛 西村 欽也 河村 孝一郎 筑助 三竜夫
入道之儀 飯富 雅介 後藤 孝一郎
附祝言 西村 欽也
主催 鳳鳴会
〔御来場歓迎〕

昭和54年5月・6月放送予定

NHKラジオ第一放送 (毎週日曜日午前10時15分)

5月

20日(日)	宝生流「加茂物狂」大坪十喜雄ほか
27日(日)	観世流「夜討替我」浦田保利ほか

6月

3日(日)	喜多流「鳥頭」栗谷新太郎ほか
10日(日)	宝生流「籠太鼓」武田喜永ほか
17日(日)	観世流「鶴鶴」藤波重和ほか
24日(日)	観世流「杜若」大槻文蔵・泉嘉夫ほか

NHK・FM (毎週日曜日午前7時15分)

5月

20日(日)	喜多流「小原御幸」友枝喜久夫ほか
27日(日)	観世流「田村」橋岡久共ほか

6月

3日(日)	観世流「朝長」◎観世静夫ほか
10日(日)	同上 ◎同上
17日(日)	宝生流「加茂」金井 章ほか
24日(日)	観世流「夜討替我」浦田保利ほか

(放送予定につき変更の場合はご了承下さい。)

入場券 一般二千五百円、学生千五百円
(会員制があります)
お申込み、お問合せは
昭和区南山町十二の七 野村方 TEL832-8071

越後 野村 耕介
野村 又三郎
井上 松次郎
佐藤 友彦
右近左近 茂山 忠三郎
茂山 千之丞
止動方角 野村 万之丞
野村 万作
野村 又三郎
野村 耕介

蝸牛 野村 又三郎
井上 礼之助
野村 信行
野村 万之丞
野村 万作
野村 又三郎
野村 耕介

膏藥煉 野村 万之丞
野村 万作
野村 又三郎
野村 耕介

素囃子 藤田 昭彦
福井 啓次郎
吉田 定男
観世 元信

狂言組 野村 又三郎
井上 礼之助
野村 信行
野村 万之丞
野村 万作
野村 又三郎
野村 耕介

第二十二回公演
五月二十日(日)午後一時半始
熱田神宮能楽殿

富士道
第二十二回公演
五月二十日(日)午後一時半始
熱田神宮能楽殿
名古屋 TE 愛知

京都

豊嶋弥左衛門師 一年祭追善能

5月20日 京都・金剛能楽堂

人間国宝・金剛流・故豊嶋弥左衛門師の一年祭の追善能楽会は、既報のように、きたる五月二十日(日)午後十時半、主たる追善能は次のおりである。

能「那部」深屋十二段(シテ豊嶋三郎、子方豊嶋幸洋、ワキ谷田宗二朗、ワキツレ高坂康弘、森晴政ほか、笛・光田洋一、小鼓・大倉源二郎、大鼓・河村総一郎、大鼓・前川光隆)能「井筒」(シテ金剛流、ワキ豊嶋十郎、笛・森田光春、小鼓・吉阪修一、大鼓・谷口正吾)能「海人」小書・変成

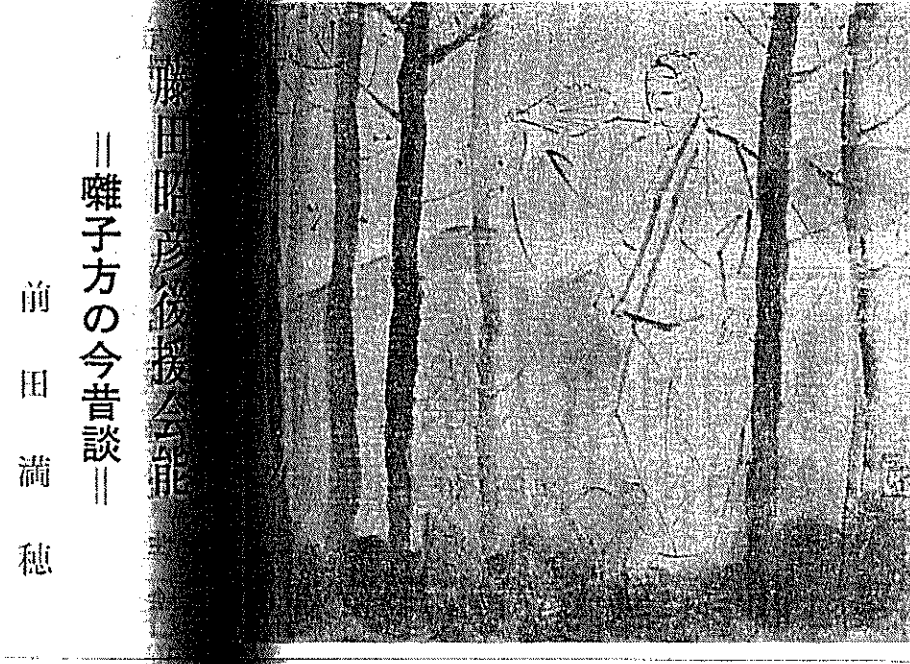
能紀行

五月の樹林

絵と文 二井栄逸

さんきらいが、わかもののようにみずみずしく鮮やかに、雑草の中に葉をひろげています。

さんきらいの本名は、サルトリイバツですが、どういうわけか俗称の「さんきらい」(山帰来)の方がよく使われます。ほんとうの山帰来にはとげがありません。小松や、栗の樹が芽吹いている雑木林に降りて、山吹(やまあい)の里を通りぬけて、山の中腹まで連れてきてもらいました。ごさの上に座っていると一日中うすうすとした気持ちになります。林の丘の向うには、八十八夜を目前にした茶畑が、若みどりの朝子をかぶって尻上りに松山まで連なっています。



噺子方の今昔談

前田満穂

噺子方の今昔談。前田満穂の文章。...

狂言和泉流宗家 和泉元秀に改名

狂言和泉流宗家・和泉元秀は、このたび和泉元秀と改名、三月十一日、東京・観世能楽堂で改名披露・和泉元秀が披露され、父・延命冠者ノ式「観世」(結上)「三人片輪」が上演された。なお名古屋では今秋十一月、改名披露・和泉元秀が披露される予定である。

吉翠会 十周年記念大会

5月20日(日)能楽堂で観世流・吉翠会(吉田妙師主宰)は五月二十日、名古屋市中区・栄能楽堂で「吉翠会十周年記念大会」を開催する。開演午前九時半

五月。それは、一年中で一番爽やかな季節です。私は私なりに背の季節と呼んでいます。その背さなるが故につめたさがあり、さやけさなるが故にさびしさがあるのです。

五月まつ花桶の香をかかげ、むかしの人袖の香です。今も忘れられない昔の人の袖の香にむせぶ古えの歌人の心は、五月の春色の中にも生きています。

観世土曜定式能(二回)

五月二十六日(土)午後一時始 熱田神宮能楽殿

草子洗小町 有賀 澄子 服部 紗枝

萬 植田隆之亮 吉田 定男 鬼頭喜太郎 藤田 昭彦

須磨源氏 奥 善助 須部 小島 須部 一邦 須部 一政

故山本博之先生七回忌追善 名古屋観衛会大会

五月二十七日(日)午前九時始 熱田神宮能楽殿

源氏供養 太田 和子 後藤孝一郎 寛 三男

梅 枝 鈴木さくみ 寛 三男

船弁慶 山本 和子 吉田 定男 鬼頭 昭彦

部下は、めのと侍と相談をして雲雀山の奥深く草庵を立て、侍に草花や、水の突を流らせて密かに養育するのでした。たまたま遊園に来た豊成は、花流りののど...

嘯子方の今昔談

前田 満穂

「笛方・藤田昭彦君の後援会が出来て、このような盛大な会が催される、ご同慶の至りだね」

熱田神宮大祭奉納能

六月五日(火)正午始

熱田神宮能楽殿

(舞) 竹生島 加藤 保彦 田中 武 長谷川 章

(観) 俊成忠度 飯富 雅介 吉田 定男 福井啓次郎 鬼頭 季信

(奏) 後見 梅田 邦久 地謡 須部 政一 青木 一武

(舞) 野 宮 林 鉄郎 河村 啓一 藤田 昭彦

(舞) 清 經 七 牧野 元子 東川 三郎 藤田 昭彦

(舞) 女郎花 河井 隆子 東川 三郎 藤田 昭彦

(舞) 女 川 三郎 藤田 昭彦

「ところが、その心配が出て来た、と指摘する人もいます。しかし、名古屋は大丈夫だ。新鋭の進出で新鮮の気みなぎるといったところだ。」

「そこは違うな。四拍子は踏を絶つどころか、ますます健在だ」

「表向きはね。裏の苦労は明治末年とそう変わらないという人もいます。それをしりて今日に至ったのは、一つは扶桑記者の予想を越えた四拍子職分の芸への執着にあるのだろ。」

「もう一つは時代の力」

「特に戦後の古典芸能への再認識。とにかく現在は四拍子モチモチで活の手も借りたくらい。勢い生活も向上の一途とか、もともと東京の話だね」

「生活の向上は結構だが、芸の向上はどうかね。ゆとりが出来るといっていいのだろうか。」

「(4月15日熱田神宮能楽殿)」

この山が雲雀山のように思えてくるのです。そして、浅みどりに芽吹く小橋の向うに、唐織脱掛けのシテの舞姿が、ふと、目に入る。

(舞) 杜 若 武木 末吉

(舞) 通 盛 須部 甫 地謡 加賀 敏彦

(舞) 藤 戸 長田 誠 地謡 藤田 直輝

(舞) 羽 衣 杉 江 元 後藤 孝一郎 助川 三男

(和) 雷 能 井上 礼之助 井上 松次郎

(舞) 菊 慈 野垣 慶子 西村 敏也 後藤 孝一郎 鬼頭 重太郎

(附祝言) 能楽協会名古屋支部

(御来場歓迎) 後援 中部 能楽師会

六月三日(土)午前九時半始

熱田神宮能楽殿

若杉 春江 河野 光昭 富永 五郎

高木 のぶ 伊藤 康子

放 下 僧 高野 瀬三 相原 弘

丹羽 祥子 後藤 孝一郎 森本 重一

吉田 明 福井 啓次郎 藤田 昭彦

丹羽 祥子 後藤 孝一郎 森本 重一

内藤 孝一郎 藤田 昭彦

後藤 孝一郎 鬼頭 喜太郎

鬼頭 喜太郎

鬼頭 喜太郎

鬼頭 喜太郎

鬼頭 喜太郎

鬼頭 喜太郎

鬼頭 喜太郎

鬼頭 喜太郎

鬼頭 喜太郎

鬼頭 喜太郎

鬼頭 喜太郎

鬼頭 喜太郎

鬼頭 喜太郎

鬼頭 喜太郎

鬼頭 喜太郎

鬼頭 喜太郎

鬼頭 喜太郎

鬼頭 喜太郎

六月三日(日)午前十一時始

熱田神宮能楽殿

水藤 元三 山本 正人 藤田 昭彦

山本 正人 藤田 昭彦

藤田 昭彦

藤田 昭彦

藤田 昭彦

藤田 昭彦

藤田 昭彦

藤田 昭彦

藤田 昭彦

藤田 昭彦

藤田 昭彦

藤田 昭彦

藤田 昭彦

藤田 昭彦

藤田 昭彦

藤田 昭彦

藤田 昭彦

藤田 昭彦

藤田 昭彦

藤田 昭彦

藤田 昭彦

藤田 昭彦

藤田 昭彦

藤田 昭彦

藤田 昭彦

番外仕舞清 経キリ 山本 順之 隅田川 山本 真賀

追加 東岸居士 山本 勝一 吉田 定男 藤田 昭彦

「名」古「屋」鏡「衛」会

「主催」山本 勝一

「後援」山本 勝一

「協賛」山本 勝一

「共催」山本 勝一

「協力」山本 勝一

「顧問」山本 勝一

「監修」山本 勝一

「演出」山本 勝一

「脚本」山本 勝一

「衣装」山本 勝一

「化粧」山本 勝一

「音響」山本 勝一

「照明」山本 勝一

「通訳」山本 勝一

「案内」山本 勝一

「受付」山本 勝一

「清掃」山本 勝一

「雑用」山本 勝一

「協力」山本 勝一

「顧問」山本 勝一

「監修」山本 勝一

「演出」山本 勝一

「脚本」山本 勝一

「衣装」山本 勝一

「化粧」山本 勝一

「音響」山本 勝一

「照明」山本 勝一

「通訳」山本 勝一

「案内」山本 勝一

「受付」山本 勝一

「清掃」山本 勝一

「雑用」山本 勝一

「協力」山本 勝一

「顧問」山本 勝一

「監修」山本 勝一

「演出」山本 勝一

「脚本」山本 勝一

「衣装」山本 勝一

「化粧」山本 勝一

「音響」山本 勝一

「照明」山本 勝一

「通訳」山本 勝一

「案内」山本 勝一

「受付」山本 勝一

「清掃」山本 勝一

「雑用」山本 勝一

「協力」山本 勝一

「顧問」山本 勝一

「監修」山本 勝一

「演出」山本 勝一

「脚本」山本 勝一

「衣装」山本 勝一

「化粧」山本 勝一

「音響」山本 勝一

「照明」山本 勝一

「通訳」山本 勝一

「案内」山本 勝一

「受付」山本 勝一

「清掃」山本 勝一

「雑用」山本 勝一

「協力」山本 勝一

「顧問」山本 勝一

「監修」山本 勝一

「演出」山本 勝一

「脚本」山本 勝一

「衣装」山本 勝一

「化粧」山本 勝一

「音響」山本 勝一

「照明」山本 勝一

「通訳」山本 勝一

「案内」山本 勝一

「受付」山本 勝一

「清掃」山本 勝一

「雑用」山本 勝一

「協力」山本 勝一

「顧問」山本 勝一

「監修」山本 勝一

「演出」山本 勝一

「脚本」山本 勝一

「衣装」山本 勝一

「化粧」山本 勝一

「音響」山本 勝一

「照明」山本 勝一

「通訳」山本 勝一

「案内」山本 勝一

「受付」山本 勝一

「清掃」山本 勝一

「雑用」山本 勝一

「協力」山本 勝一

「顧問」山本 勝一

「監修」山本 勝一

「演出」山本 勝一

「脚本」山本 勝一

「衣装」山本 勝一

「化粧」山本 勝一

「音響」山本 勝一

「照明」山本 勝一

「通訳」山本 勝一

「案内」山本 勝一

「受付」山本 勝一

「清掃」山本 勝一

「雑用」山本 勝一

「協力」山本 勝一

「顧問」山本 勝一

「監修」山本 勝一

「演出」山本 勝一

「脚本」山本 勝一

「衣装」山本 勝一

「化粧」山本 勝一

「音響」山本 勝一

「照明」山本 勝一

「通訳」山本 勝一

「案内」山本 勝一

「受付」山本 勝一

「清掃」山本 勝一

「雑用」山本 勝一

「協力」山本 勝一

「顧問」山本 勝一

「監修」山本 勝一

「演出」山本 勝一

「脚本」山本 勝一

「衣装」山本 勝一

「化粧」山本 勝一

「音響」山本 勝一

「照明」山本 勝一

「通訳」山本 勝一

「案内」山本 勝一

「受付」山本 勝一

「清掃」山本 勝一

「雑用」山本 勝一

「協力」山本 勝一

「顧問」山本 勝一

「監修」山本 勝一

「演出」山本 勝一

「脚本」山本 勝一

「衣装」山本 勝一

「化粧」山本 勝一

「音響」山本 勝一

「照明」山本 勝一

「通訳」山本 勝一

「案内」山本 勝一

「受付」山本 勝一

「清掃」山本 勝一

「雑用」山本 勝一

「協力」山本 勝一

「顧問」山本 勝一

「監修」山本 勝一

「演出」山本 勝一

「脚本」山本 勝一

「衣装」山本 勝一

「化粧」山本 勝一

「音響」山本 勝一

「照明」山本 勝一

「通訳」山本 勝一

「案内」山本 勝一

「受付」山本 勝一

「清掃」山本 勝一

「雑用」山本 勝一

「協力」山本 勝一

「顧問」山本 勝一

「監修」山本 勝一

「演出」山本 勝一

「脚本」山本 勝一

「衣装」山本 勝一

「化粧」山本 勝一

「音響」山本 勝一

「照明」山本 勝一

「通訳」山本 勝一

「案内」山本 勝一

「受付」山本 勝一

「清掃」山本 勝一

「雑用」山本 勝一

「協力」山本 勝一

「顧問」山本 勝一

「監修」山本 勝一

「演出」山本 勝一

「脚本」山本 勝一

「衣装」山本 勝一

「化粧」山本 勝一

「音響」山本 勝一

「照明」山本 勝一

「通訳」山本 勝一

「案内」山本 勝一

「受付」山本 勝一

「清掃」山本 勝一

「雑用」山本 勝一

「協力」山本 勝一

「顧問」山本 勝一

「監修」山本 勝一

「演出」山本 勝一

「脚本」山本 勝一

「衣装」山本 勝一

「化粧」山本 勝一

「音響」山本 勝一

「照明」山本 勝一

「通訳」山本 勝一

「案内」山本 勝一

「受付」山本 勝一

「清掃」山本 勝一

「雑用」山本 勝一

「協力」山本 勝一

「顧問」山本 勝一

「監修」山本 勝一

名古屋観世会定式能(第三回)

六月十日(日)十二時半始
熱田神宮能楽殿

班女 殿島修二 水藤元三 長谷川章

今村嘉弘 青木武弘 小島一英 杉村一英 須部竹翠

養老 西村山弘 飯富雅介 後藤孝一郎 助川三男 滝夫

花 篠クルイ 片山慶次郎 地謡 梅田邦久 梅田邦久 梅田邦久

寝音曲 茂山千之丞 後見松本 薫 久田敬二

藤戸 岡治郎右衛門 藤井啓次郎 藤田昭彦

後見 久田秀雄 梅田邦久 梅田邦久 梅田邦久

梅若万紀夫 地謡 加藤兵衛 河村延二 久田秀雄

附祝言 有科 第二十三期・第二回 主催名古屋観世会

名古屋宝生会定式能 六月十七日(日)午後一時始 熱田神宮能楽殿

俊成忠度 飯富雅介 吉田定男 藤田六郎兵衛

杜若 西村欽也 後藤孝一郎 藤田昭彦

空腕 井上松次郎 佐藤友彦 後見井上礼之助

三山 西村欽也 河村延二 梅田邦久 梅田邦久

の友社 欠上本町2-20 464 7984 屋36393 年500円 年800円 年50円

梅猶会定期能をみる

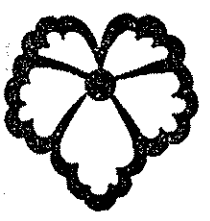
竹尾邦太郎

梅猶会の初番は「絵馬」です。所は伊勢斎宮。つい先頃、斎宮社発掘の話題を身近に聞いている折柄、懐かしい想いに駆られます。道行の、ハ勢多の長橋うち渡り、と相対のワキツレとの同吟から袖を軽く翻して正に直すワキの前方には、茫々と展けた琵琶湖が男婦とし、西村欽也の充実ぶりが窺われます。真の一声の囃子は、深沈とした宮居に過ぎてゆく時を刻むかのように、やがてツレ、寺岡佑子を立ててシテ尉・梅若盛義が出ます。ツレは左手に黒の、シテは右手に白の絵馬を持ちます。水衣の肩を上げて見えますが、眉グセになつて後見がその肩を見取ると、視覚的に無で肩に優しく見え、絵馬掛け争いの妥協後の平穏を表わす様です。シテとツレが伊勢の二柱の頭現を言つて中入すると、アイ末社の神・大野弘之が出ます。常は蓬萊の鬼が数々、打出の小槌を打つてはしやままる由ですが、お膳立賑やかなこの曲には鬼共の方が面白いです。例によつて斎宮絵馬掛けの故事を語り、思ひに囃子に合せて舞いますが、弘之の生真面目な芸が却つて濃味を濃くします。出端でシテ天照大神・盛義を中

清貴は風折鳥帽子をつけています。先行曲に影響されて装束付などが変わると、見所はついでにそに気がゆき、一曲が不利になるのは否めなれないと思つて。その所為でもないのでしょうか部分的に住いところはありました。が全体は散漫な印象を拭きません。例えばツレの運びは癖なので、感じていただけない。興に乗ってはいても物見遊山ではないので、首目でもあるのですから静かに運ぶべきでしょう。またシテの澄明な端、カケリでの裏深い気分の描写、水鏡で自分が姿を見る所作の的確な美しさも、下層からすっきり立上らなかつたり、ツレが作物の中を杖を探るのにごそごそする感を与えては複雑さだけが目立ち、もう一つ引き締まったところが見られず残念です。「安達原」はシテ能沢恵美子、ワキ藤崎蔵。サシ調から作物を出して下層の間に雰囲気があり出たし好調です。棒輪軸に向つて糸を紡ぐ緩急の所作にも胸中の感懐を糸に託して吐露してゆく趣がよく表われています。中入前の、背を見せたまま、思ひあぐねた態に口をつけて出る「や」の所もよく聞き、開を見るなど念を押ししてしまふ中をゆつくりと運び、二の松から急に歩を速めて幕入する一連の流れにもシテの思入が旨く描写されます。初能に続きアイ大野弘之は、三御座を特に意識させずにけれん味の無い諧謔をみせます。後場の折りから切へ雪崩込み過程は、京都の脇方藤崎蔵が熱演で、紅潮「統芸能」(四月号)

住居表示変更

本紙では、このたび新住居表示の実施により、五月五日から次のように住所が変更になりました。新住所(郵便番号464) 名古屋千種区千種二丁目18番18号 (前住所名古屋千種区吹上本町2丁目20番地)



御料理 あつた 蓬菜軒

中華料理 桃源亭

欧風料理 とんかつ くら

お知らせ 長沢氏春氏 重文保存技術の保持者指定 久田観正会春季大会 四月二十二日(日)午前九時始 熱田神宮能楽殿

流元 剛行 金流 流本 世宗 観宗 檜書店 干101 東京都千代田区神田小川町2-1 電話(291)2488-9 干604 京都市中京区二条通鉄屋町東入 電話(231)1990

民芸食事処 まんだら 西みやか 名古屋千種区浅間町3番地 TEL 524-0168

くら 名古屋市千種区大久手町4-11 TEL 731-3680

文化財保護委員会(坂本太郎会) 新たに人間国宝に指定された三

能紀行

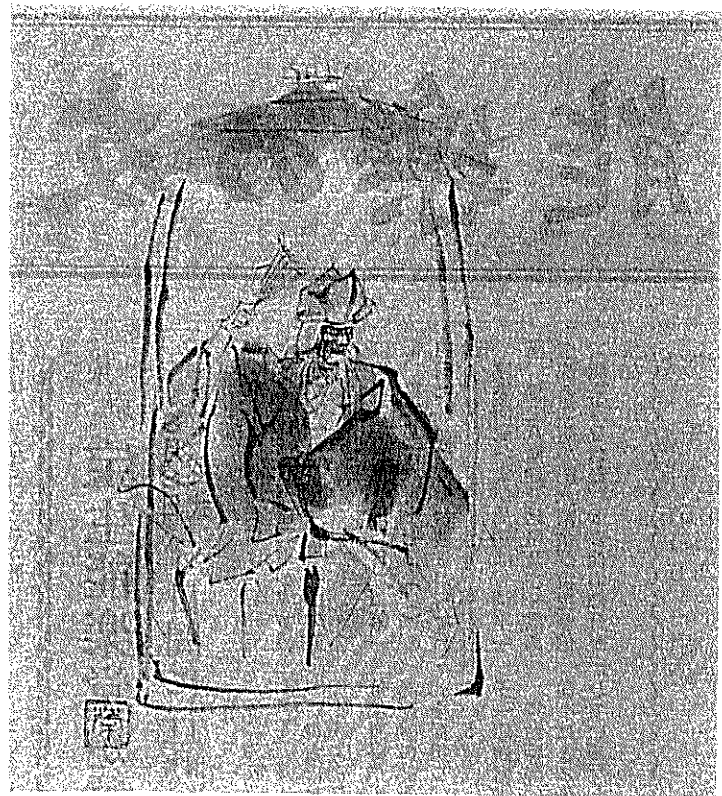
(101)

蘇える平家

絵と文 二井栄逸

三重県一志郡野野町の山奥、日川谷というところに、六代丸妙覚の墓がある。その墓をきいたので、ぜひとも近い日に見に行きたいと思つた。

伊勢の山奥には、意外に平家落人の末裔が多い。妙覚の墓を守り日川にひっそりと住む十数人の人達も平家ゆかりの人達だといふ。



ようしよう)ともてはやされたのである。妙覚は、斎藤五郎、六郎と共に那智の沖からのがれた父の跡を慕って、高野や熊野の社寺を訪ねたが、めぐりめぐるとは出来なかつた。妙覚に付き添つて鎌倉の行方をたずねた斎藤五郎、斎藤六郎は、白髪を墨にそめて出陣した斎藤五郎の奥子である。

雑草に覆われた日川の里は、交通の便もなく、車か徒歩でゆくより仕方が無いとのことで、尚更行つて見たくなかつた。平家ゆかりの地、野野町本川を訪ねて、の矢ヶ瀬氏の手記を讀みながら思つたことである。

現在、蓋を守つていられるのは、妙覚に仕えた斎藤五郎の後裔のことであるから、実盛の後裔になる理である。

滅びゆく平家の姿は、世阿弥によつて、いくつもの能になり不滅のものになつていった。花のようにすがすがしく滅び去つた平家の武將達は、今、能の中に生き生きと蘇える。アトリエの中にも未完成の平家の群像がひしめきあひながら蘇る。

人間あらゆる感情を抽象化し、空間の世界に魂の飛翔を可能ならしめたこと。

又、たとえば、面(おもて)をかけたシテの顔を直面(ひため)と呼び、人間の顔まで否定してしまふ演出上の制約は、たくましい芸力を内へ内へと深くさせ、精神的なものに昇華させた事等。能の幽玄はこういうところから生れてくるのである。

(絵は「泉清」)

宝生能楽堂完成にあたり

宝生英雄宗家の挨拶



第十八代宝生流宗家・宝生会会長 宝生英雄氏は次のようにあいさつしている。

昭和五十三年一月より着手した水道橋能楽堂の再建工事が、一年半の日子を費してこのほど完工、宝生能楽堂という新しい名称のもとに、六月八日落成式を行ないました。

今回の事業については、資金調達が、工事促進をはじめ、幾多の難関に直面いたしました。資金については流儀の全職分あげて献身的な奔走のおかげで、全国流友の指椽から多大な寄付をいただいた。ほぼ所期の目的に到達して後願の要もなくなりました。また工事については住友建設の工事担当の方々が、その当初より昼夜を分かたず活動して予定通りに進行し、無事完成に至りました。

これらを顧みますと、こんどの再建は文字通り流儀の総力を結集した成果のあらわれと申すべく、今後宝生能楽堂は流儀の中心的存在として、また各流儀の職分としてますます重用されるものと存じます。宝生能楽堂完成にあたり職分、流友、工事関係者をはじめ一臂のお力をかしていただいた方々に厚く御礼を申し上げます。また今後とも宝生能楽堂の発展に力を加えてくださることを切に望みます。

「萬開口御寿文集」について

四海の民に恵まれて、御きょうやまひ奉る、いとまき高御座、久く長き夏木立、しげりさかゆく御寿、めでたかりける御代とかや。と記されている。

名古屋梅若盛義後援会能

六月三十日(土)午後一時半始

熱田 神宮 能楽殿

雨之段 梅若 善高

一 潜 梅若 修一

山 姥 岡田 朗詠 鬼頭喜太郎

三人片輪 野村又三郎 佐藤友彦 井上礼之助 井上松次郎

芭蕉 観世 静夫 寛井啓次郎 藤田六郎兵衛

屋 島 西村 欽也 河村総一郎 藤田 昭彦 飯富 雅介 後藤孝一郎

附祝言 主催 梅若盛義後援会 後援 中日新聞

臨時会員券 三、〇〇〇円(自由席) 学生会券 一、〇〇〇円(二階席)

第二十一回 朝日狂言会

七月八日(日)午後二時始

熱田 神宮 能楽殿

二人大名 野村又三郎 大野 弘之

加田太助 佐藤友彦

附祝言

「たしかに達者なものだ。何をやらせてもソツがない。こんどの「膏葉」でも「止動方角」でも平均点以上だ」

素囃子 神舞

六月三十日(土)午後一時半始

熱田 神宮 能楽殿

雨之段 梅若 善高

一 潜 梅若 修一

山 姥 岡田 朗詠 鬼頭喜太郎

三人片輪 野村又三郎 佐藤友彦 井上礼之助 井上松次郎

芭蕉 観世 静夫 寛井啓次郎 藤田六郎兵衛

屋 島 西村 欽也 河村総一郎 藤田 昭彦 飯富 雅介 後藤孝一郎

附祝言 主催 朝日新聞 狂言協同社 後援 名古屋テレビ

臨時会員券 三、〇〇〇円(自由席) 学生会券 一、〇〇〇円(二階席)

第二十一回 朝日狂言会

七月八日(日)午後二時始

熱田 神宮 能楽殿

二人大名 野村又三郎 大野 弘之

加田太助 佐藤友彦

附祝言

「たしかに達者なものだ。何をやらせてもソツがない。こんどの「膏葉」でも「止動方角」でも平均点以上だ」

昭和五十四年度第三回 名古屋観世九臈会定期能

七月二十一日(土)午後一時始

熱田 神宮 能楽殿

能 長谷川 章 観世 武雄

丸 西村 欽也 寛井啓次郎 鬼頭 季信

能 狂言 薩摩守 佐藤 友彦 井上礼之助 井上松次郎

歌 占キリ 高橋 暎一

仕舞 盛クセ 加藤 保彦

舞 雀 山 塚本 秀雄

鼓 吉田 妙 小林 喜久

能 天 西村 欽也 河村総一郎 藤田 昭彦 弄鼓ノ舞 柳原富司忠 藤田 昭彦

附祝言

「観世の能は、今もなお、その形を、狂言に比べて、二つの回答を出した。何をやらせてもソツがない。こんどの「膏葉」でも「止動方角」でも平均点以上だ」

「京都では茂山千五郎がテレビドラマなど他分野での活躍が目立つし、名古屋でも佐藤友彦が新劇

「観世の能は、今もなお、その形を、狂言に比べて、二つの回答を出した。何をやらせてもソツがない。こんどの「膏葉」でも「止動方角」でも平均点以上だ」



水道橋能楽堂の再建工事が、一年半の日を費してこのほど完工、宝生能楽堂という新しい名称のもとに、六月八日落成式を行なう。

「萬世開口御寿文集」について

辻 宏 一

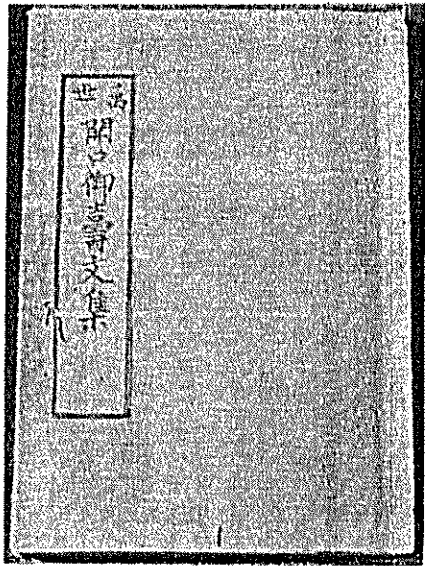
ワキ方の特別な習事「開口(かいこう)の式」について、本紙では、高安流ワキ方・西村弘毅氏(故人)の記述を第十三号(昭和四十三年一月十日号)に紹介、掲載しました。このたびは能楽研究者、岐阜女子短期大学助教授辻宏一氏が「開口」についての研究論文を学会で発表されたのを機に、とくに高安流宗家蔵本「萬世開口御寿文集」についてと題して本紙に寄稿して頂きました。「開口」についての研究として貴重な内容であり、本号から回を重ねて連載いたします。(編集部)

先般、高安流宗家に所蔵されておられる「開口御寿文集」を調査させていただく機会を与えられたことにより、幾分これまでの開口についての説を、修正することができたのではないかと考えられる。この高安流宗家蔵本には、開口に関する記事が、全部で四十五あり、今日現存する開口資料では秀の管見した範囲内で、最も完備しており、数的にも多い。その上ワキ家の資料であることから、信頼性の高いものと言える。開口の記事は、寛永三年九月九日、京都二条城において、秀忠が太政大臣に任せられた時の祝賀能(注1)に始まり、文化十年十一月、竹千代誕生祝賀能で終わっている。採録されている開口は、幕府関係のものから、紀州・尾張・加賀の大名、禁裏関係にわたって広く集められている。採録者は、菅敬元と記されている。この方は、元禄三年、高安流ワキ師として尾張藩に

召し抱えられた西村庄兵衛長久から三代目当り、寛政七年四月に逝去している。ところが、開口文は、文化十年に及んでいて、恐らく四代目西村忠藏が、引き続き後の開口文を集録したのではないかとと思われる。

西村敬元が、開口文を集録する直接の動機となったのは、明和八年後桃園天皇即位の祝賀能に際して、開口を勤めたことが起因しているようである。その時の開口文は、

明和八年卯四月二十七日
人皇百十九代 御諡英仁 御即位
同五月二十七日二十八日御壽賀
御能
伏原中納言宣彦
御能奉行
廣橋中納言伊光卿
作文備家
谷左中納言貞勝
開口御寿文 尾州家集官
西村庄兵衛管原敬元



高安流宗家蔵本「萬世開口御寿文集」

まず、開口が江戸時代に、どのような場合に行なわれたのか考えてみたい。便宜のために、幕府・大名関係と禁裏関係に分けて、高安流宗家本を中心に、「能楽資料集成」「能楽史料」「徳川史紀」などの資料を参考にして当ててみると、ほぼ、次のような結果になった。

幕府・大名関係
將軍宣下祝賀能、官位昇進祝賀能、元服祝賀能、若君誕生祝賀能、皇子誕生祝賀能、婚祝賀能、入部祝賀能、日光社参祝賀能、この他、野々村戒三著「能楽古今記」によると、文化八年二月二日に、金沢城火災後の修築完成を祝賀して、開口が行なわれたことが「北藩秘鑑」に記されていると指摘されている。

以上が、幕府・大名関係における開口を伴う祝賀能の例である。
禁裏関係
天皇即位祝賀能、大嘗会祝賀能、親王宣下祝賀能、東宮元服祝賀能、

この他に、江戸時代には、東、西本願寺、春日神社若宮祭において、開口が行なわれているが、紙面の都合上、割愛する。

江戸時代における開口を伴う祝賀能は、幕府・大名・禁裏・本願寺・春日神社若宮祭などの大祝能に限定されて演じられていたようである。なお、これまでの説の中には、江戸時代の開口は、將軍家・禁裏・本願寺の大祝能に限るとする説もあるが、すでにふれたように加賀藩においても、さらには豊高日記によると、仙台藩においても

「翁。三番。相生。風流。開口の詞にいふ。夫いや高き松の蔭。ならびて生るこの君の。千代萬代の秋風を。つたふる栄へ重ねつ。めでたかりける時とかや。高砂。田村。東北。道成寺。祝言金札。狂言末広がり。昆布うりなり。徳川幕府の大祝能は、幾分相違することもあるが、ほぼ右の手順に従って演じられていたと考えられる。(つづく)

大祝能の典型的能組の例を、「徳川史紀」寛政四年壬子七月十三日竹千代君誕生祝賀能の能組によってみると、次のように記されている。

「翁。三番。相生。風流。開口の詞にいふ。夫いや高き松の蔭。ならびて生るこの君の。千代萬代の秋風を。つたふる栄へ重ねつ。めでたかりける時とかや。高砂。田村。東北。道成寺。祝言金札。狂言末広がり。昆布うりなり。徳川幕府の大祝能は、幾分相違することもあるが、ほぼ右の手順に従って演じられていたと考えられる。(つづく)

「老熟。円熟の味かね。さあぞればどうだろう。特に万作の場合「千作線」の「り」で彼の義経を見たら、これは義経の芝居かと思われ、これは並み居る各界の名優、精鋭を庄するばかりに光って見え、あの演技力は既に狂言のワケを越えたものだ。あの晩教育テレビで京都の若い狂言師たちが、伝

へ触手を動かしている。それをいひの悪いのという時代ではもうない。現に万作、千五郎、友彦、いづれも本来の狂言でも人並み以上にやっている。他人のメシを食って、はじめて自分を正しく見る眼が出来るといふたとえが真実とすれば

「名コンビが活躍」「やるまい会」を見る
前田 満穂
コンビで「右近左近」、これはどういふ悪いのという時代ではもうない。現に万作、千五郎、友彦、いづれも本来の狂言でも人並み以上にやっている。他人のメシを食って、はじめて自分を正しく見る眼が出来るといふたとえが真実とすれば

「やるまい会」を見る
前田 満穂
コンビで「右近左近」、これはどういふ悪いのという時代ではもうない。現に万作、千五郎、友彦、いづれも本来の狂言でも人並み以上にやっている。他人のメシを食って、はじめて自分を正しく見る眼が出来るといふたとえが真実とすれば

「やるまい会」を見る
前田 満穂
コンビで「右近左近」、これはどういふ悪いのという時代ではもうない。現に万作、千五郎、友彦、いづれも本来の狂言でも人並み以上にやっている。他人のメシを食って、はじめて自分を正しく見る眼が出来るといふたとえが真実とすれば

九月に第十七回北陸中日能
第十七回北陸中日能はきたる九月十六日、石川厚生年金会館で催される。能は銀世流「恋重荷」(シテ観)能は銀世流「恋重荷」(シテ観) 番組次のおり。

第九回北陸中日能
九月十六日(日)午後零時半開演
石川厚生年金会館
金沢市石引四一七〇一

恋重荷
観世 清順
銀世 元昭
彩色 森 茂好
山本 則直
後見 竹前 治房
山中 義滋
地謡 河原 誠二
佐竹 和泉
安住 良治
友孝 泉 昭博
古川 友孝 泉 昭博

仕舞 花 月 玉川 博
楊 貴 妃 小太郎
清 弱法師 山田太佐久
野 守 経クセ 金森 孝介
渡辺容之助

仕舞 難 波 佐野 正治
実 盛 近藤 礼
舟 弁 慶 上田 照也
今井 泰男
仕舞 野 宮 森 茂好 渡部 晴義
合衆留 山本東次郎 住駒 陽介 森田 光春

仕舞 山 蔵 山本東次郎 山本 則直
近藤乾之助 大坪喜美雄
近藤乾之助 森 常好 渡部 晴義
雪月花之舞 殿田 謙吉 北村 晴義 三島元太郎
能村 英丘 森田 光春

附祝言
主催 北陸中日新聞

二人 野村又三郎 大野弘之
九田太田志 藤友彦
附祝言
弄鼓ノ舞 前住 隆彦

四月の能から

元昭の「遊行柳・青柳之舞」

博太郎の「三輪・白式神楽」

竹尾邦太郎

「遊行柳」は前が面白く思いました。ワキ遊行上人(欽也)が伴一人を連れての道行が、何か日暮れて心細い感じがしないでもないところに、朝倉尉を掛け、細かい濃朽葉色の小格子に藍色の水衣をつけたシテが重々しく一種ドスの利いた声で呼びかけるのです。ワキが、「老尼なりとも今少し急ぎ給え」と促すにも全く頓着なく二の松まで出ると、左右をゆっくりと見渡し、サシ謡になります。ワキは、「それにはたつぷりとした声量を抑えてズンと腹に響くのです。ついで地の、へこなたへ入らせ給へ」と、二の松を離れ、へ道しるべ、と一の松に立ち止まると地のへ急がせ給へ旅人、と逆は今度は左手を差してワキを促がすところ殊に興味があります。

悠揚迫らぬ前シテの出は、後シテ柳の柳が所謂柳に風の風情の柳ではなく、どっしりと根を張った揺るぎもない風格を備えた老柳のそれであることを暗示するのです。後場は物音に手間取った風で、その所為か出陣の囃子(六郎兵衛舜一郎・繪一郎・俊三)が何か重々しい感じがしました。唐草文様の緑色の引き廻しが置かれると、風折烏帽子に散髪、淡色の大口に秋草を透した薄茶色袴のシテが泰然と床几にかかっています。クセの名木たり、で物音を出ると、クセ舞になります。型どおりの左腕と舞い進み、當座で後見より左手に杖を取ると序之舞です。古雅な地でゆく趣があり、実にあっさりとなげく散りになり果て、と再び物音に入り、正に直して下居します。そして、へ残る朽木となり、りけり、と舞が終わると物音を出る囃子が残ったまま、余韻の残る舞の曲の効果が残ります。

どっしりとした柳の老木の風格を悠々と表現し、地頭藤井久雄以下地のシテとが四つ四つに組み重ねる舞臺になりました。(第二回観世会所見)

「三輪・白式神楽」は52年3月の大槻秀夫以来です。その時の笛は六郎兵衛。今回は藤井久雄が自己の後援会館でこの秘曲を勤めます。長上下の囃子方(昭彦・長十郎・繪一郎・元信)が大曲の位をもつて静々と出、同じく水色長上下の地謡方(静夫・慶次郎他)が出る、ついで緑色唐草文様の引き廻しをかけた物音が笛座に角かけて置られます。

低く音取が吹かれ、大鼓は座付いた態、やがて床几にかゝった小鼓が置かれ、ついで笛と小の二調一管になります。所謂音取置鼓、何となく神さびた、しんしんとした雰囲気を出し、その中をワキ玄智僧都(欽也)が角帽子・青無地袷斗目・緑色水衣・右手に紫の濃淡で染め分けられた房のある数珠をもつてすらすらと常陸まで出ます。淡々と進むと、真直ぐにワキ座へ行き、座付くと笛のヒシギで次第です。幕が上がり、暫くしてやつとシテ里女(博太郎)が幕際を姿を現わします。遠くから歩いてきた心持なのでしょうか。

面は深井か、秋草菊花模様の無紅唐織を着けた里女は水桶を手に一の松や手前まで出ると次第を口説きつぱりと謡います。地取の後更に高い調子で三返返にもう一度次第を謡うと、正に直しサシ謡になります。身辺を速捷するシテ里女、形而上的言辭を吐くワキ玄智僧都。この対照の妙は味があります。

やがてシテが舞臺に入つてワキとの問答になると、何やら問答の間に、神祕的なものから不思議な、いやいやと影門に込めて推

のですが、これが里女の正体を明かす伏線となつて、地のへ杉立てる門をしるして、と大きく廻り込むと、作物の横で更に小さく一まわりして、へ失せにけり、と中入します。絵画の遠近法をみるような巧い工夫が、小柄なシテ博太郎の手堅い演出で冴えます。

後シテは白練の着付に淡いクリム色の地に金・銀の一字雲の刺繍があり、白で管輪文を抜いた直衣に同色の大口。喝食室にはんわりと頬に紅をさしたような増をかけた、可憐な中にも気品のある女神です。床几のままの居合せから、へさすが別れの悲しさに、と立止るとあたりに清々しい気分が漂き、片山家の能だと思わせま

す。しかし神楽は非常に土俗的な感じのものに思われました。後半に後見から神の枝を扇に換えると囃子が中之舞の舞になり、シテは太鼓のナガシで幕際まで行く

と、小さく廻り、三の松で左袖をたゆたわせて被ぎ、右手の扇で面を隠すと、大小笛を繰り出す前より高い調子の太鼓のナガシに乗って、そのままの形で橋懸を作り物の中まで直行すると下居します。気が持が揚揚し、一切切迫感を感ずる。

キリは、へ思へば伊勢と三輪の神、と拍子を六つ踏み、へその関の戸の、と一の松で左袖を巻いて弱すと、そのまま横顔を隠すように地のうちに暮れ入ると、ワキは常陸まで出て、伏目がちにしんみりとした気分が留めまします。(藤田昭彦後援会館所見)

能や狂言を愛好している盲目の垂井勉氏は自分の随想などをテープにまとめ、夫人と共に録音編集

「お知らせ」
能や狂言を愛好している盲目の垂井勉氏は自分の随想などをテープにまとめ、夫人と共に録音編集

「お知らせ」
能や狂言を愛好している盲目の垂井勉氏は自分の随想などをテープにまとめ、夫人と共に録音編集



「お知らせ」
能や狂言を愛好している盲目の垂井勉氏は自分の随想などをテープにまとめ、夫人と共に録音編集

昭和54年6・7月放送予定

NHKラジオ第一放送 (毎週日曜日午前10時15分)			
(6月)	17日(日)	観世流「鶴杜」	鮎波重和ほか
	24日(日)	観世流「杜」	若大樹文蔵ほか
(7月)	1日(日)	金観世流「黒芦」	金春欣三ほか
	8日(日)	金観世流「天鼓」	関根祥六ほか
	15日(日)	金観世流「天鼓」	梅若恭行ほか
	22日(日)	金観世流「天鼓」	近藤礼ほか
	29日(日)	金観世流「歌占」	片山博太郎ほか
NHK・FM (毎週日曜日午前7時15分)			
(6月)	17日(日)	宝生流「加茂」	金井章ほか
	24日(日)	観世流「夜討替我」	浦田保利ほか
(7月)	1日(日)	宝生流「景上」	①宝生英雄ほか
	8日(日)	喜観世流「鳥頭」	②同 上
	15日(日)	喜観世流「鳥頭」	栗谷新太郎ほか
	22日(日)	喜観世流「杜」	鮎波重和ほか
	29日(日)	喜観世流「杜」	若大樹文蔵ほか
(放送予定につき変更の場合はご了解下さい。)			

玄という字

垂井勉

もう大分以前になるがテレビだったか、女流書家の篠田桃紅さんの話を聞いたことがある。それは、玄という字をクロとも読むが、そのクロは漆黒の黒という字の一步の話を聞いたことがある。それは、玄という字をクロとも読むが、そのクロは漆黒の黒という字の一步の話を聞いたことがある。それは、玄という字をクロとも読むが、そのクロは漆黒の黒という字の一步の話を聞いたことがある。

富士道の婚礼道具

家具の富士道

あなたに心をこめておくりする……

五月二十日(日)午後一時半始
熱田神宮能楽殿

社名 富士道
名古屋市中区栄3丁目35番18号
TEL代表 (262) 5547
愛知県西加茂郡三好町 TEL (05613) 2-1178

西田三好能評集 五流小書演出

中日五流能の名物プロデューサーとして知られる著者は、一貫して小書による能の上演に情熱を傾けてきた。本書に収められた昭和53年までの27年間に、およそ全国各地の能評は、幾多の名人や現在活躍の能楽師の足跡を記すとともに、能楽五流の小書演出の集大成ともなっている。

A判・600頁 6000円 発売記念特価 4800円
(特価期間6月末日まで)

検書店 東京都千代田区神田小川町2-1 電話(231)2488-9
京都市中京区二条通鉄壱町東入 電話 (231) 1990

名古屋鉄道株式会社

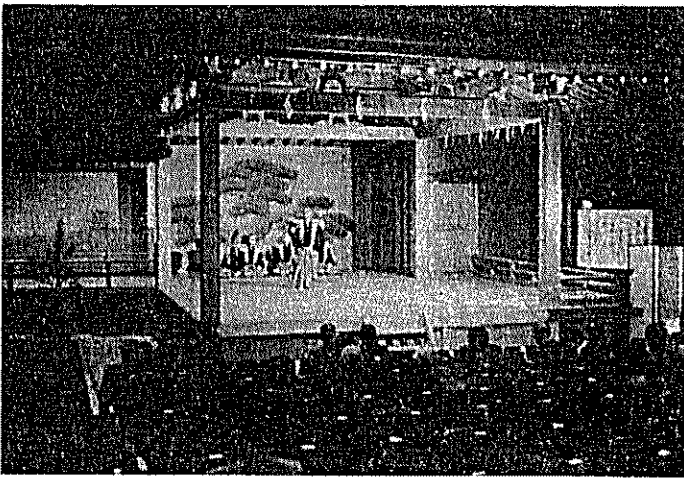
能 楽 の 友

題字は熱田神宮 篠田宮司筆

発行 能 楽 の 友
名古屋市中千種区千種2丁目18-18
(郵便番号 464)
電話 (731) 7 9 8 4
振替口座 名古屋 3 6 3 9 3
購読料 1年 500円
郵送の場合 1年 800円
一 部 50円

て来るのは、寛永十八年九月九日
家誕生祝賀能の時からである。
(注3)その時の能組は
「一輪三番舞」開演時流布。

青少年芸術劇場
8月に中部で5公演
文化庁主催の青少年芸術劇場の
中部地方の日程は次のとおり。
八月六日鈴鹿市民会館▽八月七
日伊勢市観光文化会館▽八月八日
岐阜市民会館▽八月九日刈谷市民
会館▽八月十日浜松市民会館
金剛流能「小鈴治」大藏流狂言
「泉」「瓜盗人」シテ方金剛水讀
広田陸一、藤田道雄、広田泰三、
狂言方・善竹玄三郎、善竹十郎、
善竹幸四郎が出演する。
なお、関東地方は七月に四県で
六公演、喜多流で演ぜられる。



東京 宝生能楽堂が完成

落成式は午後一時から宝生会兵野事務
理事の開会の辞について、宝生会会長、
第十八世宝生流宗家宝生英雄氏が「流儀
あけての総力の結集の結果であり、慈み
育て賜りたい」とあいさつ、理事務局長
の工事報告、表彰状、感謝状を授与、来
賓として大丸文化庁長官、東京都知事代
理奥野特別秘書、遠藤文京区長らから祝
辞が述べられ宗家による仕舞「高砂」で
落成式を終了、ひきつづいてロビーで近
藤乾三氏の発声で乾杯、殿堂の完成を記
念する祝賀会が催された。
舞台は入母屋造りの屋根がつけられ、
見所はスロープ式で固定席五〇一(補助
椅子一四四)前列の椅子との間隔は広く
演能者、観能者本位の設計によりゆ
とりある感じである。(写真)落成を祝
う宝生宗家の仕舞「高砂」

能楽協会の新役員決る
社団法人能楽協会は五月三十日
定時総会を開催、任期満了に伴う
役員改選で新理事長に坂井音次郎
氏(親世流)が就任、六月二十日
理事会で次のとおり新役員を決定
した。(敬称略)
(理事長)坂井音次郎(親世)
(常務理事)藤波重和(親世)
(理事)大坪十喜雄(宝生)広田陸一
(金剛)喜多長世(喜多)豊嶋十
郎(ワキ高安)山本東次郎(狂言
大蔵)田中一次(節森田)

「理事」梅若万紀夫(親世)鶴
沢雅(親世)高橋汎(宝生)武田
喜永(宝生)藤田道雄(金剛)栗
谷新太郎(喜多)宝生閑(ワキ宝
生)野村万作(狂言和泉)宮増純
三(小鼓親世)渡部晴義(大鼓高
野)小笠原八郎(太鼓親世)吉田
太一郎(大鼓大倉)
(各支部長)
東京 坂井音重(親世)
名古屋 井上松次郎(狂言和泉)
大阪 大西信久(親世)
北陸 佐野正治(宝生)

喜多実会長重任
日本能楽会役員改選
日本能楽会の新役員は六月二十
日付で次のとおり決定、喜多実会
長が再選された。
(会長)喜多実
(常務理事)親世元正、金春信
高、宝生英雄、金剛敏、森茂好、
金春悠右衛門、和泉元秀
(理事)木原康夫、大西信久、
片山博太郎、桜間道雄、金井章、
辰巳孝、今井幾三郎、栗谷菊生、
西村敏也、森田光春、藤田大五郎
大倉長十郎、幸内次郎、瀬尾乃武
安福春雄、親世元信、善竹忠一郎
(監事)桜間金太郎、寺井政敏

暑中御伺い申し上げます
熱田神宮 宮司 篠田 康雄
権宮司 長谷 晴男

とある。東照宮日光社参の祝賀
能が、大夫による翁を省略して、
ワキ方による「翁なし」の形式に
しなさいとかがあったようである。

に、これを祝賀して風流・開口が
行なわれている。
(注4)前西芳雄氏の論文から
能楽中心にまとめさせていただ

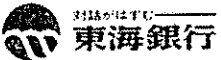
Table with columns for various associations and members: 観世元正, 梅若三郎, 山本観衛会, 梅若盛義, 藤井久雄, 竹韻会, etc.

て恩を酬えることなのでしよう、
漸し凝然と向き合った臨時が流れ
ます。松嶺が聞こえるかと思う節
けさのうちに「雅」と「セイ」を同
吟し、終つて舞台に入ります。
昭和54年
NHKラジオ
(8月) 19日(日) 和泉宗親
26日(日) 親世
(9月) 2日(日) 金春信高
9日(日) 宝生英雄
16日(日) 親世
23日(日) 栗谷新太郎
30日(日) NHK・FM
(8月) 19日(日) 親世
26日(日) 親世
(9月) 2日(日) 宝生英雄
9日(日) 親世
16日(日) 親世
23日(日) 金剛敏
30日(日) 親世
(放送予定)

みなさまの暮らしとともに...

預け・貯め・払う・借りると1円4枚 2年・1年・6ヶ月・3ヶ月...有利に貯める

[東海]総合口座・[東海]定期預金



東海銀行

能 樂 の 友

発行 能 樂 の 友

名古屋市中区千種区千種2丁目16番

(郵便番号 464)

電話 (731) 798

振替口座 名古屋 3633

購読料 1年 500円

郵送の場合 1年 800円

一 部 50円

演能カレンダー

(熱田神宮能楽殿)

- [8月]
- 26日(日) 名古屋観昭会大会 (来場歓迎)
- [9月]
- 2日(日) 青陽会能 (有料)
- 9日(日) 観世会定式能 (有料)
- 15日(祭) 中日特別教室 (来場歓迎)
- 16日(日) 豊嶋弥左衛門師一年祭 追善能楽会 (有料)
- 23日(祭) 和泉狂言会 (来場歓迎)
- 24日(休) 淡文会 (来場歓迎)
- 29日(土) 観世九皇会定期能 (有料)
- 30日(日) 宝生会定式能 (有料)
- [10月]
- 7日(日) 幸詔会大会 (来場歓迎)
- 10日(祝) 幽花会大会 (来場歓迎)
- 13日(土) 青陽会能 (有料)
- 14日(日) 猶恵会大会 (来場歓迎)
- 20日(土) 観正会大会 (来場歓迎)
- 21日(日) 邦詔会大会 (来場歓迎)
- 27日(土) 観世会土曜定式能 (有料)
- 28日(日) 橋岡久太郎十七回忌追善会 (有料)
- [11月]
- 3日(祭) 幸友会秋の会 (来場歓迎)
- 4日(日) 風韻会大会 (来場歓迎)
- 10日(土) 修風会大会 (来場歓迎)
- 11日(日) 観世会定式能 (有料)
- 17日(土) 一福会叶石会大会 (来場歓迎)
- (演能変更の節はご了承下さい)



第14回 名古屋新能 5日 熱田神宮神苑で開催

第十四回名古屋新能は、八月四日予定が雨模様のため順延され、五日(日)午後五時三十分から熱田神宮神苑前、特設舞台で行なわれた。

観世流仕舞「荒田」「大江山」「難波」「鶴之段」につぎ、観世能「賀茂」の壮快な演能、金剛流舞臺子「八島」。あいさつに立った本山名古屋市長は「毎年楽しみにしているこの新能に長野県からかけつけた。伝統の芸能の中に心やすらぎをみなさまとともに求めたい」と述べ、金春流、喜多流仕舞「雀之段」「通小町」のうち、熱田神宮長谷晴男権宮司により能楽協会井上名古屋支部長、内藤副支部長に聖火が渡され、火入れ式が行なわれた。

宝生流能「巴」狂言「釣針」に新能の興趣はいよいよ高まり、切能観世流「石橋」(小書大獅子)の迫力に満ちた舞台は千五人の観客を堪能させ午後八時半終了した。

金剛流の名手として中部能楽界に親しみ深かった人間国宝・豊嶋弥左衛門師が逝いて一年、中部金剛会、豊嶋三千春師らによる一年追善能がきたる九月十六日(日)熱田神宮能楽殿で催される。

能組は故人をしのぶにふさわしい名曲をそろえ、能「俊寛」(シテ菊川三)「夕顔」小書山端之出(シテ金剛流)「一徹」小書十三段之舞(シテ豊嶋三千春)の能三番。狂言「宗論」(井上松次郎、篠山春日神社の催能は、きたる九月五日(日)午後五時三十分から熱田神宮神苑前、特設舞台で行なわれた。

観世流仕舞「荒田」「大江山」「難波」「鶴之段」につぎ、観世能「賀茂」の壮快な演能、金剛流舞臺子「八島」。あいさつに立った本山名古屋市長は「毎年楽しみにしているこの新能に長野県からかけつけた。伝統の芸能の中に心やすらぎをみなさまとともに求めたい」と述べ、金春流、喜多流仕舞「雀之段」「通小町」のうち、熱田神宮長谷晴男権宮司により能楽協会井上名古屋支部長、内藤副支部長に聖火が渡され、火入れ式が行なわれた。

宝生流能「巴」狂言「釣針」に新能の興趣はいよいよ高まり、切能観世流「石橋」(小書大獅子)の迫力に満ちた舞台は千五人の観客を堪能させ午後八時半終了した。

はじめ狂言「公孫」(茂山千五郎ほか)一調「山姥」(片山博太郎、太鼓三島太郎)など幽玄の舞台がくりひろげられる。

この丹波夜能には、京阪神からの来会者の便をはかり臨時専用列車「丹波夜能観能号」(往復)が特設される。

往路・大阪発13時15分、篠山口着15時05分。

入場料前売千二百円、当日券千五百円。

連絡先 能楽資料館(電話〇七九五五)〇三五一三番

財団法人 鎌倉能舞台 中 森 貫 太 中 森 晶 三	武田詠楽会 武田 小 兵 衛 武田 欣 司 武田 邦 弘	大 西 信 久 大 西 智 久 大阪能楽会館 〒530 大阪市北区中崎西2丁目3-17	幽花会 片山 慶次郎 〒603 京都市北区小山下花ノ木町二丁目 電話 四九二一五三〇三番	橋岡 久 共 名古屋 淡 交 会	名古屋 観 世 会 大阪市阿倍野区文の里4-24-17	壺 泉 会 泉 嘉 夫 名古屋市昭和区山町一〇三 電話 八三二一三一八五 四宮市甲陽園山町一の一七八 電話 八〇七九八V 二四四八	井 戸 和 男 大阪市阿倍野区文の里4-24-17	松 音 会 泉 泰 孝 東京都杉並区宮前四一九一四 電話 〇三(三三三) 八二八〇番 大阪市城東区豊前二一三二一八 電話 〇六(九六八) 三五一四番	松 和 会 中 村 和 男 各務原市那加坂町2-11 電話 〇五八三 二七九四番	近 藤 乾 三 東京都豊島区巣鴨五二二三八	幸 詔 会 近 藤 幸 江 岡崎市鴨田本町十一番地ノ三 電話 (〇五六四) 〇二五二九	清 風 会 今 村 嘉 勇 岩倉市東新町下境52-101	内 藤 泰 二 東京都豊島区巣鴨五二二三八	吉 田 俊 彦 宝生流 嘉 宝 会 名古屋市中区区川名本町二ノ五一	今 井 幾 三 隆 金剛流 幸 月 会 〒458 名古屋市中区緑区鳴海町油上16-10 電話 (八九六) 三四二八番
----------------------------------	---------------------------------------	--	---	---------------------	--------------------------------	--	------------------------------	---	--	--------------------------	---	---------------------------------	--------------------------	---	---

能 野 宮 西村 欽也
梅田 邦久
飯富 雅介
福井 隆次郎
河村 隆一郎
森本 重一
山崎 亮
三男
猪 恵
三男
後藤 勇一
三男
パンシキ
主催 猪 恵
三男
後藤 勇一
三男
パンシキ

後、能楽協会名古屋支部が社会貢献活動に乗り出したのはじめらしい。名古屋城再建の資金集めへの協力だ。第一回の大衆普及能のプロジェクト。みなさまに平易に判りやすく見たいなアニメ談話は聞き流すこととして、お楽しみを兼ねて、

旭大でもいうものかたんなる人間的な時代。君の銀河鉄道99? みたいなアニメ談話は聞き流すこととして、お楽しみを兼ねて、

は十日台東区谷中の感応寺で執行喪主は長男道成氏。自宅東京都杉並区永福一三六七。

故郷尾山に師範。金春流シテ

能 紀 行

(103)

ぬばたま

絵と文 二井栄逸

私の好きなことばの中に、ぬばたま(うばたまとも)ということばがあります。ぬばたまというのには、アヤメ科の植物であるひょうごの漆黒の実のことをいいます。

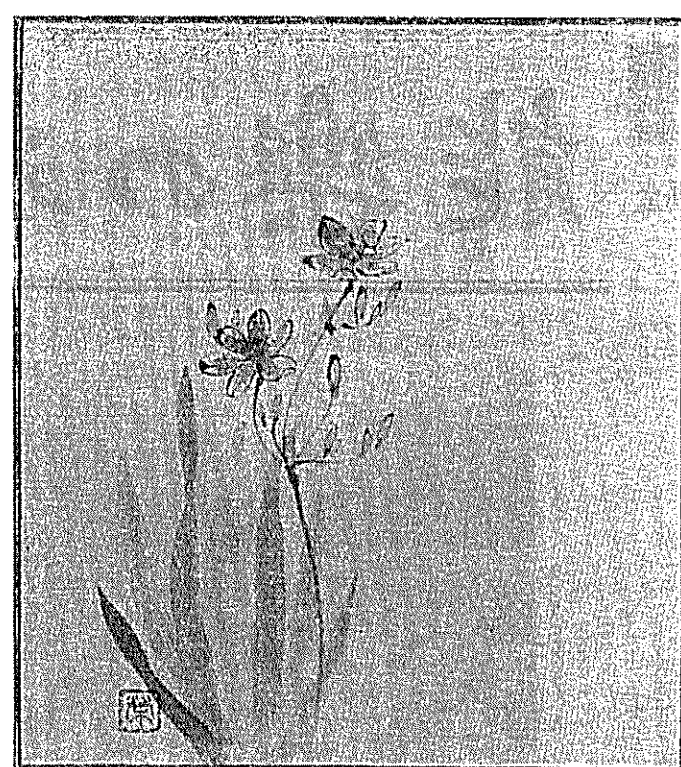
ひょうご(検刷)は、葉の格好が、昔、文官達が笏にかけて用いた検刷(楡の薄板を重ね、かなめを金物でとめ、上端を白糸で綴り連ねたもの)に似ているところから、これが本名になってしまったようです。漢名では射干とかきまです。又、その実が真黒なところから、からすひょうごともいわれられてきました。

万葉では、この実の黒さを取り上げ、ぬばたま、と呼ばれ愛されてきました。私は、ぬばたまという名前が好きなので、文をかく時は万葉派で通しています。

ぬばたまの夜きり来れば巻向(まきむく)の川音高しも風か

巻向川は、三輪山と穿つづきの巻向山から流れ落ちる急流で、作者は、風の音と、激流の音につつまれて、夜の闇が視野のすべてを蔽ってしまったことを体感したのでしょう。月だけが頼りの、古代の闇の漆黒さを表現するのは、ぬばたまという言葉が適切

なわれ、今回は第三回目。能「巴」(シテ辰巳孝、ワキ西村欽也)狂言「昆布売」(井上松次郎、井上礼之助、佐藤秀雄)仕舞「岩船」(新井楼)「女郎花」(内藤泰三)「羽衣」(玉井博祐)「善知鳥」(倉本雅)



能「小鍛冶」狂言「棒縛」

8月26日 初の各務原市民鑑賞能

各務原市民鑑賞会主催による初の市民鑑賞能がきたる八月二十六日(日)同市・市民会館で公演される。

この演能は、昨年同市に市民会館が完成し、古典芸能に関心をもち市民の要望にこたえて同市として初めての公演で、各務原市ならびに岐阜県教委、各務原市教委が後援、平野市長も演能当日来会し祝詞を述べられた。

之段「下田雄三」「遊行劇」(橋岡久共)「徒之段」(坂本秀雄)「熊坂」(岡田朗詠)狂言「棒縛」(太郎冠者・野村又三郎、主・井上松次郎、次郎冠者・佐藤友彦)能「小鍛冶」(前シテ中村和男、後シテ奥善助、ワキ西村欽也、ワキツレ飯富雅介、間狂言・井上礼之助、笛・森本重一、小鼓・柳原福助、大鼓・吉田定男、太鼓・福岡徳、大鼓・吉田定男、太鼓・福岡徳)

観昭会夏の会

八月二十六日(日)午前九時始 熱田神宮 能楽殿

青陽会

九月二日(日)午前十一時始 熱田神宮 能楽殿

豊嶋三 千 春
京都市東山区知恩院山内林下町四五五
名古屋東区泉2丁目23番19
マルミタウンマンション205号

金 春 信 高
金 春 安 明
〒167 東京都杉並区南荻窪3-17-16
電話〇三(三三三)二五七二番

本 田 光 洋
東京都中野区上高田二ノ二五ノ二
電話〇三(三八八)二六四二番

林 鉄 郎
八 声 会
金 春 流 中 村 富 次
伊勢市宮町一四一七
電話〇五九〇二四五六番

中部金春会
名古屋市中区老松町一ノ二八
電話(二四一)三二四二番

前 田 茂 穂
米 本 平 一

大 阪 喜 多 会
和 島 富 太 郎

和 島 富 太 郎
〒665 宝塚市宝梅一丁目12-1
電話(〇七九七)八六三〇

栄 能 楽 舞 台
名古屋市中区栄五丁目一二

麦 の 会
久 田 徹 二
長 田 驍

久 保 田 千 三 郎
〒515 芦屋市興川町五ノ一五
電話(〇七九七)三三三二八四

呉 竹 会
寛 三 男
森 本 重 一

鬼 頭 季 信
幸 友 会
福 井 啓 次 郎
福 井 良 久
福 井 良 治

柳 原 富 司 忠
善 竹 忠 一 郎
神戸市東灘区御影町郡家大蔵二

亀 井 俊 一
忠 雄
保 雄

寛 鉦 一
朝日文化センター
雛子教室
小鼓後藤孝一郎
丸栄スカイル10階

茂 山 忠 三 郎
〒606 京都市左京区北白川大雲町47-1
電話〇七五(七〇)二〇二番

能 楽 の 友 社
同人 一同

長 生 会
鬼 頭 八 郎
喜 太 郎
好 信
英 二

愛知県中島郡平和町城西
電話(三六三)一九六〇番

助 川 竜 夫
山 口 義 郎

狂言和泉会
和 泉 元 秀

狂言やるまい会
野村又三郎
〒466 名古屋市中区和区南山町12-7
電話(八三三)八〇七二番

善 竹 忠 一 郎

雛子教室
小鼓後藤孝一郎
丸栄スカイル10階

熱田神宮能楽殿

能 楽 の 友 社
同人 一同

観照会夏の会

八月二十六日(日)午前九時始
熱田神宮能楽殿

素謡神 歌 加藤木邦夫 橋本正晴

素謡 養 老 坂崎勝彦 長谷川実

千 手 目黒美保子 大西栄子

半 蔀 西山 慶子

松 絹神楽留・中村初子 草子洗小町 児玉正江

素謡木 賊 山中 貴博 岩田 広枝

梅 杉浦 茂 藤家 良市

辛都婆小町 丸山 幹子 武田 志房

仕舞 鶯 西田 三好 浜野 金峰

葛城大和舞竹下節子 山 姥 立廻り 磯村佳津子

素謡 砧 沖 宗久 坂井 音重 地 山竹 治房

鷓鴣小町 樋口健一郎 坂井 音重 地 岡 元昭

安 宅 小川 寿三 岡 久広 地 岡 元昭

舞獅子 羽 衣 松久保美恵子 河村 総一郎 助川 三男

西行櫻 田中 幸一 河村 総一郎 助川 三男

舞獅子 嵐 山 親世 元昭 河村 総一郎 助川 三男

舞獅子 嵐 山 親世 元昭 河村 総一郎 助川 三男

舞獅子 嵐 山 親世 元昭 河村 総一郎 助川 三男

舞獅子 嵐 山 親世 元昭 河村 総一郎 助川 三男

舞獅子 嵐 山 親世 元昭 河村 総一郎 助川 三男

舞獅子 嵐 山 親世 元昭 河村 総一郎 助川 三男

舞獅子 嵐 山 親世 元昭 河村 総一郎 助川 三男

舞獅子 嵐 山 親世 元昭 河村 総一郎 助川 三男

舞獅子 嵐 山 親世 元昭 河村 総一郎 助川 三男

舞獅子 嵐 山 親世 元昭 河村 総一郎 助川 三男

舞獅子 嵐 山 親世 元昭 河村 総一郎 助川 三男

舞獅子 嵐 山 親世 元昭 河村 総一郎 助川 三男

舞獅子 嵐 山 親世 元昭 河村 総一郎 助川 三男

舞獅子 嵐 山 親世 元昭 河村 総一郎 助川 三男

舞獅子 嵐 山 親世 元昭 河村 総一郎 助川 三男

舞獅子 嵐 山 親世 元昭 河村 総一郎 助川 三男

能「小鍛冶」(前シテ中村和男、つ市民の要望にこたえて同市として初めて公演で、各務原市ならびに岐阜県教委、各務原市教委が後援。平野市長も演能当日来会し、

青陽会能

九月二日(日)午前十一時始
熱田神宮能楽殿

能 組 杜 若キリ 今村 嘉男

松 虫キリ 須部 甫

後ツレ 松山 幸親 前ツレ 長谷川 章

番獅子 賀 茂 加藤 保彦 後藤 孝一郎

富士太鼓 服部 紗枝

松 風 今沢 美和

放下 備小海 野垣 慶子

河村 証二 柳原富司 森本 重一

後見 加賀 敏彦 今沢 美和

後見 加賀 敏彦 今沢 美和

後見 加賀 敏彦 今沢 美和

後見 加賀 敏彦 今沢 美和

後見 加賀 敏彦 今沢 美和

後見 加賀 敏彦 今沢 美和

後見 加賀 敏彦 今沢 美和

後見 加賀 敏彦 今沢 美和

後見 加賀 敏彦 今沢 美和

後見 加賀 敏彦 今沢 美和

後見 加賀 敏彦 今沢 美和

後見 加賀 敏彦 今沢 美和

後見 加賀 敏彦 今沢 美和

後見 加賀 敏彦 今沢 美和

後見 加賀 敏彦 今沢 美和

後見 加賀 敏彦 今沢 美和

後見 加賀 敏彦 今沢 美和

後見 加賀 敏彦 今沢 美和

後見 加賀 敏彦 今沢 美和

後見 加賀 敏彦 今沢 美和

後見 加賀 敏彦 今沢 美和

後見 加賀 敏彦 今沢 美和

後見 加賀 敏彦 今沢 美和

木曾宝生会、上松町観光協会主八、十九日同日、名古屋長生会(鬼頭八郎氏)により設置され観能は「保良能」にたいまののしは七月二十八日(土)午後

栄能楽舞台

名古屋市中区栄五丁目二二
電話(三六三)二一八三番

尾張旭市東大道原田二四九三ノ二
電話(五六一五)二三四六番

若杉ビル(旭市役所南)
電話(五六一五)二三四六番

電話(五六一五)二三四六番

電話(五六一五)二三四六番

電話(五六一五)二三四六番

電話(五六一五)二三四六番

電話(五六一五)二三四六番

電話(五六一五)二三四六番

電話(五六一五)二三四六番

電話(五六一五)二三四六番

電話(五六一五)二三四六番

電話(五六一五)二三四六番

電話(五六一五)二三四六番

電話(五六一五)二三四六番

電話(五六一五)二三四六番

電話(五六一五)二三四六番

電話(五六一五)二三四六番

電話(五六一五)二三四六番

電話(五六一五)二三四六番

電話(五六一五)二三四六番

電話(五六一五)二三四六番

電話(五六一五)二三四六番

電話(五六一五)二三四六番

電話(五六一五)二三四六番

電話(五六一五)二三四六番

電話(五六一五)二三四六番

電話(五六一五)二三四六番

電話(五六一五)二三四六番

電話(五六一五)二三四六番

電話(五六一五)二三四六番

電話(五六一五)二三四六番

小鼓 後藤孝一郎
九栄スカイル10階

能楽の友社

同人一同

同人一同

同人一同

同人一同

同人一同

同人一同

同人一同

同人一同

同人一同

同人一同

同人一同

同人一同

同人一同

同人一同

同人一同

同人一同

同人一同

同人一同

同人一同

同人一同

同人一同

同人一同

同人一同

同人一同

同人一同

同人一同

同人一同

同人一同

同人一同

同人一同

同人一同

同人一同

四月から六月までの季節も観世能が多い。観世能と定例の諸会に土曜観世能が始まり、待望の藤田昭彦後援会能も観世二番、東京に比べれば数こそ少ないが、日曜日あるいは土曜日の熱田の森に通う足は繁く、そのうちの大半が今言う観世能である。

その観世能だが、六月の観世会(第三回)で梅若万紀夫氏の養老をみる。家元元正氏を始めとし元昭・静夫・武雄・博太郎・盛義・泉英諸氏に万紀夫氏を加えて、いよいよ能楽世代の交り目を病感する。

長老格では鉄之丞(「管独吟」)菅蕉、笛藤田六郎兵衛・助時博太郎・万三郎・武田太志の三氏に、大槻秀夫氏長年の来名が目引く。それに上田照也氏の来名も目立つ。これは観世流だけの事だが、能楽界全体が大きな交代期に差ししかかっているのではと思われなければならない。もちろんシテ方・三役各流儀で観急・起伏の差のあることはいうまでもないが。

それにつけても、戦前、戦中、戦後、それから三十年を経た現在と、当然の事ながら、能・狂言の伝統がつつきつきに若い人達へ受け継がれ受け継いで今日に至る。そして長老達の至業を先頭にその舞台を目前にする。明暗色々の事が頭の中を走り廻る。

まず古風と新風。次は能(それに狂言も)が舞台で作り出す喜怒哀楽の表現・人間の様々な姿が果して多勢の現代人の心に、古典と

四月から六月までの季節も観世能が多い。観世能と定例の諸会に土曜観世能が始まり、待望の藤田昭彦後援会能も観世二番、東京に比べれば数こそ少ないが、日曜日あるいは土曜日の熱田の森に通う足は繁く、そのうちの大半が今言う観世能である。

その観世能だが、六月の観世会(第三回)で梅若万紀夫氏の養老をみる。家元元正氏を始めとし元昭・静夫・武雄・博太郎・盛義・泉英諸氏に万紀夫氏を加えて、いよいよ能楽世代の交り目を病感する。

長老格では鉄之丞(「管独吟」)菅蕉、笛藤田六郎兵衛・助時博太郎・万三郎・武田太志の三氏に、大槻秀夫氏長年の来名が目引く。それに上田照也氏の来名も目立つ。これは観世流だけの事だが、能楽界全体が大きな交代期に差ししかかっているのではと思われなければならない。もちろんシテ方・三役各流儀で観急・起伏の差のあることはいうまでもないが。

それにつけても、戦前、戦中、戦後、それから三十年を経た現在と、当然の事ながら、能・狂言の伝統がつつきつきに若い人達へ受け継がれ受け継いで今日に至る。そして長老達の至業を先頭にその舞台を目前にする。明暗色々の事が頭の中を走り廻る。

まず古風と新風。次は能(それに狂言も)が舞台で作り出す喜怒哀楽の表現・人間の様々な姿が果して多勢の現代人の心に、古典と

四月から六月までの季節も観世能が多い。観世能と定例の諸会に土曜観世能が始まり、待望の藤田昭彦後援会能も観世二番、東京に比べれば数こそ少ないが、日曜日あるいは土曜日の熱田の森に通う足は繁く、そのうちの大半が今言う観世能である。

その観世能だが、六月の観世会(第三回)で梅若万紀夫氏の養老をみる。家元元正氏を始めとし元昭・静夫・武雄・博太郎・盛義・泉英諸氏に万紀夫氏を加えて、いよいよ能楽世代の交り目を病感する。

長老格では鉄之丞(「管独吟」)菅蕉、笛藤田六郎兵衛・助時博太郎・万三郎・武田太志の三氏に、大槻秀夫氏長年の来名が目引く。それに上田照也氏の来名も目立つ。これは観世流だけの事だが、能楽界全体が大きな交代期に差ししかかっているのではと思われなければならない。もちろんシテ方・三役各流儀で観急・起伏の差のあることはいうまでもないが。

それにつけても、戦前、戦中、戦後、それから三十年を経た現在と、当然の事ながら、能・狂言の伝統がつつきつきに若い人達へ受け継がれ受け継いで今日に至る。そして長老達の至業を先頭にその舞台を目前にする。明暗色々の事が頭の中を走り廻る。

まず古風と新風。次は能(それに狂言も)が舞台で作り出す喜怒哀楽の表現・人間の様々な姿が果して多勢の現代人の心に、古典と

四月から六月までの季節も観世能が多い。観世能と定例の諸会に土曜観世能が始まり、待望の藤田昭彦後援会能も観世二番、東京に比べれば数こそ少ないが、日曜日あるいは土曜日の熱田の森に通う足は繁く、そのうちの大半が今言う観世能である。

その観世能だが、六月の観世会(第三回)で梅若万紀夫氏の養老をみる。家元元正氏を始めとし元昭・静夫・武雄・博太郎・盛義・泉英諸氏に万紀夫氏を加えて、いよいよ能楽世代の交り目を病感する。

長老格では鉄之丞(「管独吟」)菅蕉、笛藤田六郎兵衛・助時博太郎・万三郎・武田太志の三氏に、大槻秀夫氏長年の来名が目引く。それに上田照也氏の来名も目立つ。これは観世流だけの事だが、能楽界全体が大きな交代期に差ししかかっているのではと思われなければならない。もちろんシテ方・三役各流儀で観急・起伏の差のあることはいうまでもないが。

それにつけても、戦前、戦中、戦後、それから三十年を経た現在と、当然の事ながら、能・狂言の伝統がつつきつきに若い人達へ受け継がれ受け継いで今日に至る。そして長老達の至業を先頭にその舞台を目前にする。明暗色々の事が頭の中を走り廻る。

まず古風と新風。次は能(それに狂言も)が舞台で作り出す喜怒哀楽の表現・人間の様々な姿が果して多勢の現代人の心に、古典と

四月から六月までの季節も観世能が多い。観世能と定例の諸会に土曜観世能が始まり、待望の藤田昭彦後援会能も観世二番、東京に比べれば数こそ少ないが、日曜日あるいは土曜日の熱田の森に通う足は繁く、そのうちの大半が今言う観世能である。

その観世能だが、六月の観世会(第三回)で梅若万紀夫氏の養老をみる。家元元正氏を始めとし元昭・静夫・武雄・博太郎・盛義・泉英諸氏に万紀夫氏を加えて、いよいよ能楽世代の交り目を病感する。

長老格では鉄之丞(「管独吟」)菅蕉、笛藤田六郎兵衛・助時博太郎・万三郎・武田太志の三氏に、大槻秀夫氏長年の来名が目引く。それに上田照也氏の来名も目立つ。これは観世流だけの事だが、能楽界全体が大きな交代期に差ししかかっているのではと思われなければならない。もちろんシテ方・三役各流儀で観急・起伏の差のあることはいうまでもないが。

それにつけても、戦前、戦中、戦後、それから三十年を経た現在と、当然の事ながら、能・狂言の伝統がつつきつきに若い人達へ受け継がれ受け継いで今日に至る。そして長老達の至業を先頭にその舞台を目前にする。明暗色々の事が頭の中を走り廻る。

まず古風と新風。次は能(それに狂言も)が舞台で作り出す喜怒哀楽の表現・人間の様々な姿が果して多勢の現代人の心に、古典と

春夏秋冬
観世能、西村欽也
野村広二

〔おことわり〕熱中見舞と著名広告の掲載は紙面の都合にて七月号、八月号にわけて掲載させて頂きましたので何卒悪しからずご理解賜りますようお願い致します。(編集部)

年金のお受取りは名銀で

- 自動的に振込まれて便利です
- 共済年金の方もご利用ください。

名古屋相互銀行

能 樂 の 友

発行 能 樂 の 友
名古屋市中区千種千種2丁目18-18
(郵便番号 464)
電話 (731) 7984
振替口座 名古屋 36393
購読料 1年 500円
郵送の場合 1年 800円
一 部 50円

演能カレンダー

(熱田神宮能楽殿)

- [9月]**
- 15日(祭) 文月会・熱田千秋能 (番組①面)
 - 16日(日) 豊嶋弥左衛門師一年祭 追善能楽会 (有料) ①面
 - 23日(祭) 和泉流狂言大会 (来場歓迎) (番組②面)
 - 24日(休) 淡交会 (来場歓迎) (番組③面)
 - 29日(土) 観世九阜会定期能 (有料) (番組③面)
 - 30日(日) 宝生会定式能 (有料) (番組③面)
- [10月]**
- 7日(日) 幸福会大会 (来場歓迎) (番組③面)
 - 10日(祝) 花会大会 (来場歓迎) (番組④面)
 - 13日(土) 青陽会能 (有料) (番組①面)
 - 14日(日) 猶惠会秋の大会 (来場歓迎) (番組④面)
 - 20日(土) 観正会大会 (来場歓迎)
 - 21日(日) 邦謡会大会 (来場歓迎)
 - 27日(土) 観世会土曜定式能 (有料)
 - 28日(日) 橋岡久太郎十七回忌追善能 (有料)
- [11月]**
- 3日(祭) 幸友会秋の会 (来場歓迎)
 - 4日(日) 風韻会能大会 (来場歓迎)
 - 10日(土) 修風会大会 (来場歓迎)
 - 11日(日) 観世会定式能 (有料)
 - 17日(土) 一観会叶石会大会 (来場歓迎)
 - 18日(日) 和泉流狂言会 (有料)
 - 22日(木) 中日文化センター発表会 (来場歓迎)
 - 23日(祭) 洗心会華心会 (来場歓迎)
 - 25日(日) 竹韻会 (来場歓迎)
- (演能変更の節はご了解下さい)

能「海士」遊行柳「望月」

10月28日 熱田神宮能楽殿

故橋岡久太郎師17回忌追善能

日本芸術院会員・故橋岡久太郎氏の十七回忌追善能は、名古屋淡交会の主催により、来る九月二十四日、熱田能楽殿で名古屋淡交会はじめ岐阜、東京、東北各淡交会の会員により社中会(番組②面参照)が催されるが、ひきつづいて十月二十八日(日)追善能(有料)が熱田神宮能楽殿で催される。

故橋岡久太郎氏は昭和三十八年九月十五日、七十九歳で逝去されたが、戦後の混乱期に能楽協合理事長をつとめ、中部能楽界の発展にも大きな足跡をささげ、昭和三十六年芸術院賞、昭和三十八年芸術院会員となり数々の榮譽に輝いた。

東京では、九月十五日観世能楽堂で追善能が行なわれるのをはじめ各地の淡交同人会でも催される。名古屋での演能には、宗家観世元正の能「海士」小書解脱之伝はじめ、能「遊行柳」小書青柳之舞(橋岡久共)「望月」(下田雄三)狂言「武悪」(野村又三郎、井上松次郎、佐藤友彦)、舞囃子、仕舞の上演。

会員券六千円(全自由席)
主催 名古屋淡交会

法政大学能楽賞 設定

シテ方観世流の能役者観世寿夫氏は、稀有の天分と不断の努力とによって清新・華麗な芸術を体得し、戦後の能界を代表する演能活動を展開する一方、ギリシャ劇の上演や現代演劇への出演によって日本の演劇界に新風を吹き込み、能の海外公演に参加して外国芸術家と交流、また、みづから世阿弥や能面に関する研究的著述を発表し、能楽の学問的研究に深い関心を寄せ、多彩な活動で知られるようになった演劇人であったが昨年十二月七日五十三歳で逝去、能界・劇界の大きな痛手であった。

故人の七七忌明にあたる本年一月二十四日、旗族観世弘子さんは葬儀に際し各方面から寄せられた学能楽賞

御芳志の一部を故人が深い関心を寄せた能楽研究に役立てたいとの趣旨によって、法政大学能楽研究所に百万円を寄付された。

法政大学(中村哲校長)は、この寄付金の用途について、観世寿夫氏の比類ない業績を記念する永続的な形で活用形態を考究した結果、寄付金に法政大学が拠出する分を加えたものを基金とし、それに基づいて、能楽研究及び故人が関与された分野に於いて顕著な業績をあげた個人または団体に賞を贈ることが適当であるとの結論に達し、本年度より、次のような賞を設定することに決定した。

(賞の名称) 観世寿夫記念法政大学能楽賞

① 能楽の普及活動、能楽と他の芸術分野との交流などに顕著な業績のあった個人(または団体)
〔賞金〕二十五万円(一人または一団体)
〔選考方法〕

法政大学が選考委員若干名を委嘱する。

選考委員は、各方面に該当者の推薦を依頼し、それに基づいて年一回、二名(または団体)以内の授賞者を選ぶ。

選考結果は十一月中に発表し、故人の命日にあたる十二月七日前後に授賞式を行う。(本年度の選考委員) 増島宏・横道万里雄・広末保・古賀照一・表章の諸氏。

十一月十七日(土) 午前九時始
熱田神宮能楽殿

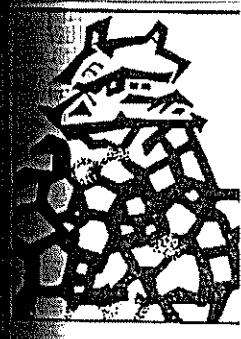
能「清」 内田 勝子
能「経」 西村 敬也

能 竜	連吟 西王母	仕舞 高野物狂	舞子 野守	舞子 竹生島	舞子 小督	舞子 八島	舞子 草子洗子町	舞子 五萬	舞子 鶴	舞子 俊成忠度
能 竜	連吟 西王母	仕舞 高野物狂	舞子 野守	舞子 竹生島	舞子 小督	舞子 八島	舞子 草子洗子町	舞子 五萬	舞子 鶴	舞子 俊成忠度
能 竜	連吟 西王母	仕舞 高野物狂	舞子 野守	舞子 竹生島	舞子 小督	舞子 八島	舞子 草子洗子町	舞子 五萬	舞子 鶴	舞子 俊成忠度

能 龍	連吟 西王母	仕舞 高野物狂	舞子 野守	舞子 竹生島	舞子 小督	舞子 八島	舞子 草子洗子町	舞子 五萬	舞子 鶴	舞子 俊成忠度
能 龍	連吟 西王母	仕舞 高野物狂	舞子 野守	舞子 竹生島	舞子 小督	舞子 八島	舞子 草子洗子町	舞子 五萬	舞子 鶴	舞子 俊成忠度
能 龍	連吟 西王母	仕舞 高野物狂	舞子 野守	舞子 竹生島	舞子 小督	舞子 八島	舞子 草子洗子町	舞子 五萬	舞子 鶴	舞子 俊成忠度

前号既報のように謡曲名所めぐりのバス旅行を本年は、京都南部せんが、やむを得ぬときは、補助イスを使用します。なお座席はお申込み順に前列より指定いたしますが、ご年配の方は優先席とすることがありますのでどうかご理解いただきますようお願いいたします。

(住所移転)
野村又三郎氏(和泉流狂言方)新住所 名古屋市中区千種二丁目



「萬世開口御寿文集」について

この間の事情については、大蔵虎明の「わらべ草」に、次のように書かれている。

「太鼓院、日光に石の寶塔建立被成候時、風流可被三仰付」と、太田備中殿へ、高安我等被百奇、今度風流、開口可被三仰付候間、道春へ参、談合可申由被仰候時、予申上候は、代々つくり來候へ共、人に談合仕たる事なし、家々に作り申作法御座候間、他人の知る事にてなし。其上人に談合仕たる例もなし。其身も不申無きやうに御座候間、先つくりて御目につけ可申と申候へば、備中殿被仰候は、其身、作る事なきまじきかと思召て、被三仰付しなり、其方作り申さば一段の事と被仰しなり。其後又被仰付し時、春藤なども右の通り申候ゆへ、而も開口なども作りし也。是は行幸の時、進藤久右衛門開口自作にならざるゆへ、道春とのみ作り申候により、何も左様に可有と思召、被仰出しかと存るなり。代々つくりたる数、あまたあれば、作りかぬる事にてなし。このような進藤久右衛門の例が切掛となつて、備者が能役者に代つて、開口文を制作することが多くなつて行くのである。

高安流宗家蔵本「萬世開口御寿文集」によると、幕府関係の作文備者は、林大学頭信敬、林大学頭信吉、林大学頭春常、林百助信有人見友玄などで、林大学頭を中心とした幕府お抱えの備官達である。大名家においては、主に、それらの藩のお抱えの備官達が開口文創作に当たつたと思われる。紀州藩においては、太田七三郎(注5)坂井忠次郎の名前が見える。加賀藩においては、田中平祐、その他「能楽古今記」によつて付け加えらるると野尻直隆、田中左源太(注6)などの名前が記されている。ほは、これら備学者の傾向は、幕府の大学頭となつた林家を中心

辻 宏

に朱子学派の系統に属する人達が多い。一方、禁裏の作文者達は、堀川東運、伊藤正蔵長衡、曾我部式部源元寛、岡多仲白駒、谷左中橋貞勝、松岡玄達などの備学達で、伊藤仁斎系統の古義学派の人が多い。一律には言えないが、概して、朱子学派に属する人達が権力の立場について、幕府・大名のお抱え備官になつて来たのに対して、むしろ古義学派の人達は、堀川東運のように、終生無官で通すか、さもなければ、伊藤正蔵長衡のように地方の小藩、高槻藩に仕える備学者である場合が多い。このように幕府関係の開口文作者と、禁裏関係の開口文作者とが、同じ備学者であるとはいふもの、その思想や立場を異にするのは、面白い特徴である。このように、江戸時代における開口文の創作と禁裏との微妙な力関係が影を落している。なお、池内信喜著「能楽盛衰記」には、禁裏では、開口文作者は公家とあるが、高安流宗家蔵本「萬世開口御寿文集」を見る限りでは、備学者が中心になつて居るようである。

洛の「名曲」 11月23日

名古屋観世九阜会定期能 九月二十九日(土)午後一時始 熱田神宮能楽殿

幸謡会大会 十月七日(日)午前九時半始 熱田神宮能楽殿

昭和54年9月・10月放送予定 NHKラジオ第一放送 (毎週日曜日午前10時15分)

80能画力カレンダー 本紙掲載「能行」の二井宗達氏筆による80年カレンダーが発行されます。

亡父博通十七回忌追善 名古屋幽花会秋季大会

十月十日(祝)午前十時始
熱田 神宮 能楽 殿

素謡 吉野 天人 宮崎 晃吉 長谷川宏之
小袖 曾我 山田 真知子 関 二 徳二
天鼓 城 加藤 よし子 宮崎 昌子
鞍馬 天狗 藤田 真知子 牧原 みのり
仕舞 屋 島 小嶋 勉 津田 順雄
富士太鼓 津田 順雄 歌 占 斎藤 昌平
野 守 福田 晃 津田 順雄 村木 寛茂

舞臺子 卷 絹 村木 玲子 吉田 定男 小寺 俊三
羽 衣 波方 晃 吉田 定男 光田 洋一
千 手 副島 八重子 和 田 千代
花 籠 波方 晃 杉山 紀
葵 上 大江 正照 松枝 寅太郎
忠 度 東山 清和 吉田 定男 光田 洋一
山 姥 村木 寛茂 吉田 定男 光田 洋一
番外仕舞 梅 月 小原 いく子 半 節 荒川 三子
松下 徹 清水 テヅエ 浮 舟 杉山 静
松之段 片山 博太郎 六 浦 片山 清司

半能 片山 慶次郎 吉田 定男 小寺 俊三
融 クツロギ 西村 欽也 福井 啓次郎 光田 洋一
〔御来場歓迎〕 主催 名古屋 幽花会
片山 慶次郎 会

青陽会能

十月十三日(土)正午始
熱田 神宮 能楽 殿
野垣 慶子 今村 嘉勇
能 野 宮 西村 欽也 河村 欽也 山口 亮 森本 重一
能 清 飯富 雅介 河村 大 眞 三男
能 阿 大 槻 文蔵 河村 欽也 河村 欽也 河村 欽也 河村 欽也

猶惠会秋の大会

十月十四日(日)午前十時始
熱田 神宮 能楽 殿

素謡 羽 衣 星野 信子 目下すみ子
紅葉 狩 河合すみ子 寺岡 信子
井 筒 加藤 七兵衛 池内幸三郎
野 宮 須賀 繁子 梅若 修一
仕舞 菊 藤 石川 良子 敦 河辺 あき
羽 衣 杉山 房子 五 葛 萩野 知津
松 虫 仲瀬 範子 池内光之助

舞臺子 小 督 山本 康子 寛 盛義
田 村 目下すみ子 寛 三男
雲 雀 山 鈴木 久美子 寛 三男
班 女 鈴木 久美子 藤田 昭彦
天 鼓 高梨 千代子 後藤 孝一郎 藤田 昭彦
素謡 山 姥 藤田 昭彦 梅若 善高
定 家 鈴木 喜久子 岡田 朗詠

舞臺子 菊 悠 童 熊沢 恵美子 河村 欽一郎 助川 竜夫
番外仕舞 世 之 段 梅若 盛義 後藤 孝一郎 助川 竜夫
融 山本 博子 河村 欽一郎 助川 竜夫
松 城 熊谷 江 後藤 孝一郎 助川 竜夫
葛 城 熊谷 江 後藤 孝一郎 助川 竜夫
舟 弁 慶 杉浦 一枝 後藤 孝一郎 助川 竜夫
胡 蝶 辻 築 珠紀 後藤 孝一郎 助川 竜夫
仕舞 吉野 天人 斎藤 妙子 蝶 丸 長谷 みつ
紅葉 狩 福山 智恵子 三 輪 青山 高子
羽 衣 名倉 文子 三 輪 青山 高子

「薪能、大衆能と大物行事が連続して無事終了、関係者もホッとしたり、わいわいもホッとしたり。特に大衆能は二十周年記念、五番立の式能だっただけに、力が入った。」
「緊張の余り、昼食を食べそこなったりという観客もいたようだが、昼食をとって、少くとも一番は完全には見られない。やむを得ないといえども、観客の残念がる良心的な観客に同情するね。」
「まあ、二十周年に一度の『お祭り』だ。がまんしてもうらうらあがあるまい。それよりも、番組の運びがなんとなくあわただしく、落ち着きがないふん開きを生じた点の方が問題だろう。」
「夕方五時半に終わらせようとする勢いがある。これもがまんしてもらわなければならない。だろ、いや、五番立式能形式なら、思い切って時間を延長し、たっふ。」

大衆能の過去と未来

二十周年を迎えて思う

前田 満穂

「薪能、大衆能と大物行事が連続して無事終了、関係者もホッとしたり、わいわいもホッとしたり。特に大衆能は二十周年記念、五番立の式能だっただけに、力が入った。」
「緊張の余り、昼食を食べそこなったりという観客もいたようだが、昼食をとって、少くとも一番は完全には見られない。やむを得ないといえども、観客の残念がる良心的な観客に同情するね。」
「まあ、二十周年に一度の『お祭り』だ。がまんしてもうらうらあがあるまい。それよりも、番組の運びがなんとなくあわただしく、落ち着きがないふん開きを生じた点の方が問題だろう。」
「夕方五時半に終わらせようとする勢いがある。これもがまんしてもらわなければならない。だろ、いや、五番立式能形式なら、思い切って時間を延長し、たっふ。」
「以後毎年、一回も休まず大衆能を催して来たこと、県・市教委朝日新聞永年のバックアップもさることながら、協会支部の熱意と全力投球に敬意を表したい。その点、支部総力を結集し得た初代支部長田鍋徳太郎氏はじめ西村弘敏君への認識、理解ははるかに高いにかかわらず依然として、平易にわかり易く主義が番組編成の基本精神になっているとしたら、時代遅れというものでしょう。普及能としての大衆能の時代は終わったということか。」
「一例をあげると、地下鉄ができて熱田能楽殿は距離的にも近くなくなった。能の敷も多くなった。能を見た人は、いつでも手軽に熱田へ行ける。わざわざ年に一度の大衆能を待つまでもないわけだ。会費だけが大衆能というのでは情けない話で、いまの大衆能は二十年前より金持だ。高くていい能が見たい、それが本音じゃないかね。」
「では、これからの大衆能はどうあれというのか。」
「どうあれ、などと簡単にいえるものじゃない。お互いに演る側も観る側も一緒になって真剣に考えようじゃないですか、ということ。」
「そうならば話がし易くなる。思いっぴきだから聞いてくれ給え。熱田ではできない能を文化講堂でやる。これはどうかね。たとえばだ、脇能、二番目、三番目などの定形にこだわらず、移種物特集とか、狂乱物特集とか、想望物特集とか、「舟弁慶」と「船弁慶」、「小袖曾我」と「夜討曾我」の組合せとか「熊野」と「松風」これは「米のメシ」コンビ。」
「思いっぴきもいところ、あいた口がふさがらない。そんな番組が本当にできると思っているのか。冗談にもほどがある。」
「だから思いっぴき、たとえばだといっている。言い出しついでにいわせてもらうと、「松風」に踊りの「汐浪」をつけるとか、「海人」に地唄の「珠取り」をあしらうとか、能本来のお客以外の大衆をひきつける工夫もあってよくはないか。異物がまじって大衆能のイメージを傷つけるとおっしゃるだろうが、それがそもそも時代。」
「もういい。君の、銀河鉄道999みたいなアニメ映画は聞き流すことにして、もっとまじめな提案をしたい。熱田能楽殿を一人ですすめたい。」

169月 豊島弥左衛門師追善能
金剛流の名手として中部能楽界に親しみ深かった人間国宝・豊島弥左衛門師追善能。野村又三郎、佐藤秀雄(さら)に今井幾三郎、金剛永彌、豊嶋訓三、太鼓三島太郎)など由玄の舞台がくりひろげられる。

井戸 良造
井戸 和男
松和会 中村 和男
尾張旭市城山町三ツ池六一九八
電話(〇五六一五)三三〇四番

若い御二人の門出に
ふさわしい結婚式場
名古屋 若宮八幡社
各種会合や宴会にも御利用下さい
(駐車場完備)
名古屋市中区栄3丁目35-30 電話(241)0810

能 楽 の 友

題字は熱田神宮 藤田宮司筆

発行 能 楽 の 友
名古屋市中区千種区千種2丁目18-18
(郵便番号 464)
電話 (731) 7 9 8 4
振替口座 名古屋 3 6 3 9 3
購読料 1年 500円
郵送の場合 1年 800円
一部 50円

演能カレンダー

(熱田神宮能楽殿)

- 〔10月〕
- 13日(土) 青陽会能 (有料)
 - 14日(日) 猶惠会秋の大会 (来場歓迎)
 - 20日(土) 親正会大会 (来場歓迎) (番組①面)
 - 21日(日) 邦謡会大会 (来場歓迎) (番組①面)
 - 27日(土) 親世会土曜定式能 (有料) (番組②面)
 - 28日(日) 橋岡久太郎十七回忌追善会 (有料) (番組②面)
- 〔11月〕
- 3日(祭) 幸友会秋の会 (来場歓迎)
 - 4日(日) 風韻会能大会 (来場歓迎) (番組③面)
 - 10日(土) 修風会能大会 (来場歓迎) (番組④面)
 - 11日(日) 親世会定式能 (有料) (番組①面)
 - 17日(土) 一韻会叶石会大会 (来場歓迎)
 - 18日(日) 和泉狂賞会 (有料)
 - 22日(木) 中日文化センター発表会 (来場歓迎)
 - 23日(祭) 洗心会華心会 (来場歓迎)
 - 25日(日) 竹韻会大会 (来場歓迎)
- 〔12月〕
- 1日(土) 山本博之追善能 (有料)
 - 2日(日) 歳末助け合い義捐能 (有料)
 - 9日(日) 壺泉会能 (有料)
 - 15日(土) 親世会土曜定式能 (有料)
 - 16日(日) 青少年のための芸術劇場 (有料)
 - 23日(日) 宝英会大会 (来場歓迎)
- (演能変更の節はご了承下さい)

能「卒都婆小町」「道成寺」

11月18日故浦田保嗣13回忌追善

観世流・浦田保嗣師十三回忌追善能が十一月十八日、京都観世会館で催され、観世宗家も来演、能四番が上演される。

主催・浦田保嗣氏。午前十時始能組は、「教盛」(シテ浦田保浩、ワキ谷田宗二)、「輝丸」替之装束(観世元正、片山博太郎、ワキ江崎金治郎)、「卒都婆小町」(シテ浦田保利、ワキ岡治郎右衛門)、「道成寺」(シテ深野新次郎ワキ福王輝幸)

狂言「惣八」(茂山千作、茂山忠三郎、茂山千之丞)舞獅子「羽衣」(梅若万三郎)「調」(遊行柳) (藤井久雄、前川光隆)ほか狂言、連吟など。

大阪 山本博之師追善能

山本追善能楽会は、九月三十日、大阪能楽会館で山本博之七回忌追善能を開催。観世宗家も来演した。

能「田村」(観世元正)「江口」(藤井久雄)「石橋」(大獅子) (山本直貴)

東京 五流能

11月3日 新宿文化センター

第七回「東京五流能」は十一月三日(祝)東京・新宿文化センターで開演。全国各地からシテ方五流名手により上演。東京新聞、新宿文化センター主催、文化庁後援。

第一部「能・金剛流「経正」」小書・古式(金剛流「観世流」班女)小書・兼之段(観世元正)金香流(那桐)小書・十二段楽(金香流)和泉流(那桐)「柿山伏」(野村万之丞)

第二部「能・観世流「小督」」小書(那桐)「忍之舞」(観世元正)宝生流「平部」小書・立花(宝生英雄)喜多流「大会」(喜多長世)大藏流(喜多)「孤塚」小唄入(山本東次郎ほか)

一部料金A席六、五〇〇円、B席五、五〇〇円、C席二、五〇〇円(全部指定席)

和泉保之改め元秀 記念狂言会

11月18日熱田能楽殿で

狂言方と泉流十九世宗家・和泉保之氏の元秀改名、和泉元秀初舞台記念狂言会が十一月十八日、熱田神宮能楽殿で催される。午後一時始。

番組は次のとおりである。

〔舞獅子〕岩船(宝生英照)

〔狂言〕観猿(三宅藤九郎、三宅右近、和泉元秀)極の酒(井上)

東京 五流能

11月3日 新宿文化センター

十一月三日(祝)東京・新宿文化センターで開演。全国各地からシテ方五流名手により上演。東京新聞、新宿文化センター主催、文化庁後援。

第一部「能・金剛流「経正」」小書・古式(金剛流「観世流」班女)小書・兼之段(観世元正)金香流(那桐)小書・十二段楽(金香流)和泉流(那桐)「柿山伏」(野村万之丞)

第二部「能・観世流「小督」」小書(那桐)「忍之舞」(観世元正)宝生流「平部」小書・立花(宝生英雄)喜多流「大会」(喜多長世)大藏流(喜多)「孤塚」小唄入(山本東次郎ほか)

一部料金A席六、五〇〇円、B席五、五〇〇円、C席二、五〇〇円(全部指定席)

十月二十日(土) 午前八時半始

熱田神宮能楽殿

吉野天人 三宅一寿 林辰男
小袖曾我 五郎市野美代子
菊慈童 高木浪子 渡辺光代
大仏供養 山田基 田治見啓明
芦刈 吉村きくみ 伊藤寿賀子
舞獅子 草子洗小町 酒向千鶴子 野宮岡川 康子
舟弁慶 林あや子 熊崎節江
素羅藤 戸 杉浦茂 桐井喜全
弱法師 鈴木金子 藤巻佐賀郎
舞獅子 西王母 吉川喜代子 通小町 丸山幹子
融 桐井君子 雨夜之伝

十月二十一日(日) 午前九時始

熱田神宮能楽殿

仕舞 弓八幡 今沢美和 清経 木田 勲
葛 城キリ須部 市 声 刈キリ 清沢 一政
舞獅子 熊 徳田文代 水野美代子
野 羽田 雅子 吉田 定男 寛 三男
舞獅子 高 砂 岩田 慎之 班 女 西川喜代子
仕舞 笠之段 鈴木美代子 半 藤ケセ 熊沢 百代
舞獅子 小 督 清口 乙子 雲林院 磯谷 行雄
舞獅子 松 天 須田 豊子 柏 崎道行 菅瀬 迪子
舞獅子 山 近藤とさ子 野宮 北洞 節子

十月二十三日(火) 午後六時頃

熱田神宮能楽殿

〔御来聴観迎〕

祝言 嵐 山 久田 徹二
主催 久田 観正 会
久田 徹二

〔御来聴観迎〕

〔四時頃〕

能 丸 西村 欽也 吉川 定男 藤田 六郎兵衛
サカ 横井 敬子 杉江 元 福井啓次郎

〔祝言〕

狂言 竹生 嶋 盛 宮川 千尋 熊坂 関谷 勲
舞獅子 小袖 曾我 河合雄一郎 梅田 邦久

主催 邦 梅田 邦 久 会

昭和54年 NHKラジオ
10月(日) 宝 4
13日(日) 観 世
15日(日) 観 世
17日(日) 宝 4
19日(日) 観 世
21日(日) 観 世
23日(日) 観 世
25日(日) 観 世
11月(日) 観 世
13日(日) 観 世
15日(日) 喜 多
17日(日) 観 世
19日(日) 観 世
21日(日) 宝 4
23日(日) 宝 4
(放送予定に)

〔演〕

昭和54年

NHKラジオ

10月(日) 宝 4
13日(日) 観 世
15日(日) 観 世
17日(日) 宝 4
19日(日) 観 世
21日(日) 観 世
23日(日) 観 世
25日(日) 観 世
11月(日) 観 世
13日(日) 観 世
15日(日) 喜 多
17日(日) 観 世
19日(日) 観 世
21日(日) 宝 4
23日(日) 宝 4
(放送予定に)

生きた設計
メガネ測定
は視力測定
ピクアッ
の充実を心
■ビス一本
メガネ店
責任感とま
堂は、たと
徹底した
メガネを

◎駐車場完備

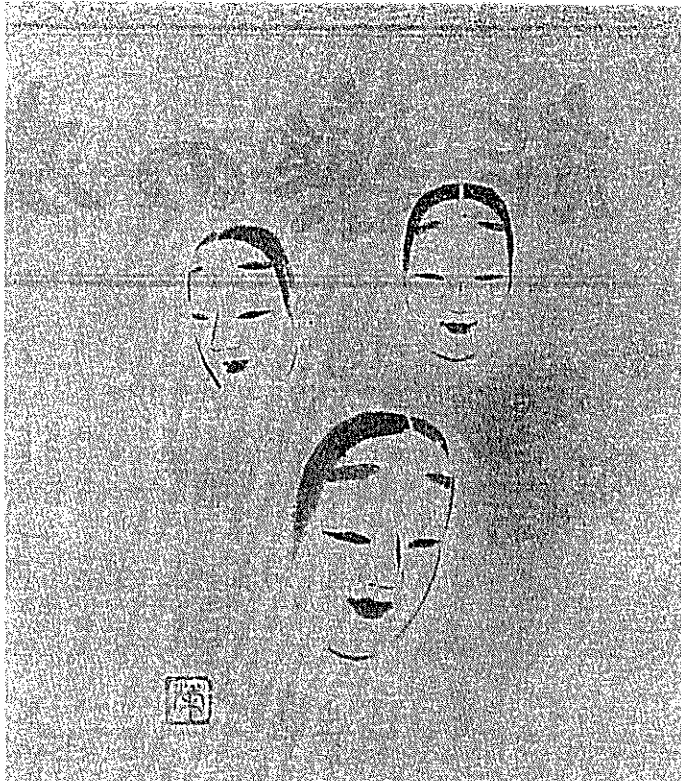
能紀行

松風村雨の面

絵と文 二井栄逸

ツレ面を打つことはなかなか難しく、苦心をするのです。との、或る能面師の手記を読んだことがあります。

ツレ面というものは、シテの面より一段調子の低い面ですが調子が低すぎてもいけないのです。そういう点で能面作家も苦心されるのでしよう。出来の悪い小面をツレ面に使うということもあるようですが、ほんとうは、ツレはシテのツレとしての位の備わった独立したものでなければならぬと思



中でも二人静や松風等は、シテとツレの面の調和がむづかしいと思えます。シテの面とツレの面の位の調和は、役に於ける位の相違であって、能本来の位は、シテの面もツレの面も同等でなければなりません。

私が家元にお世話になっていた頃、或る先輩から聞いた話で、面にまつわる面白い話があります。江戸末期、喜多家には松風に似て使う二面の小面があったのだそうです。面の名前も役そのままに、松風、村雨と称され、誰もがその面をかけることは許されなかつたそうです。其の面は、きつとシテとツレの面の調和がよくとれていたのだと思えます。阿波蜂須賀の能太夫であった佐藤菜と兒玉菜は、この面をつかうことを許されていました。或る日、松風を舞う為、鏡の間でシテの方が、村雨の面を見ると、その面が不思議に自分の熱愛している女性の顔にそっくりなのだと見直せば見直すほど生写しに見てく

名古屋観劇会素謡会

11月1日 栄能楽舞台で
名古屋観劇会指導山本勝一師は、十一月一日、名古屋市中区栄五丁目、栄能楽舞台で秋の素謡会を開催する。午前十時始、来場歓迎。

〔素謡〕小袖曾我(藤井敏枝、杉野伸江、太田和子) 清経(下島定子、川口志満子、安藤恵子) 盛久(高木町子、脇田喜美子、田中咲子) 鶴岡(群仰よし、水野たづ子、比江島孝子)

〔仕舞〕紅葉狩(岡田英理子) 三輪(加藤順子) 松風(横井余史子) 森林院(高柳幸子) 大江山(赤村るみ子)

昭和54年10月・11月放送予定

NHKラジオ第一放送 (毎週日曜日午前10時15分)

喜多	「小原御幸」	友枝喜久夫ほか
多	「上」	坂井晋次郎ほか
流	「通小町」	坂井晋次郎ほか
世	「朝上」	長瀬喜伴内ほか
世	「松都」	金井章ほか
世	「流」	井上薫ほか

NHK・FM (毎週日曜日午前7時15分)

喜多	「行」	梅若景英ほか
多	「上」	梅若景英ほか
流	「鉄」	梅若景英ほか
世	「龍」	三川泉ほか
世	「谷」	梅若景英ほか
世	「鳥」	上田照也ほか

観世会土曜定式能(三回)

十月二十七日(土)午後一時始

能楽組
熱田 神宮 能楽殿

丸 犬飼 末吉 後藤 豊雲
杉村 竹翠 後藤 豊雲

水藤 元三
久田 秀雄
青木 武雄

菊慈童

小島 一英 能
飯富 雅介 鬼頭 英二 池田 三男
後見 片山慶次郎 地謡 須部 敏彦 塚本 秀雄
河村 征二 武田 邦久 秀雄

伯母が酒

井筒 西村 敏也 河村 征二 藤田 六郎長衛
井上松次郎 久田 邦久 藤田 六郎長衛

附祝言

〔有料〕
主催名 古屋 観世会
(終了予定五時二十分頃)

故橋岡久太郎十七回忌追善能

十月二十八日(日)午前十時半始
熱田 神宮 能楽殿

追善能組
舞 蝶子
中村 和男 鬼頭 英二 鬼頭 八郎
柳原 富司忠 鬼頭 幸信
地謡 寺井 忠士
山本 正憲 松本 正憲

海

柴田 武彦 観世 元正 野口 敏弘 宮田 晴義
伊藤 鉄男 宮田 純三 寺井 啓之
解脫之伝 井上礼之助

遊行

柳 西村 敏也 渡部 晴義 寺井 啓之
飯富 雅介 宮田 純三 寺井 啓之

武

主野村 又三郎 武恵 井上松次郎
太郎冠者 佐藤 友彦

望

野口 敏弘 吉田 定男 鬼頭 好信
福井 啓次郎 鬼頭 三男

追加

後援 中日新聞
主催名 古屋 淡交会
(終了予定五時頃)

「萬開口御寿文集」について

脇方高安流宗家蔵本
下には、朝北山山行の行幸は、徳沢の厚きこと、重陽に咲ける菊の露、積りて幾代の潤を願はる。生霊のしげき事、四の時交

幸友会秋の会
十一月三日(祝)午前十時始
熱田 神宮 能楽殿

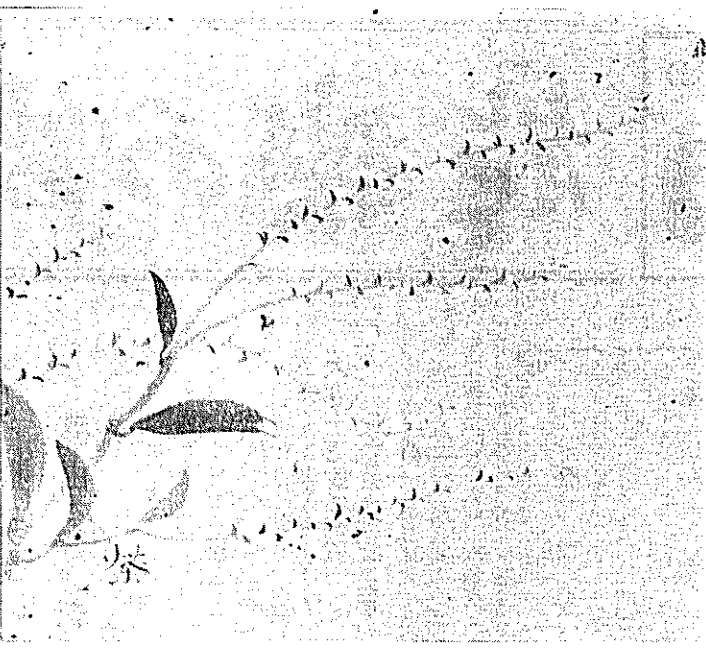
能巻 福間 克彦 鬼頭 英二 助川 寛夫
奥田 薫 飯富 雅介 後藤 孝一郎 藤田 昭彦

能 紀 行 (106)

水引の花

絵と文 二井栄逸

昔から野分の吹く頃は、二百十日、二百二十日前後ときまっていた。北に吹く頃は、つわぶきの咲き出す十月半ば過ぎにも吹くことがある。巨大な熱帯低気圧が襲来し



水引草が縦横無尽に紅い線を引き、その色を見て驚いた。我家の庭に水引草がこんなに殖え、装いをこらしているとは知らなかった。忙しい日々の明けくれ、庭に下りることも減多にない今日この頃、台風の吹く頃、自然は知らない内に我家の庭に好ましい秋を運んでくれたのを知った。それは、だいたい前、新橋の櫻河の川べりに群生していたのを一株頂戴して、家に持ち帰ったのが始まりである。

水引の
朱三尺の花引きて
やらじといし
朝露の道

与謝野晶子の歌のように、鮮かに昇華した水引でなくとも、私は何となくこの水引が、小袖や、縫箔の中にひっそりと縫いこまれる文様のような気がしてならない。縫箔は、刺繍と金銀の箔箔で文様を表わした能装束で、唐織ともにも最も華麗であるが、抽象化された水引をあしらったものを見たことがある。又、室町中期から江戸初期にかけて盛行したという幻の紋様、辻が花の幾何形の中にも、水引の文様化を見ることが出来る。

能装束をうづめる華やかな文様は、織、紬、絹、と多様な技法で制作されているが、その文様の種類を大別するとすれば、女性の文様と男性の文様に分けることが出来る。

能装束をうづめる華やかな文様は、織、紬、絹、と多様な技法で制作されているが、その文様の種類を大別するとすれば、女性の文様と男性の文様に分けることが出来る。

55年度観世会定式能

年5回、初回2月10日

名古屋観世会の昭和五十五年定式能の予定番組および日程は次のとおりである。なお会員券(年五回分)は、指定席二万円、自由席一万二千五百円。

●第一回二月十日(日)
熊野 観世 元正
熊野 観世 元照

●第二回四月十三日(日)
盛 大観 秀夫

●第四回九月十四日(日)
隅田川 観世 静夫
三 輪 武田太加志
七 駒 落 浦田 保利

●第五回十一月九日(日)
自然居士 片山博太郎
安 達 原 上田 照也

キワニス賞受賞
小鼓つくり鈴木義吉氏
能楽小鼓製作で重要無形文化財
認定保存技術保持者の鈴木義吉氏
らとて認定し、重要無形文化財
認定し、比の歴史も長財一

協方高安流宗家蔵本 「萬開口御寿文集」について

諸侯を封する際に与えられた玉を上げて、その幸せと富とが永く続いて今日に至っていることをことほぎ、新藩主の入部を祝賀する、漢文調読本の荘重な美文で冒頭を冠し、「比の歴史も長財一

竹韻会能楽大会

十一月二十五日(日)九時半始

羽衣	高島 勝美 梅村 平義
雲院	奥村 泰広 加野昭二郎
実盛	飯田 悦子 加藤万由子 河津 清子
野宮	梅村 平義 滝川 一司
朝長	大西彌八郎 戸松 利作 本多 逸郎
井筒	大西智津子 三宅 志づ
三井寺	木多 逸郎
木家	高島 勝美 戸松 勝夫 松本 頭一 恒川 志やう
鉢木	戸松 利作 恒川 松彦 滝川 一司
松天	風 山中 義滋 泉 嘉夫 大槻 秀夫
葵	上 八神 孝充 加藤万由子 大西智津子
紅葉狩	西村 欽也 飯富 雅介 寛 敏一 助川 龍夫 三男
高砂	杉村 竹翠 寛 敏一 助川 龍夫 戸松 利作

山本博之七回忌 追善能

十二月一日(土)午後一時始

紅葉狩	加藤總兵衛 河村 証二 塚本 秀雄 田中 武
松	山本 順之 柳原富司忠 藤田 昭彦
丸	西村 欽也 寛 敏一 後藤孝一郎 藤田 六郎兵衛
悪太郎	井上礼之助 井上松次郎 大野 弘之
杜若	山本 真賀 鬼頭喜太郎
天	吉田 定男 鬼頭喜太郎 藤田 昭彦
鵜飼	飯富 雅介 福井啓次郎 寛 敏一 助川 龍夫 三男
附祝言	主催 山本 追善会

義捐金募集能(第十一回)

十二月二日(日)午前十時始
熱田 神宮 能楽 殿

柿山伏 佐藤 友彦 後見 佐藤 秀雄
三 輪 日比野圭昭 吉田 定男 助川 龍夫 藤田 昭彦 森本 重一 東田 康文 菊川 憲三 坂田 三郎

熊野 元正 観世 元昭
安達 原 上田 照也
キワニス賞受賞
小鼓つくり鈴木誠吉氏
能楽小鼓製作で重要無形文化財
認定 昭和54年11月10日

「萬開口御寿文集」について

辻 宏 一

「徳川実紀」正保二年四月二十
九日の条の家元元服祝賀能の
開口は、
「それ十返りの松の色。ときは
かきはのまもりある。神風ふくや
四方の海。広く治る御代なれば。
めでたかりけるとときかや。」
と、七五調の短かい簡明な内容
の開口で、冒頭・文末の文体も、
「それ」「とかや」になっている。
「徳川実紀」正保四年六月九日の
条では、幕府から能役者に通達さ
れたものの中に、
「各家々に伝へし技芸忍るべか
らず、身におはぬ芸をなさず、ま
た家業の古法を守るべし。」
という一文がある。このような
ことから、能楽の世界における伝
統遵守の傾向が一層強くなり、開
口文を作るに際しても、まず、先
例に従って調章を作っていくこと
を、最良と考えるようになって、
それだけでなく類型化しやすい傾
向を持っていた、祝賀を主旨とす
る開口文は、一定の形式に統一さ
れて行くことになる。加えて、能
の専門家でない儒学者が、開口文
を新作るようになったことも、
類型化の要因であったと考えられ
る。「徳川実紀」によると、正保
以後の開口文は、ほぼ、七五調を
中心とした文体で、短く簡明な内
容になっており、文頭・文末も
「それ」「とかや」に統一されて
いる。
このような類型化の結果、開口
文に類似した表現が多く用いられ
るようになり、どの開口文も特徴
がなく、同じように見えて来るが
それでも、將軍宣下、誕生、元服
婚礼、日光社参、入部など、それ
ぞれの場合に応じて、作者の創意
工夫が、多少なりとも凝らされ
ているのである。これら大札の開
口文の中から、將軍宣下、大名入
部に際して作られた開口文の特徴
について、見ることにする。

將軍宣下祝賀開口
宝暦十年九月二日に、家治の將
軍宣下祝賀能が行なわれている。
その時の開口は、次のように記さ
れている。
「夫君が代は弥高き、大樹の下
の民も、なびきて安きこの時の
天長月の影ひき、松のみどりの
色そへて、めでたかりける時とか
や。」
まず、「夫君が代は」というこ
とで、新將軍の御代が始まったこ
とを示し、「弥高き」と、將軍の
威徳の高きことをとき、その
威徳によって、「大樹の下の民も」
と、將軍を大樹と仰ぎ、その
下に仕える民衆も、「なびきて安
きこの時の」と、將軍の意向に従
い、平安な時を過していることを
たたえ、その御代が、「天長月の
影ひき、松のみどりの色そへて」
と、永遠に変わらなく続くことを願
い、「めでたかりける時とかや」
と、祝賀の文句で結んでいる。將
軍宣下の開口文としては、「大樹
の下の民も、なびきて安きこの
時の」と言った部分が、その特徴
を現わしているところである。そ
の他、「天長月の影ひき」とのこ
ころで、將軍の御代の永遠性と、
陰曆の長月、將軍宣下の月を重ね
た掛詞「長月」の修辭法は、作者
の工夫の見える点である。
。大名入部祝賀開口
延享五年二月十二日、加賀藩主
謙徳院が園入りした時の祝賀の開
口文である。
「夫瑞世は、福祿を永く伝へて
北の海波も長閑に、悦びをくわむ
る家の春なれや、代々の咲がけ此
花の、栄へ久しき園とかや。」
加賀藩の開口文は、管見した範
圍内では、その文頭・文末の形式
は皆同じで、「それ」で始まり、
「園とかや」で結んでいる。幕府
の開口文が、ほとんど「それ」で
始め「時とかや」で結んでいるの
で、この開口文も考えられる。ま
ず、「大和嶋根の道ひろく」と、日本
の国土の広大さを歌い上げ、その
国土を治める天皇は、「仰ぐもた
かき高御座」と、あまりにも崇高
な位であり、「光かしく須明楽
紙は」と、その威光の恐ろしい天
皇の地位をたたえ、「千代の始の
御冠」と、その地位に新帝がつか
れ、永遠の繁栄が始まったことを
ことばき、天皇の即位を祝賀し、
加えて、「千早振神も常盤に護る
らむ」と、神の永遠の加護を上げ
「大官人は諸友に八千代を祝ふ」
と、宮中に奉仕する人々の喜びの
声を伝え、「玉敷の庭にしろせて
豊の雪」と、宮中の庭にしろせて
豊年を祝うかのように、雪が降り
積り、「豊原の名にめでて、四
の夷は真ものふな蛇はさず」と、
日本の美しい豊かな園の名に感嘆
し、その威勢を恐れて、周囲の國
々からは、貢物が後を断たず、そ
の貢物を積んだ船は、蛇を千す間
もないほどである、近隣にも及
ぶ天皇の威徳を祝し、「公民は、
弓波受手末とりどりに、結る三の
くからず、めでたかりける御代
とかや」と、國民は天皇の御代
を祝して、それぞれ貢物を納め、
三つの倉は一杯になる、豊かな平
和な御代であることをたたえる開
口文になっている。
七五調のリズムをとっているこ
と、將軍宣下の場合と同じだが
文章は長く、語句は、「大和嶋根」
「高御座」「須明楽紙」「大官」
「三つの倉」などの特殊な古語、
上代語を多用して、いかにも天皇
の御代始めを思わせる荘重な感じ
を出すように、表現に創意が凝ら
されている。さらに、「千早振神」
と云った枕詞や、「豊の雪、豊原」
原」というような頭韻、「四の夷
は、真ものふな蛇はさず、公民は
弓波受手末とりどりに、結る三の
くからず」と云った対句仕立の
修辭法が用いられている。古義派
の作者が我が部式部源元寛の面目躍
如としたところが見える開口文で
ある。
しかし反面、將軍宣下の簡明な
開口文に較べて、難解な文面とな
り、長文ともなつて、聴衆が短時
間に節付けし、暗記するには、容
易ではなかつたものと思われる。
(筆者は能楽研究者)

義捐金募集能 (第十一回)

十二月二日(日) 午前十時始
熱田神宮能楽殿

- | | | |
|-----|--------|----------|
| 高砂 | 番外 雅子 | 後見 山本 真博 |
| 砂 | 杉村 竹翠 | 地謡 加藤 兵衛 |
| | 福井 啓次郎 | 助川 龍夫 |
| | | 戸松 利作 |
| | | (終了六時頃) |
| 西王母 | 竹内 美佳 | 後見 山本 真博 |
| | 飯富 雅介 | 地謡 加藤 兵衛 |
| | 清水 利元 | 河村 良久 |
| | 杉江 元 | 福井 啓次郎 |
| | 佐藤 友彦 | 鬼頭 三男 |
| 忠度 | 高橋 昭一 | 後見 山本 真博 |
| | 飯富 雅介 | 地謡 加藤 兵衛 |
| | 鬼頭 英二 | 河村 良久 |
| | 柳原 富司 | 福井 啓次郎 |
| | 鬼頭 三男 | 鬼頭 三男 |
| 西王母 | 飯富 雅介 | 後見 山本 真博 |
| | 清水 利元 | 地謡 加藤 兵衛 |
| | 杉江 元 | 河村 良久 |
| | 佐藤 友彦 | 福井 啓次郎 |
| | 佐藤 友彦 | 鬼頭 三男 |
| 瘦松 | 飯富 雅介 | 後見 山本 真博 |
| | 清水 利元 | 地謡 加藤 兵衛 |
| | 杉江 元 | 河村 良久 |
| | 佐藤 友彦 | 福井 啓次郎 |
| | 佐藤 友彦 | 鬼頭 三男 |

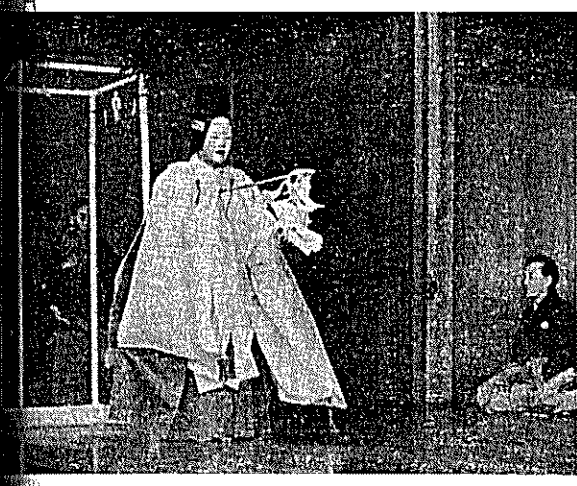
壺泉会能

十二月九日(日) 午後一時始
熱田神宮能楽殿

葛城	飯富 雅介	後見 山本 真博
	井上松次郎	地謡 加藤 兵衛
	福井 啓次郎	河村 良久
	鬼頭 三男	福井 啓次郎
	鬼頭 三男	鬼頭 三男
能	飯富 雅介	後見 山本 真博
	清水 利元	地謡 加藤 兵衛
	杉江 元	河村 良久
	佐藤 友彦	福井 啓次郎
	佐藤 友彦	鬼頭 三男
能	飯富 雅介	後見 山本 真博
	清水 利元	地謡 加藤 兵衛
	杉江 元	河村 良久
	佐藤 友彦	福井 啓次郎
	佐藤 友彦	鬼頭 三男

の友社
種2丁目18-18
464)
7 9 8 4
屋 3 6 3 9 3
年 5 0 0 円
年 8 0 0 円
5 0 円

演能の記録



「三輪」 木村ひでさん
邦国会大会 (54.10.21)



「蟬丸」 横井敬子さん
山本泉氏
邦国会大会 (54.10.21)

和泉保之改め元秀 記念狂言会
11月18日 熱田能楽殿で

狂言方 和泉流十九世宗家・和泉
松次郎(和泉元秀)
「狂言」(和泉元秀)
「狂言」(和泉元秀)

久田鶴正会大会
十月二十日(土) 午前八時半始
熱田能楽殿

邦国会大会
十月二十一日(日) 午前九時始
熱田能楽殿

十月も末になると、能果てた熱田の黒い森の上には月がきれいかかかって心すます。もう熱帯(かんの)季節である。能界の能界と大衆能。名古屋の能界と共にこの二十年を歩いて来た大衆能、今後の大いなる前進が期待される。

秀はか)があった。こちらはこれからはじめた新作上演。出来すぎていると言うのが第一印象。盗人夫婦を生活に追われる夫婦に、有名詞のくり返しで言葉を切り捨てたり、終末の千鳥の転用を切り捨てたり、もう少し淡白新鮮にしたらいい。

春夏秋冬
野村広二

三氏はかの顔触れ。どうも本年一月CBS・ソニーから出たレコードによるらしい。佳かった。小町の序ノ舞に一回使う。大胆な企画だと言えよう。

昭和54年11月・12月放送予定

Table with columns for month, date, program name, and performer. Includes NHK Radio and FM broadcast schedules.

Advertisement for 'Nissendo' (日進堂) optical shop. Features an image of glasses and text describing their services and location in Nagoya.

Advertisement for 'Utsunokusa' (宝生流全曲旅の友) music collection. Lists prices for different volumes and includes contact information for 'Wanya Shoten' (わんや書店).

Advertisement for 'Shimizu' (十松全曲) music collection. Includes a stylized illustration and contact information for 'Shimizu Shoten' (十松全曲).

名古屋観世会 55年度土曜定式能(予定)

名古屋観世会の昭和五十五年定式能は、四回の演能が予定されている。(日曜定式能予定番組は前号既報)

◎土曜定式能

三月二十二日(土)一時始

素謡 竹生島 加藤兵衛
能 藤田 邦久

狂言 片山慶次郎
能 藤井 久雄

能 井上松次郎
観世 喜正

能 船弁慶 観世 武雄

◎第二回
五月二十四日(土)一時始
素謡 葵 上 熊沢恵美子
能 杜 若 関根 祥六

能 藤井 徳三
片山博太郎

和泉宗家後援会 名古屋観光 記念公演祝賀宴

狂言和泉流十九世宗家・和泉保之氏の元秀改名、和泉元彌初舞台の記念狂言会が中部地方では、十一月十八日、熱田神宮能楽殿で開催され、元秀師による「金岡」長男・元彌君の小舞「小山伏」狂言「朝娘」の熱演、宝生英照、観世清和が舞囃子、能に出演、大蔵弥太郎、三宅藤九郎、野村万之丞、井上松次郎、井上礼之助、野村又三郎の諸師が力演して記念狂言会にふさわしく、さわやかな盛会であった。同日午後六時から名古屋観光ホテルで和泉宗家後援会による記念パ



能 鉢 木 ツレ 梅田 邦久
〔会費〕指定席年間一、〇〇〇円、自由席年間八、〇〇〇円

「能面の美」展

三島市佐野美術館で三島市の財団法人佐野美術館では、能楽界を中心とした能面の展覧会を昨年一月十六日まで開催している。

展覧会名「能面の美」
会期十一月二十八日(昭和五十五年一月十六日)(水)
(休館日、毎週木曜日、年末年始は十二月二十四日から一月三日まで休館)
展示品、小面、増女、般若、童子、狸々、猿飛出、小半附、泥獅子など約三十五点、ほか狂言面十二点、唐織など能装束六、開館時間、午前十時～午後五時(入館は四時半まで)

佐野美術館は、静岡県三島市中田町一の一四三、電話三島(〇五五九)〇七二七八番

(FM愛知会長)土屋齊(大垣共立銀行頭取)原沙(名古屋演劇ペンクラブ理事長)の諸氏が一層の成長と発展を期待すると祝辞をおくり、和泉元秀宗家から丁寧なあいさつ、三宅藤九郎氏から感謝のことばがのべられ午後七時半おひらきとなった。

〔写真〕和泉元秀宗家のあいさつと記念パーティー会場

「困った、困った。何かが困った。どれもこれも皆面白い。点のつけようがなく困った。困ったところか結構滑稽じやないか。文句ばかりいうのが能、いやない狂言ではあるまい。しかし「結構でした」のひと言で引き下がるわけにもいかないし、困った。

「それではこちらから誘い水をかけよう。元秀の改名披露狂言「金岡」はどうだ。面白かったのはわかつてるが、どこが面白かった。

の見方も当らずといえども遠からずか。

「クルイの間たっぶり能がかつて、泣き出すところから女房との対話へと、なめらかに地の狂言に移動、女房の顔を絵どった揚句、絵筆を捨てての引込みまで、能のパロディーという皮肉とも、遊びとも、しゃれとも受けとれるこの狂言の面白さを、十分にたんのうさせられた。

「井上祐一(妻)の手堅い助演の功もあげねばなるまい。

「初舞台の元彌は「朝娘」の猿だ。かわいかったね。猿曳き(三

曳き、太郎冠者(佐藤友彦)三人のイキがびつたり合って緊迫感を盛り上げた。

「あとは「種酒」と「二人袴」だ。

「二人袴」は舞(野村耕介)が上出来。おっとりしたういしさが、狂言のテンポまで支配した感じで、快いあと味を残した。もちろん親(万之丞)男(又三郎)のベテラン太郎冠者(大野弘之)の好演はいままでもない。こども万之丞、耕介の父子コンビが去に愛情の裏付けを目立たぬようにしている点を見逃さない。あまりこの点を強調し過ぎるのもどうかと思うが、芸は心の表現である以上当然の成り行きだろう。要は両者のバランスにある。

「古典の場合特に、ということだね。「種酒」は地元元勢(井上松次郎、礼之助、佐藤秀雄)が力演、小品でもあるし、や、印象が弱かったが、大曲と大曲のつなぎ役みたいな恰好で、お客さまに花をもたせたとところ神妙でよろし。

「大蔵弥太郎の「那須語」を忘れまいぞ。骨太でスケールの大きな語り。「金岡」の華麗に對し、これはいぶし銀の味、近ごろでの「語」だった。

「はかに舞囃子「岩船」、半能「高砂」など、観世、宝生の「お祝い」もあって豪華ケンラン、内容外観ともに充実し、和泉宗家の改名披露にふさわしい催しだったな。めでたし、めでたし。(11月18日、熱田神宮能楽殿)

和泉保之改め元秀 記念狂言会

前田 満穂

「大曲というか難曲というか、凡手の手にはおえないしものだが、さすがは元秀、最初の出からして見所の心をつかんだ。勝負は半ばこれで決ったようなものだが僕はあの恋には、けた眼の表情に感心した。歌舞伎とは違った狂言の色気。こんなことをいったら見当違いかね。

「いや、見所の受けとり方は人さまざま、十人十色、どれがいい悪いというものじゃない。「恋よ恋、われ中空になすな恋。」清元の「保名」に同じ文句がある。君

「サアね。おじいさんと孫の共演だから、芸以上に情がうつたのかもね。しかし元彌はあとの小舞でも、なかなかしっかりしたところを見せているから凡庸ではない。教えも教えたり、覚えも覚えたり、というところがかな。

「右近の大名が素ばらしく、猿

料理 蓬菜軒

あつた

本 店 熱田区神戸町三四 電話(初)868618
熱田区新宮坂町一 電話(留)5598(代表)

素謡 井 鶴
舞 筒 亀
熱田 神宮 能楽 殿

檜書店

流元 剛行 流本 金流 世宗 観宗

〒101 東京都千代田区神田小川町2-1
〒604 京都市中京区二条通麩屋町東入

電話(291)2488-9
電話東京3-35552
電報東京(231)1990
電報京都113

龍白藏酒

元直營

白龍本店 名古屋市北区深田町
電話 911-7572

城

割烹・小料理

●熱田神宮能楽殿喫茶部
●住吉小路(中区栄3-10)
電話 241-0248
●喫茶・グリル(愛労祥地下ビル)
電話 731-1128

中華料理 桃源亭

御宴会・御集會・御商談等には是非御座敷を御利用下さい

中区栄三丁目29(松坂屋南) 電話 241-2938・6081
支店 名鉄百貨店9階 のれん茶屋

義捐金募集能

第11回・能楽協会名古屋支部主催
12月2日 能4番上演

熱田 神宮 能楽 殿

十一月十八日(日)午後一時始
熱田 神宮 能楽 殿

舞囃子 岩 船
宝生 英照
吉田 定男
後藤 孝一郎
助川 龍夫
藤田 六郎兵衛